

ブルーノート 一文の恋
恵陽 illustration 東雲一

天使の夢は地上を翔る
柚希実 illustration damo

恋人の石 ~<荒れ地の民>の物語~
冬木洋子 illustration 恵陽

炒り豆をめぐる冒険
GreenBeetle illustration 女将

どんしゃどしよ!

正しい夏のつくりかた
中井かづき illustration あから

さよならいぬの声
河田直樹 illustration 村崎右近

河を渡る
椎堂かおる illustration 塩

音が響きわたる場所
村崎右近 illustration 女将

vol.1

はじめに

* オリジナル小説誌 *

新人からベテランまで、ネット小説界で活躍中のみなさんの作品を集めたオリジナル短編小説誌です。
ライトなコメディから重厚な本格派ファンタジーまで、作家の皆さんが、全魂を込めて書き上げた名作・傑作・快作・秀作の数々をぜひご堪能ください。

* 対象年齢 17 歳以上 *

読者対象として 17 歳以上を想定しております。

対象年齢以下の方の閲覧を禁止するものではありませんが、作品の中には物語の性質上、性愛に関する話題や、流血を伴う暴力描写などを含むものもありますので、保護者の方は適切なご指導をお願いいたします。

対象年齢以上であっても、性愛に関する話題や流血を伴う暴力描写が苦手な方は、閲覧をご遠慮くださいますようお願いいたします。

* コメント歓迎 *

作品への応援メッセージは作者の励みになります。気に入った作品がございましたら、ぜひコメントをお願いします。

コメントをいただく場合は、どの作品（または表紙絵）へのコメントかわかるように、「作品名（本文 or 表紙）」を明記のうえお願いします。

作品概要

ブルーノート 一文の恋 恵陽 / 東雲一

佐藤君、好きです。校舎の片隅に置かれた一冊のノートに書き込まれた短い告白文に始まる小さな騒動。 爽やかな学園青春ストーリー

天使の夢は地上を翔る 柚希実 / damo

漆黒のユニフォームに身を包み颯爽と地上に降り立ったクールな天使のホットなお仕事 コミカル現代ファンタジー

恋人の石 ~ 荒地の民 の物語 ~ 冬木洋子 / 恵陽

私の恋人は真紅の石になった。私の胸を焦がし魂までも燃やし尽くしてしまいそうな、炎の色をした石に 珠玉の異世界ファンタジー

炒り豆をめぐる冒険 GreenBeetle / 女将

恋人に逢うためにはるばる旅をしてきたリーナを待っていたものは、都会の魅惑と、とんだトラブル！？ パワフルなライトノベル

正しい夏のつくりかた 中井かづき / あから

ほたるはニセモノが嫌い。見せかけだけの物があふれる宇宙暮らしの中で、本物を求めて奮闘するのだが..... キュートなライト SF

さよならいぬの声 河田直樹 / 村崎右近

死んじゃだめよりリ！！ 愛犬の死を受け入れられずにいた女性が体験した、それは不思議な出来事。 心にしみる現代ファンタジー

河を渡る 月下世界紀行 椎堂かおる / 塩

旅人が密林の大河で見たものは、運命の奔流に抗おうとする命の鮮烈な輝きだった 名作異世界ファンタジー

音が響きわたる場所 村崎右近 / 女将

その男の名はもぐらひとりの少女の夢を守るために、無敵の男が放つ弾丸が砂漠の空気を切り裂く！！ 痛快 SF アクション

ブルーノート 一文の恋

——佐藤君、好きです。

校舎の片隅に置かれた一冊のノートに書き込まれた
短い告白文に始まる小さな騒動。

爽やかな学園青春ストーリー

恵陽
illustration
東雲一



南中学校の図書館棟二階、職員棟との連絡通路手前に机が置かれている。その上には一冊のノートがある。表紙に赤い線が入った何の変哲もないキャンパスノートだ。そのノートは通称をブルーノートという。

国語科の教師が置いたブルーノートは生徒の誰もが好きに書き込むことが出来、そして読むことが出来る。当初は生徒たちが自由に書き込んでノートの中で様々な問題提議をし、また解決していくことを望んだがその思惑は簡単に外れた。

最初のひと月はまったく書き込みがなかった。次のひと月は程度の低い落書きがされた。更に次のひと月には無記名なのをいいことに特定の生徒の悪口が書かれ始めた。さすがにまずいと撤去も検討されたが、ある一文によって、ブルーノートの中身は一変した。

それはそう、ある恋の告白から始まった。

1、佐藤春生の否定的恋心

ブルーノートのことは知っていた。だけど俺がそれを実際に目の当たりにしたのは、告白があってから随分後のことだった。

ブルーノートに書き込まれた告白はこうだ。

佐藤君、好きです。

この、たったの一言。

俺は最初にそれを聞いた時、悪戯かと思った。だが告白の話題はヒートアップしていった。しかもそれは本当の告白だったらしい。だから友達との会話の中でその話題になった時にブルーノートを読んだことがないと言ったら、半ば強制的に連行され見せられた。そこには確かにかわいらしい女子の字で告白文が書かれていた。

どうだ、と感想を求める友達だったが俺には反応の仕様がなかった。だって、だってだ、佐藤なんて名字の奴は俺以外に何人もこの学校にいる。それなのに、名字だけで俺だと自惚れることは出来ないだろう。第一確率を考えたら俺じゃない方が高い。それなのに一体どんな反応をすればいいんだ。

「つまんねー。佐藤、ここ見てみるよ」

誰もお前を喜ばせるつもりはないんだから、俺としては当然の反応をしているだけだ。溜息はきつつページをめくる彼の指を目で追う。そこには二年の佐藤からのコメントが寄せられていた。

告白の相手は二年の佐藤じゃありませんか？ それも僕だったら嬉しいです。

そりゃあ、曲がりなりにも俺も佐藤の端くれだ。同じ佐藤としてその気持ちはよくわかる。だが見せられても、俺であるはずがないだろう。

「お前はこれ見てもなんか感想ねーのかよ」

「だってなあ。佐藤ってうちの学校多いじゃん」

俺だって、もしも自分だったらと思わないわけじゃない。だけど俺、結構自分のこと知ってるんだ。女子からは単純だって思われてることとか、運動しか出来ないってみんなに知られてることとか、あと俺の顔は人並みだってこともわかってる。だから期待はしない。それに今はそれほど彼女が欲しいと思ってないのも理由の一つだ。

「多くてもそこはときめけよ」

不満げな友達に俺は段々うんざりしてきた。こんな所で謂われのない責めを受けるよりか外でサッカーをしていたい。

「気持ち悪いこと言うな」

「ちえー。佐藤って女子に興味ないのかよ。もっと顔真っ赤にして慌てるかと思ってたのにマジつまんねー」

「うるせえ」

何を言われたところで直接告白されたわけではない。それでは慌てることも出来やしないさ。

俺は隣で文句を言い立てるクラスの友達に嘆息しながらブルーノートのもとを離れる。そもそも、それが本当に本当の告白かも怪しいというのに、一々喜んだり哀しんだり振り回されてたまるものか。

俺はそうしてブルーノートのことを忘れたんだ。

暫く周囲で話題にのぼらなかったブルーノートの告白を、俺が再び思い出したのは学校についてすぐにその話題を耳にしたからだ。普段はそうしょっちゅう口にしない男子も混じっているのをみると、今回は何か大きな進展があったらしい。

「告白の続きはどうなったんだ？」

皆が口々に言っているけど大して興味なかった。とりあえず経過だけを聞いておこうと俺は訊ねる。すると教室中の人という人が俺に白い目を向けてくる。これにはさすがの俺もたじろいだ。向けられる視線は普段よりずっと冷たかった。

「佐藤、知らないの？ 当事者かもしれないのに」

「はあ？」

比較的仲のよい女子が馬鹿にしたように俺を笑う。当事者とはどういうことだ。遂に名字だけでなく名前も出されたのだろうか。

「告白相手の佐藤が二年じゃなかったのは知ってるでしょ？」

「……」

二年の佐藤が告白に対して書き込んでいる文章はおぼろげに覚えているが、その返事は知らなかった。答えられずに戸惑っていると彼女は呆れた様子で事の成り行きを教えてくれた。

「……告白さんは二年生じゃないって返事をしたのよ」

「へえ」

じゃあ、一年生に別の佐藤がいるのだろうか。興奮するでもなく続きを待っていると、彼女は再び眉をひそめた。

「反応が薄い！ 佐藤って恋愛がらみは興味ないのね。遊び甲斐もなくていやになるわ」

「お前らは一体俺に何を望んでんだよ。まったく」

盛大に溜息をはくと、ようやく彼女が先刻の続きを話し始めた。

「……あの後は憶測が色々飛んでたのよ。二年生の線は消えたから、残った一年と三年でどの佐藤かって予想。誰が一番格好良いかってノートの中で討論してたのよ」

それこそ一番どうでもいい。しかも議題に挙げられたものとしては余計なお世話でしかない。

「でもさー、結局告白さんが返事をくれないと話も盛り上がらないわけ」

「まあ、そうだろうな」

「でしょう。そこに今度は一年生の佐藤君は格好良いですよ、って誰かが書き込んだの。そしたら一年生の佐藤君は知らないって答えが返ってきたのよ。そうしたら残るは三年生しか居ないじゃない」

ついさっきまで不機嫌な面をしていたのに、彼女の頬には赤みさえ混じっている。うんざりする俺とは反対に彼女は目を輝かせている。

「だからこの五組の佐藤であるあんたか、一組か七組の佐藤が相手なのよ」

すごいでしょう、と言わんばかりの笑顔に俺は目を瞬かせる。そのまま数秒経過して、彼女の眉がぴくりと動いた。

これはまずいと思ったが、その判断はもう遅かった。

「少しは驚くとかさあ！ それか照れるとかしてよう」

「出来るかよ」

どうもみんなが俺にはもっと大げさな反応を期待しているらしい。俺は深い溜息をはいた。

みんなに感化されたわけではないが、少しだけ気になってブルーノートを見に行った。すると放課後だというのに幾人かがその周辺に集まっている。そして色々と言合っているのがわかる。特にどの佐藤か、という予想が一番の話題ではないらしい。

漏れ聴こえる会話に俺は首を傾げた。

「えー、どうせならして欲しい」

「だよねえ。そんでうまくいったら漫画みたいだね。ホント気になる」

「ねー。どうするんだろ」

会話の意味が飲み込めない。俺はどうしたもんかとその場で立ち尽くす。

「あ、れ？ 佐藤？」

背後から呼びかけられて振り向いた。だがそれ以上に佐藤の名に反応した人たちが他にもいた気がする。

「あ、お前もやっぱり気になるんだ」

「別に。ただみんなが騒ぐからさ」

振り向いた先には元クラスメイトの野宮がにたにたと笑って立っている。いやらしい笑みを浮かべる彼に来るんじゃなかったと後悔した。だが野宮は俺の様子など無視して話を進めていく。

「それにしても驚きの展開だよなあ。みんなが煽ったとはいえ、乗っかってくれるとは思わなかったぜ」

楽しそうな野宮の表情だが、その意味が俺にはまだわからない。

「絶対告白の主は大人しい子だろうけど返事があるとはな。でもそうすると、やっぱりどの佐藤かが問題だよなあ」

そう言ってにたにたと眼鏡の奥の目がまだ笑っている。だが俺が怪訝な表情をしていることに気付くと、少しだけ笑いを収めた。

「佐藤……もしかして知らないのか」

野宮のしかめた顔に俺はこっくりと頷いた。

「あはははは！ お前、なんちゅー馬鹿だよ。勿体ねえ、折角佐藤が話題になってるんだから渦中にいるよ」

今度はさっきとは比べようもないほど大きな声で笑い始めた。しかも俺の背中を容赦なく叩きまくる。段々この態度にも慣れてきてしまった。だが野宮は俺の疑問に答えてくれた。

「ブルーノートの中でな、告白はしないのかって話が出てるんだ。頑なにしないって言ってんだけどさ。だけど三年はもうすぐ卒業だ。それに何もしないで諦めるのはどうかって諭されてるところ。みんなが告白したらって勤めてるけど、まだ返事はきてないみたいだ」

もうそこまで話が進んでいたのか。俺もさすがに驚いた。

「ま、そんなわけでみんな注目してるのさ」

野宮は俺の頭にポンと手を置くと、何事もなかったようにこの場から離れていく。俺もその背を追うようにブルーノートから離れた。一回だけ振り返るとまだ、人が集まっていた。返事が来ていないとしても、気になる人は多いらしい。確かにどの佐藤かは俺も少し気になってきた。初めの時と違い、俺である確率も格段に上がってしまったのだ。しかも周りがやたら騒ぎ立てるせいでその熱が伝染したかのように奇妙

な高揚感がある。今日はもうさっさと帰って布団に入ってしまう。

そう思って過ごした翌日。

俺は机の中に手紙を見つけた。

2、真崎奈緒の予期せぬ事態

どうしてこんなことになってしまったのか。過去に戻って自分を引き留めたい。穴があったら入りたい。もう顔から火が出そうなほど恥ずかしい。今更だけれど、ひどく後悔している。

ブルーノートが出来たと聞いた時すぐにノートを開いてみた。それは何ヶ月も前の話。その時はまさかこんな大事になるなんてまったく思ってなくて、本当に困り果てている。でも自業自得に違いない。本当にあの時は魔がさしたとしか思えない。どうして私はノートに告白文を書こうとなんて思ったんだろうか。

ブルーノートは図書室の傍にあったから、私は時々それを開いて見ていた。けれど書き込みは全然なくて、あったかと思うと誰かの悪口だったり落書きだったりで少し寂しかった。真面目に見ている人なんてきっと私だけなんだと哀しくなった。そしてふと思ってしまった。私も何かを書こうと。だからって告白文なんて書かなきゃよかったのに、何故か書いてしまった。告白するつもりなんてなかったから、つい言葉にしなくても文字として残したくなかったのかもしれない。それに私の予想では悪口の中に埋もれて、誰にも相手にされないまま忘れ去られるはずだったんだ。

それなのに今、学校中で話題にされているのは私の告白話なのだ。不思議というか、もう笑うしかない。そして後悔でいっぱいなのに、私は今日もブルーノートの前に立ってしまっているのだ。

私の書き込みに返事があったのは私が書き込んでから一週間も後だった。だけど書き込んでから、それまであった悪口はなくなっていた。そのうえでの返事である。

あんた、誰？

短い誰何の言葉に驚いた。同時にどうしてか嬉しさも感じた。

だけど私は自分のことを知られたくなくてそれに返事をすることはなかった。なのに、その後もぼつぼつと増えていく書き込みに私は何か答えなくてはと焦りを感じて、本当のことだと書いてしまった。もしかしたらあれが引き金だったのかもしれない。その後から一気に書き込みは増え、教室で話題にする人も増加した。それは例外なく私のクラスでも。

教室内ではどんな風に思われているのか気になって耳をそばだててばかりいた。だから佐藤君の声も聴こえてしまった。友達とブルーノートのことを話している佐藤君は告白に対してたった一言の感想しかくれなかった。

曰く、興味ない。

それはそれで寂しくて、私はひそかに落ち込んだ。

私にとって佐藤君は明るい太陽のような人だ。運動が苦手な私でも楽しそうにサッカーをしている佐藤君を見ていると体を動かしたくなってくる。いつも笑顔で、友達と楽しそうに笑っていて、こっちまで元気になる。休み時間に校庭でサッカーをしている佐藤君は私にとって眩しくて仕方がないのだ。サッカー

だけじゃなくて運動全般が得意で体育大会ではしなやかな走りも見せてくれた。その時の真剣な表情は普段と違って凛々しく見えたものだ。それに、佐藤君はやさしい。私に限ったことじゃないけれど、気軽に話しかけてくれるのが嬉しい。名前を呼ばれるだけで飛び上がってしまいそうになるのだ。だけど告白をする勇氣はない。だというのに、私はブルーノートに書き込んでしまった。

それ以来、私は日々ブルーノートと向き合わなければならなくなった。それはある意味耐え難い苦痛を与えられているようにも思えた。

ブルーノートの書き込みの内容は時間が経つにつれて少しずつ変化していた。初めは私のこと、次に佐藤君の搜索。そして告白の行方へ。

告白はしないんですか？

出来るわけがない。その書き込みを見た瞬間倒れそうになった。出来るのなら、こんな所で伝えずに直接告白しているはずだ。だから私はするつもりはないと、伝える気は初めからなかったのだと返事をした。すると何故か、おそらく女子からの書き込みが激増した。それはもう、怖いほどに真剣で、私は自分を恥じた。

そこには純粋な応援と少しの好奇心と、私への配慮があった。意味もなく告白をしると言っているのではなく、後悔するからという理由で勧める人が多かった。自分の実体験を持ち出して説得に乗り出す人まで現れて、私はどうしようもなくなってしまった。そんな勇氣があるはずないのだ。ただ自分のうちだけで完結するのも寂しいと思ったから、埋もれてもいいとブルーノートに書いたのに。

放課後になってみんなが帰った頃を見計らい、私はブルーノートの前に立った。暗くなり始めた空の下で、私は一人ノートを手に取った。

好きだってことすらも伝えられない人もいる。

三年生はもう卒業しちゃうんだよ。もし彼女が出来たら絶対悲しいって。せめて自分の想いだけでも伝えようよ。

私は告白の前に相手が転校して、すごく後悔した。だから告白さんに同じような気持ちは感じて欲しくないな。

なんでも踏み出してみないとわからないよ。もしかしたら佐藤も告白さんを好きかも知れないんだから。

泣くことを考えるんじゃなくて、笑って次へ進めることを考えたら？

僕は告白さんの恋を応援するよ。

そうよ。みんな応援してるから。もし振られるようなことになっても、ここに来てよ。みんなでなぐさめるよ。

ガンバレ

ファイト、一発！

がんばって。

勇氣出して。告白しようぜ。

応援してるよ。

伝わる。伝わってくる。

鼓動が外に聞こえてしまいそうなほど大きい。みんなの言葉が私の心臓にまで響いてくる。

どうしよう。涙が出ちゃいそう。勢いあまって鼻水も出そうになり、鼻を吸る。

一つ一つの文字が私の中に熱をもって入り込んでくる。ここには私一人なのに。暗くなった廊下にたった一人。なのに、みんながいる。言葉が実感を伴って私の心を揺らす。

ああ、どうしよう。嬉しくて、本当に嬉しくて、もう死んでしまいそうだ。胸がいっぱいで、頭はくらくらと熱い。ただの文字なのに視界がぼやける。拭っても、拭っても溢れ出てくる涙。

暗い廊下に一人きり。だけど一人じゃない。

ブルーノートが私に勇気をくれる。私は泣き顔を隠すようにブルーノートで顔を覆った。

その朝はいつもよりずっと早く起きた。いつもよりずっと早く家を出て、学校へ歩き始めた。

早鐘を打つ心臓を、紅潮していく頬を感じながら私は教室の扉を開ける。私は誰もいない教室にゆっくりと足を踏み入れた。

3、野宮章吾の期待する結末

僕はブルーノートを手取る。

朝の早い時間にはさすがに誰もいない。暇つぶしではじめたブルーノートの確認はいまや楽しい日課になっていた。読み始めたのは告白の後からだが、なかなか面白い。僕ら男にとっては女子の思考は未知の世界だ。それをこのノートは教えてくれる。女子が恋バナで騒ぐ気持ちも少しわかった。告白の行方が気になって仕方ない。ドラマなどではない、現実だというのがどうなるかとハラハラとさせてくれる。生身の物語だ。

「お、野宮」

職員棟から国語の蓮見がゆったり歩いてくる。彼こそがこのブルーノートを置いた人物だ。

「進展あったか？」

「ノートの中じゃなくて現実での告白コールがされてますよ。すごい女子の書き込み。でもこれ見たら、本当に告白しちゃうかもしれないですね」

「へえ、それはそれは」

微笑を浮かべる蓮見は嬉しそうだ。朝の日課が出来てから、同じように蓮見も日課にしていることを知った。それでなくても自分の置いたものだ。気になるのは当然だろう。

「聞いてみたかったですけど、先生？」

「ん？」

頭を傾げる蓮見に僕は兼ねてからの疑問をぶつける。それはとても単純で、だけどどうしても不思議だったことだ。

「ブルーノートってネーミングはどっからきたんですか。これ、普通に僕らが使ってるやつと同じノートじゃないですか」

もっと洒落た名前でも付ければいいのにと常々思っていた。しかも色もブルーではない。定着してしまっているので今更な疑問ではあるのだが気にはなる。蓮見は笑顔のままではにかんだ表情で答えた。

「だって青春は青いものだろう」

「……そ、それだけ？」

「それだけです」

なんて理由。ブルーノートのブルーは青春の青だったのか。これならば聞かない方が夢があってよかった。僕は疑問を口にしてしまった自分を呪いたくなった。

「それより、先生にも見せてくれよ」

僕の手からひょいとノートを奪い、蓮見はページをめくる。ここ数日間はずっと告白して欲しいという書き込みばかりだ。だけどそれはどれも期待に彩られていて、告白の主を後押しする。告白の主はこれを読んでいるだろう。どう思っただろうか。それを僕もみんなも聞きたい。

昼休みになってぼんやり告白の行方に思いを馳せていた。告白の主が誰かはわからないが、見てくれているといいなあと思う。正直蓮見の言う青春はどうかと思うが、ああいうものがあると学校にも楽しみが出来る。まったく、面白いことをしてくれたものだ。

と、同じようにぼんやりしている人物を目の端に捉えて、僕は視線を動かした。昼休みなのに校庭に出ていないのは珍しい。五組の佐藤だ。あいつにはブルーノートの顛末を先日話したばかりだった。

「佐藤」

窓枠に肘をついている佐藤に話しかけた。だがまだ呆けて空を眺めている。本当に珍しい。

「佐藤、どうした？」

「うお！ 野宮か。びっくりしたー」

びっくりしたのはこっちのほうだ。僕はじと眼で彼を見た。

「なんか魂抜けてるぞ。どうした？」

訊ねると口をへの字に曲げて情けない顔を作る。変な顔だ。口を開こうとしない佐藤の手許に視線を走らせるとくしゃくしゃに握りつぶされた手紙らしきものが目に付いた。

「……手紙？」

僕の呟きに佐藤は大げさなほど反応した。俺の口を自身の手で塞ぎ、顔を真っ赤にさせて睨みつける。どうやらそれが放心の原因らしい。

「なんだ、今時ラブレターか。古めかしいことする奴もいるもんだなあ」

「……誰にも言うなよ」

「返事はしたのか？ それがブルーノートの告白さんからだったら面白いんだけどなあ」

「うるさい」

「ふぎゅっ」

佐藤を無視して勝手に話していたら頭を叩かれた。佐藤の顔は面白いくらいに真っ赤だ。体中の血液が全部顔に集まっているんじゃないかと思うほどだ。しかしこの反応。もしかして、もしかするのか。

「……当たりか？」

視線を逸らして無言で頷く佐藤に俺は思わず口笛を鳴らす。ということは告白の主はブルーノートの書き込みを読んだのだろう。そして腹を決めたのだ。けど肝心の佐藤の返事はどんなものなのだろうか。この様子からも多少の状況は窺い知れるが僕は口に出して訊ねてみた。

「返事はしたのか」

ふるふると彼は頭を振る。やはりまだしていないのだ。悩んでいる様子だったのでそうだろうとは思ったが、どういう返事をするつもりなのか非常に気になる。

「明日まで待ってもらった。驚きすぎて頭真っ白になった」

まあ、それはもし僕が当事者でもそうなると思うが　僕は佐藤の手に眠る手紙を見やった。相手は誰だったのだろう。

「どうすりゃいいんだよ」

情けなく頭を抱える男に僕もどうすればいいだろうかと考える。出来るなら返事はよいものをして欲しい。だが佐藤が嫌っている相手だったら無理強い出来ない。そもそも佐藤はその相手をどう思っているのだろう。

「どうするも何も、告白の主はそんなに悩まないといけない奴なのか？ ブサイク？ あ、性格ブスとか？ それともお前はそいつが大っ嫌いなわけ？」

「べ、別に真崎のことは嫌いじゃなっ」

慌てて口許を手で覆うがもう遅い。しっかりと僕の耳に真崎の名前は届いてしまった。つい抑えられずに口角が上がる。こんな楽しい事態に感情を抑えられているか。

「そっか。真崎か。ふうん」

「な、なんだよ。悪いのかよ」

覆った手の下からくぐもった声が弱々しく答える。悪くはない。むしろいいんじゃないかと思う。予想通りに告白の主は大人しい女子だった。だからブルーノートの中でひたすら告白を否定していた。それは自分に自信がないからだ。告白する勇気がないからだ。真崎は図書室の常連だと聞いたことのある。それならブルーノートのようなものに興味を持ったのも少しわかる気がする。

僕はどうすればこの恋が成就するかと考える。相手が別の佐藤なら迷わず頷きそうだけど、ブルーノートに一切興味を持とうとしなかったこの佐藤だから、迷っているのだろう。どれだけの想いを真崎が抱いていたかわかれば、と思って僕は変化球を投げてみる。

「佐藤」

「.....なんだよ」

声はもう憔悴している。笑いたくなるのを抑えて、僕は言葉を続ける。

「ブルーノートは読んだか？ この間会った時も結局は読んでなかったよな」

佐藤は視線を彷徨わせていたが、僕が真面目に話し始めたことを察したようだ。僕を真っ直ぐに見据えた。

「初めからずっと読んでみるよ」

「はあ？」

「あれはお前には結構価値があると思うぞ。それに普通に読んでてもちょっと感動する」

人の気持ちの純粹さ。取り巻くみんなのあたたかさ。それに励ましと叱咤。

ブルーノートを読んだ後には例えようなない気持ちが湧いてくる。それを佐藤は知らないのだ。ならば是非とも知って欲しい。

「いいから。ブルーノートを読んでから返事をして遅くないだろう」

僕はくしゃくしゃにされてしまった手紙に目をやって、佐藤に微笑した。

放課後はぎりぎりまで残っていた。明日の朝でもきっとよいのに、僕にしては珍しく我慢が出来なかった。図書室で宿題をして、それが終わると本を読んで過ごした。そして校門が閉められる前に職員棟の連絡通路の方へ足を向けた。そこにはそう、ブルーノートがある。

佐藤は読んだらうか。きっと読んだと思う。単純な奴だから誰かに読んでみると言われたら、言われたままに行動してしまうのだ。あれを見てどう思っただろう。僕だったら勢いのままに返事を書き込んでしまう気がする。だけど佐藤にそんな芸当は期待出来ない。ただブルーノートを開いて、真崎の心や応援しているみんなの気持ちを感じてくれればいいと思う。すごく、思う。それに僕だって応援しているうちの一人なのだ。

佐藤の意思がどう転ぶかわからないのが難点だが、だから自然と願ってしまう。ノートに書かれた一文

から始まったこの恋が、綺麗な形で終わるのを僕は見たい。

連絡通路の手前の机には無造作にノートが置かれている。

僕はブルーノートを手に取った。開く為にいつもよりやや時間を要した。僕もさすがに緊張しているらしい。そしておもむろに最新のページを開いた。

瞬間、飛び込んできたのは大きめの文字。のびやかに、穏やかに、明るい性格をそのまま表したような彼らしい字だ。

僕の頬は自然と緩む。そうだ、これが僕の見たい告白の行方だ。ブルーノート、いいじゃないか。蓮見の言う青春が確かにこのノートにはある。朝は否定したけど、今この時になって思えば悪くない。全然悪くない。

僕は改めて一番新しい書き込みを見た。暗がりに浮かぶそれは僕の目には輝いて見えた。とても眩しくて、目がくらんでしまうくらいだ。

にやにやと顔が笑うのをとめられない。この気持ちを表すには一つしかない。そう、これしかないだろう。

祝福の言葉を書き込むべく、僕は備え付けのペンを手に取った。

文：恵陽（けいよう）

http://www.geocities.jp/keiyo_u/top.html

現代、ファンタジー、恋愛、友情、青春、などなどとりあえず書きたいものを書いています。楽しんでもらえるお話を書いていきたいですね。今回絵描きの方でも参加予定です。

絵：東雲一（しののめ・はじめ）

<http://cls.moryou.com/>

東雲と申します。

普段は#twnovel や詩や短編などを書いているますが、今回は絵師で参加です。

PCで絵を描き始めたばかりで、まだまだ絵をかく技術は拙いのですが、楽しそうな企画なので力いっぱい良いものにしたいです。よろしくおねがいします。



漆黒のユニフォームに身を包み
颯爽と地上に降り立った
クールな天使のホットなお仕事♡
コミカル現代ファンタジー

柚希実
illustration
damo

天使の夢は 地上を翔る

光の川が緩やかに流れている。観光客がいる展望台からは、出勤する人々で溢れた朝の喧噪が、そんな風に見えるらしい。その川の中、雲上を歩いている俺にも、それぞれの頭にある輪や金髪が輝いて、美しいのは確かだ。

とはいえ、通勤途中の俺にとっては、ただの人混みに過ぎなかった。しかも今は、早足で歩く周りの人たちをひたすら追い越しながら先を急いでいるため、その風景を乱す迷惑な奴になっているだろう。

だが、そんなことは構いやしない。間に合うか間に合わないか、それが問題だ。

「お？ 君はうちの社員じゃないか」

俺を呼び止めた恰幅のいいスーツの男は、幸福保護株式会社天上支所の所長、つまり俺が勤めている会社のお偉方だった。遅刻ギリギリのタイミングで、やっかいな奴に出くわしてしまった。

「所長、走らないと間に合いません！」

「おお、そうか」

返事をした所長も俺に倣って走り出した。が、遅い。意を決して所長を引き離そうとしたとき、プヨッとした手が俺のスーツをつかんだ。ぐいと後ろに引っ張られ、勢いで前に飛んでいきそうになる頭を押さえる。危なく鞭打ちになるところだ。

「おいていかんでくれ」

所長は、うるうると涙を溜めた瞳で、目と鼻の先から見上げてくる。俺はその縋るような視線を避け、所長の後ろに回った。

「とにかく走ってください！」

風を受ける面積が広いからか、そっくり返って走る所長の背中を押しながら会社を目指す。朝から災難だが、あと五十メートルほどの距離で助かったと思い直した。

会社に駆け込むと、位置的に俺の前にいた所長が、まず網膜認証機器に瞳を当てた。ピッと小気味よい音を聞いてから、俺も慌てて認証を試みる。覗いた先に、定時五秒前で登録された表示が浮かび上がり、ホッと胸をなで下ろした。

「間に合ったのか、よかったな」

よかったなもなにも、俺がギリギリだったのは所長のせいだ。

「これで君も食いつぱぐれなくて済むな」

いや、所長は会社にいればいいのかもしれないが、俺は仕事をしないと食いつぱぐれる。

下界の人間たちが幸せを取り落とししたら、その分下界のそのまた下にあるライバル会社が潤ってしまう。それを防がなくては、倒産の憂き目に遭ってしまうかもしれないじゃないか。この微妙なバランスが崩れたら、世界の幸福経済全体が狂ってしまう。

「助かったよ、ありがとう」

「いえ。では」

ニコリ笑って手を振る所長を背にし、俺は所属する恋愛七十三課へと急いだ。ドアを開けると、モニターが整然と並んでいるいつもの光景が目の前に広がる。

このモニターに映し出されているのは、幸せを手放してしまいそうな人間たちだ。どれもこれも、俺の同僚たちが対処しているところが映っている。それに対し、画面と向き合っているのは内勤の人たちだ。頭には俺たちの特徴である光の輪が乗っているが、画面はその光が反射しない特殊な素材でできている。

俺はそのモニター群を左に見ながら、右奥にある出勤待機室へと向かった。

待機室は実動隊員個人の部屋に細分されている。俺は三メートル四方ほどの自分の部屋に入り、ユニフォームに着替えた。身体にフィットするこの黒いウェアは、着ると頭の輪が見えなくなる仕組みになっている。暗い中で輪だけ目立つと都合が悪いからだ。それに、このユニフォームには打撃軽減機能やら透

明機能やら、色々便利な機能が付いている。仕事には欠かせない。

それからもう一つ欠かせない道具である翼の点検に取りかかった。すでに専門の整備員がメンテしてくれているのだが、なにせ翼には俺の命が掛かっているのだから、自分の目で見ておかないと気が済まない。

一通り点検を終えて翼をコンソールテーブルにセットすると、俺は一息ついた。これでいつでも出動できる。それまでは完全に俺だけの時間を過ごせるというわけだ。

コンソールテーブルの前のボタンを押して少し待つと、側の小さな扉が開いて熱いコーヒーが出てくる。俺はカップを手にとると、その香りを体内へ導き入れた。

なんでもボタン一つだ、いい時代になったものだと思う。ただ、この仕事は科学がいくら進んでも、ボタン一つでは済まないのだが。

それでも、一昔前は小さな翼を付けただけの裸で行われていたこの仕事が、科学の進歩と共にユニフォームが開発され、翼は自動操縦も付き高性能になっている。当然、赤ん坊の姿だった俺も成長したし、今では精鋭の一人に数えられるほどになれた。昇進も近いだろうと噂されている。

が、名前はまだ無い。所長までとはいわなくても、ある程度のお偉方にならないと、個人の名前を貰えないのだ。横に育った所長の名誉のため、彼の名前は口にできないのだが、実は下界の誰もが知っている有名な大天使だったりする。できることなら俺もそこまで上り詰めたい。

コーヒーが半分ほど減ったとき、壁のモニターが音を立てて通電した。先ほどのモニター室にいた一人が映っている。俺はテーブルと一体化しているコンソールで交信を開始させた。これで向こうにも映像が行き、話が通じるようになる。

「どうした？」

「案件 NO.573494 に出動要請です」

俺の指がコンソール上を走り、その数字を条件反射的に打ち込む。割れてしまうはずだったグラスを愛おしそうに抱きしめる女と、彼女を冷たい目で見下ろす男がモニターに映し出された。二人とも三十歳前後だろうか。

「割れるはずのグラスが割れなかったという報告を受けています」

その言葉を聞きながら、俺は翼のコードを引き抜き、背中に取り付ける。

「了解、出動する」

「準備は？」

「OK だ」

返事をしながら、左目だけのゴーグルを手にとった。

「では、開けます」

「ラジャ」

シュンと小気味よい音を立てて、床が消える。俺は落下していく中でゴーグルを付けて体勢を整え、翼を作動させた。

左目だけのゴーグルの隅には、彼らの現状が映し出されている。背筋が寒くなるほど冷たい、無言のケンカだ。だが、ゴーグルには彼らの感情が字幕になって浮き上がっているのだから、俺には手に取るように状況が理解できる。

彼との大切な思い出のあるグラスが割れなかったからホッとしたのだと、彼女はなぜ言えないのか。それをまた、別れ話でホッとしたのだと勘違いしている男も男だ。そのグラスがなんだったのか思い出すだけで、全てが氷解するのに。手を出すことすらアホらしい事件だ。

ことがこじれないうち、一分一秒でも早く現場に到着したい。俺は空気抵抗を極限受けられない体勢を取り、加速スイッチを押した。

現場に着いたとき、すでに二人は離ればなれになっていた。こうなってしまっただけは著しく面倒臭い。俺は翼を仕舞い、戸が開いたままの玄関でうずくまっている彼女の前に姿を現した。なにより先に、まずは報酬の約束を取り付けなくてはならない。

現場に集中するため、上との音声を切る。放心していた彼女の視線が、足元から上がってきた。目が合ったことで、彼女にこちらが見えていることが分かる。

「きゃああ!? 誰!? あんた誰!!」

俺が近くに立っていることに驚いたのだろう、目の前が黄色い字幕でいっぱいになった。左目が見えなくなり、俺は慌てて字幕機能を切る。

「おどかしてしまって申し訳ない。私はこういう者です」

ユニフォームのポケットから名刺を取り出し彼女に差し出す。彼女は俺の顔と名刺を交互に見つつ、おそるおそる受け取った。

「幸福保護株式会社、天上支所、恋愛七十三課、主事、名前はまだ無い……? なによこれ」

「名刺です」

「名刺って。肝心の名前が書いて無いんだけど?」

「名前はまだ無いんです。付くのはこれから……、いえ、名前を貰えるかは、私がこれからどれだけ利益を上げられるかに掛かっているのですが」

女はポカンと口を開けて俺を見ている。できることならその顔は、彼に見せない方がいいだろう。すげえアホっぽいぞ。

「まだ無いって、あんた歳いくつよ」

「そんな細かいことは覚えていません。二千なにがしたと思いますが」

「二千!?!」

目を丸くして言うと、彼女は疑いのまなざしで俺を見た。

「見た目は十七、八よ、ありえないわ」

「や、あるんですけど」

「そんなに長い間名前も無く過ごして、不都合ありまくりだったんじゃない?」

「大丈夫ですよ。や、ホントに」

彼女は俺を見たまま、大きくため息をついた。なにを考えているのか分かりゃしない。っと、忘れていた字幕機能のスイッチを入れる。邪魔、という青い文字が大写しになった。思わず頬がヒクヒクと引きつる。

「いえ、落ち着いてもう一度名刺を見てください。大切なのは会社の名前です」

彼女はいくぶん肩を落としたまま、ゆっくりと名刺に目を向ける。

「幸福保護株式会社……? なんの会社なのよ」

「文字通りです。あなたの幸福を守りに来たんです」

俺に斜めから向けられた彼女の視線は、字幕が無かったとしても全力で疑っていることがよく分かる。

「幸せを逃す人はたくさん見たけど、あなたみたいな人は一度も見たことが無いわ」

「そりゃ、逃した人のところには、俺らは行ってないわけですから」

彼女は一瞬きょとんとしてから、ああ、と手のひらを拳で打った。なににつけても、しゃべる前に頭で考えるということをした方がいいと思うんだけど。

「なんで行かないのよ」

「なにぶん人手不足で。とにかく、これっきゃないって幸せだけは取りこぼさないよう、これでも頑張ってるんですよ?」

彼女の疑いは全く解けそうにない。が、このままでは大事な利益を取りこぼしてしまう。精鋭の一人として、そんな失態をさらすわけにはいかない。

「だからですね、あなたは今最愛の人とケンカをして、別れる寸前にあるわけです」

俺は、彼のことを思い出すよう、彼女に働きかけた。彼女は眉を寄せ、悲しげに視線を落とす。

「もう遅いわ、別れたのよ」

よっしゃ、思い出した。

「いえ、今なら間に合うんですよ。どうか俺に任せてください」

畳み掛けた言葉に、彼女の中で色々な感情が渦を巻いた。ゴーストに彼女の気持ちが次々と浮かんでくる。彼を愛しいと想う気持ち、元に戻りたいという想い、俺への期待感、俺に依頼した場合の支払いのこと、預金の残高、ローンの支払い。

「あ？ いえいえ、支払いはお金じゃないんです。ありがとうございます、ほんのちょっと思っただけであればそれで」

「ありがとう、ですって？」

不思議そうな彼女に、俺はうなずいて見せた。そう、実は感謝と幸福はセットになっているのだが、人間はその辺、なぜか疎い奴が多い。

「そりゃ、戻れるならいくらでも感謝するわよ」

よっしゃ上客、とガッツポーズを取りそうになり、その思いを顔に出してはまずいと自分をいさめる。だが、その喜びを読み取ってしまったのか、彼女は俺を全力でいぶかしげに見つめた。やるな。

「あんた、もしかして悪魔じゃない？」

「はあっ!？」

「その全身タイツも悪魔っぽいし」

全身タイツだと!? 不意打ちだ。こういうダメージはユニフォームの中にじわじわと染み込んでくる。言ってみればボディブローだ。地味に痛い。

「お代は魂で、とか言うんでしょ」

「ひでえ。それはライバル会社系列の奴らが使う手で、俺の会社は人間の世界では天使と呼ばれる方なんですよ？」

「天使！」

字幕に(笑)と浮かんだ。心の中で笑いやがった、この女。

「なにが可笑しい！」

「あのね、天使ってそんなじゃないわよ？ ちょっと待ってて」

女はスリッパの音を立てて部屋に入っていく、一冊の厚い本を抱えて戻ってきた。そしてパラパラとめくった百二十一ページ目を俺の鼻先に突き付けてくる。目の前に大写しになったのは、なんの因果か俺が赤ん坊のときの仕事風景だ。

「てっ、てめえがなんでこれを！ はっ、恥ずかしいだろ!!」

俺は彼女の手から慌てて本を奪い取った。二度と開かせるものかと、本をガッチリ腕に抱え込む。

「顔が真っ赤よ？ ホントに天使なのね？ ねえ、さっきの三匹のうち、どれがそうなの？」

「匹じゃねえ！ 放っとけ!!」

本は俺の手の中だが、彼女の記憶に残っているのだろう、絵がゴーストのモニターに浮かび上がった。彼女はその記憶と俺の顔を交互に三度見る。

「あ。真ん中でしょう？ 面影があるもの」

クソ、当たっている。なにが www だ、それは嘲笑か、嘲笑なんだなこんちくしょう。ニヤニヤとした顔

を見ていられずにうつむいたが、恥ずかしさにゼエゼエと息が漏れる。

wwwwwwwwww。モニターに増えていった字幕のwが不意に途切れた。間があって彼女が口を開く。

「もしかして、……ホンモノ？」

顔を上げると、彼女の瞳は真剣になっていた。

「だから、さっきから幸福保護株式会社の社員だって言ってるじゃないか」

もう情けなくて涙が浮かんでくる。だけど、な、泣くもんか。きっと泣いたら負けなんだ。

「本当に、まだ望みがあるの？」

「無かったらここには来ないし。だいたい、その顔で他の縁談が来るとでも思ってたの？ これを逃したらチャンスは一個も無いんだからな」

「ちょっと！」

頭をバシッと叩かれた。彼女は気付いていないが、輪が脳天に当たって激烈に痛かった。そこは唯一、ユニフォームに守られていないというのに。俺は、こぼれそうになった涙を慌てて手で拭った。

「あ、ごめん、つい……。痛かった？」

彼女はヨシヨシと俺の頭を撫でる。俺は彼女の手を払いのけた。

「子供扱いすんな」

「ごめんなさい。悪かったわ」

「い、いいよ、もう……」

彼女の目の前には字幕が映らない。俺の気持ちは全部言葉にする以外、伝える方法は無いのだ。涙声でも言葉を出さないわけにはいかなかった。

「それでね？ ホントに助けてくれるの？」

おずおずとのぞき込んでくる彼女に、俺はうなずいた。

「やるよ。それが仕事なんだから。感謝さえしてくれれば」

彼女はウンウン分かったと何度もうなずいている。非常に恩着せがましいが、これで商談成立だ。あとは男の方を操作して、なんとかこの幸せを取りこぼさないようにしなくてはならない。

「じゃあそのグラス、大事に持っとけよ！」

彼女はそのグラスをそっと胸に抱いた。カットが入ったところがキラキラと輝く。俺は泣きかけた赤い目を見られるのが嫌で、ろくに彼女の顔も見ずに振り返って翼を広げた。飛び立つとき地面に腹をこすったのは、この世界では愛嬌と呼ばれているんだ、問題は無い。

男の元にも、やはり翼が自動的に運んでくれる。ずっとトボトボと歩いていたらしく、すぐに男の姿が見えてきた。トレンチコートの後ろ姿は、悩んでいるどこかの探偵のようだ。これからが大変だというのにひどく疲れてしまったが、これが仕事だ、やり遂げる以外ない。

「俺よりグラスが大事だなんてな……」

本当にそう思うのか。っと、字幕どころか声に出るくらいだから思っているんだろうなバーカバーカ。

男の心に、グラスが無事でホッとした彼女の表情が映り、その優しい微笑みがナイフの先のように男の気持ちを傷つけているのが分かる。すがりついて欲しかったのにカラッポのままの胸が、ただただ寂しいようだ。

この心の穴がふさがらないうちに、コイツの勘違いをなんとかしなくてはならない。ハートの弓で落とすのが手っ取り早いけど、あれはちんまりとしていて最近はとみに使いづらい。それに、そんなことをせずとも恋愛感情を持っているのだから、それを気付かせてやるのが一番の良策だろう。理由は無いよりもあった方がいいに決まっている。

だが、どうやって？　ここが考えどころだ。

とりあえず、あのグラスの過去を探ってみようと、男の記憶をゴーストのモニターに呼び出してみた。今は忘れていたが、それほど昔のことでもなく、その記憶は難なく引き出されてくる。

場所はこの近辺の酒場だ。男はカウンター席に座り、マスターらしき人間と楽しそうに話をしている。手にしているのが例のグラスらしい。カットがキラキラと美しく輝き、氷とスコッチウイスキーが入っている。他の客のグラスは、それぞれ違った形をしているようだ。棚にも色々なグラスが並んでいるところを見ると、客ごとにお気に入りのグラスを使っているというわけか。

その記憶に先ほどの彼女が加わった。マスターとの挨拶を見ると、彼女もそれなりに馴染みの客らしい。彼女が注文したのはロンググラスの酒だったらしく、男のとは全く違う、細長い形のグラスが机に出された。

あのカットの入ったグラスを彼女が持っているということは、二人が付き合うようになったから、マスターが彼女にそのグラスをプレゼントした、というのが自然だろう。そりゃ彼女が大切にもするわけだ。

ということは、あのグラスがなんだったのかをこの男が思い出せば、彼女がどうしてグラスが大事なのかも理解できるだろう。男を近くにある思い出の酒場に向かわせれば、全て解決することになる。

アホだ。俺がきっかけを作らなければ、思い出さないということなのだから。精鋭と呼ばれる俺が来るほどのことはなかったじゃないか。だが、いつか名前を貰うためにも、割り当てられた仕事はこなさなくてはならない。

大きな通りにぶつかって、男が足を止めた。結構な交通量だ。左側に行くと彼女と出会った酒場があり、道を渡って右側には、帰宅するためのバス停がある。ここはナチュラルに左に行ってもらいたい。

が、俺の悪い予想の方が当たってしまった。バス停のある向こう側に渡ろうと、男は信号の押しボタンに向かって歩いている。押されてたまるかと、俺はユニフォームの透明機能をオンにして、手でボタンを覆った。

「あれ？　なんだ、この感触」

男はよりによって親指で、ボタンの上にある俺の手をグイグイと押している。あまりの痛さに声が出そうになるのを必死でこらえた。押せないボタンを何度か押してみたら、男は通りの左右を見やる。

「なんだ、今なら渡れるじゃないか」

はあ？　なに言ってるんだ。赤信号で渡っていて事故に遭ったら、いくら歩行者でも賠償金が少なく、って、こら。

俺は翼を使って、さっさと通りを渡っていく男の先回りを敢行した。途中、ユニフォームは透明機能から保護色機能へと切り替えておく。バス停に着くと、建物に付いている電光時計で時間を確かめ、時刻表にあるこれから来るバス三本分の数字を隠し、その部分を白く修正する。俺の指をのぞき込んだ男は、疑わしげに首をかしげた。

「あれ？　バスが無い？」

目をこすってもう一度確認しているが、保護色機能の自由性を舐めるなよ。だが、隠しているだけでバスはあるから、本当に来てしまっただけで困る。早くあのグラスを使っていた店に行かせたい。

「仕方がない、寄ってくか」

思惑通りに行きそうだと、思わずホッとして頬が緩んだ。だが、男が入ったのは近くのコンビニだった。ここからなら、バスが見えてからでも走れば間に合うだろう。面倒な場所に入ったものだ。

窓側に進んだ男が手に取ったのは、キュートな女の子が表紙の週刊誌だった。パラッとめくると表紙の女の子が、うわーお。服は着てるけど、ほとんど透けて見えてるし。バストちょうどいい、ウエストちょうどいい、ケツはちょっとでかい。俺は男でも女でもないが、この子は確かにイケていると分かる。

ふと我に返り、コイツはホントに落ち込んでいるのかと顔をのぞき見た。難しそうな顔をして雑誌の女の子を見ている。俺は試しにモニターを男視点に切り替えてみた。

なんと、女の子の顔が彼女の顔にすり替えられている。ブツと吹き出しそうになって手で口を押さえた。ちょっと待て、彼女こんなにナイスバディだったっけ？ いや、でも、こんなだったと思った方が、彼女の元に戻りたい願いが強くなるだろうから好都合か。

それにしても、よく噂に上るアバタモエクボという超常現象は、凄い力を持っている。あきれるというか笑えるというか、わっはっはっは、バンバン。

つつい壁を叩いた音で、周りの視線がこっちを向いた。しまったと思ったがもう遅い。ここから逃げ出さないと……、と、どうやら視線は俺ではなく男に集まっているようだ。そう、忘れていたが、ユニフォームの保護色機能のおかげで俺は見えづらかったのだ。俺がここにいることを周りに気付かれないよう、ひたすら動かずに頑張る。

男はバツが悪そうに雑誌を棚に戻すと、そそくさとコンビニを出た。その目の前をバスが通り過ぎていく。俺は周りの視線が散ったのを確認してからユニフォームの機能を透明に戻し、通り過ぎるバスを放心状態で見送っている男の元に駆け寄った。いやあ、今日の俺はツイてるぜ。

「ツイてない」

男はため息と共にそう言い捨てると、今度こそ馴染みの飲み屋の方向へと歩き出した。悪いな。俺がツイてる分だけ、あんたがツイてないんだよ。

それにしても、あの店に向かっているのに、コイツはあのグラスがなんだか思い出せないのか。彼女、こんなアホでも好きなんだな。少し不思議に思うが、仕事で関わる人間はみんなこんなものだ。相性というか、ちょうどいいというものが、下界にはちゃんと存在している。

店が見えてきたが、まだ思い出さない。ずいぶん近づいたが、まだ思い出さない。扉に手を掛けたが、まだ思い出さない。俺は、手に力を込めて扉を押そうとした男の頭を、思い切りどついた。

「あ、いらっしゃい」

そう中から声が掛かったが、男はハッとした目でマスターを見ている。

「まっ、また来ます！」

男はコートをはひるがえして駆け出そうとし、俺にぶつかった。

「すみません！ え????」

見えない俺には謝罪の向けようがない。

「き、きっと気のせいだ」

そうつぶやくと、男は前髪のコリでも払うように首を振って走り出す。俺はその遠ざかる背中に、頑張れよ、と小さく声を掛けた。

こっちは空を飛んでいるのだから先回りできる。そう思って気持ちよく風任せで移動していたら、彼女のアパートに駆けつけた男が見えた。近道があるのか、ぬかったぜ。

慌てて近くまで寄ってみると、男はドアノブを握るのももどかしく玄関ドアを開けている。勢いよくドアが開くと、すぐ側にいた彼女が驚き、その手からグラスが転げ落ちた。

グラスはカットの部分きらめかせながら、玄関のコンクリートに落ちて砕ける。グラスの断末魔の音が、空中にいる俺にも聞こえてきた。

「いやあ！ グラスが、あなたのグラスが！」

グラスの破片をかき集めようとした彼女の腕を、男が慌てて捕まえた。

「危なっ、駄目だ！」

「だって、だってこのグラスは」

男を見上げる彼女に、男は軽くため息をついて微笑む。

「分かってるよ。でも俺はこのグラスより君の手が大切なんだ。君は？ グラスと俺と、どっちが」

「あなたが大事に決まってるじゃない！」

彼女の瞳から、グラスの欠片に負けじと輝く涙がこぼれ落ちる。彼女は腕を引かれ、男の胸に開いた穴にスッポリと収まった。うん、さすがうちの会社が守らなくてはならない幸福だけはある。ぴったりだ。

これで彼らに対する俺の仕事は終わりだ。あと、残る問題は報酬。ちゃんと支払って貰えるように、ここで俺の存在を主張しなくてはならない。

俺は透明機能を解いて翼を広げ、彼らに注ぐ夕日をさえぎって見せた。開いたままのドアから、ちょうどよく俺が逆光に見える位置だ。ユニフォーム姿を見せるよりも影だけの方が、下界での天使のイメージに添って見えるだろう。

影に覆われたことに気付いた男が、こっちを見上げてきた。

「あれは……」

「天使よ」

彼女もこちらに目を向ける。男は苦笑した。

「なに言ってんだ、天使ってこういうものだよ」

男は側に落ちていた本の百二十一ページを開き、例の赤ん坊な俺の肖像を指し示した。彼女が指先をのぞき込む。

「あははは、これ、あの子よあの子」

そんなことをバラすんじゃねえ、クソバカ。

「私、あの子に感謝するわ。本当にありがとう」

俺に向かって言った感謝の言葉と彼女の幸福感は、まっすぐ天上界へと向かっていく。結構大量じゃないか、やっぱり上客だった。これで約束の支払いは終了だ。あとは二人でよろしくやってくれればいい。

やり遂げたと思ったら気負いが無くなり、それっぽく広げていた手をだらんと下に落とした。さすがに疲れた。報酬もいただいたし、もうどう見えても構わない。

「えーと、あの子……。あの子？ 願いを叶えてくれたような気が。神様、だっけ？」

「いや、あれはどう見ても神様には見えないよ」

そうそう、俺は決してそんなもんじゃねえ。俺は二人に構わず、疲れた身体を翼に引っ張り上げてもらいつつ天上界を目指した。ゴーグルの隅には、まだ彼らの様子が映し出されている。

「そうよね、神様が見えるわけがなかったわ」

そうだろうそうだろう、もうすでに俺がいた記憶が消えていく頃だ、見えたとしても天使だなどと信じられるものではない。

「だったら、あれはなに？」

「んー。あ、蚊だ、蚊じゃないか？」

「そうね、それっぽいわね」

ありえねえ、なんでそうなる……。

いや、達成感で脱力した身体は、確かに翼にぶら下がっているように見えるだろうから、遠目に見間違えられても仕方がないのかもしれない。

……なんてことがあるものか！ 距離感はどうした、距離感は！

「蚊じゃねえぞバカ野郎!!」

思い切り叫んでみたが聞こえただろうか。モニターには二人が唇を寄せ合うのが映っている。もう彼ら

だけの世界って奴に包まれていて、他のことはどうでもいいらしい。蚊にされたままでは後味が悪いが、これで仕事は完了だ。もう帰って忘れよう。彼らも俺のことは忘れるのだから。

抱き合う二人の向こう側で、俺の名刺が音も無く燃え上がる。真っ白な灰になって風に飛んだのを確認して、俺はモニターを切った。

さて、次の仕事が俺を待っている。精鋭の一人と呼ばれ続けて名前を貰うまで、俺の死闘は続くのだ。それまでは決して挫けたりはしない。

それに。幸せになる二人を見られる仕事ってのは、思った以上にやりがいがあるものなんだぜ。なにより、自分も幸せになっている気がするんだ。まあ、俺自身はなににも変わっていないのだから、気のせいかもしれないんだが。

次の二人はどんな恋人同士だろうか。ここぞというところでは、絶対に取りこぼしたりはしない、すぐに駆けつけるから待っててくれよな。

蚊という言葉は引っかかるものの、俺はおおよそ爽やかな気持ちで幸福保護株式会社天上支所へと戻った。

文：柚希実（ゆずき・みのる）

<http://fayerie.rdy.jp/>

柚希実と申します。主にファンタジーを書いています。他のジャンルにも挑戦しています。少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

絵：damo（だも）

<http://applechair.sakura.ne.jp/circuit/>

何かすこしでもお手伝い出来ればと思い、参加しました。

作品の彩りになるような表紙になっていれば幸いです。

恋 人 の 石

～< 荒れ地の民 > の物語～

私の恋人は真紅の石になった。
私の胸を焦がし
魂までも燃やし尽くしてしまっ
炎の色をした石に

珠玉の異世界ファンタジー

冬木洋子
illustration
恵陽



私の恋人は、真紅の石になった。

私も、部族の他の人たちも、誰一人、彼がそんな鮮やかな色の石になるとは思っていなかったから、呪師が炎に手を差し入れて石を取り上げた時、誰もが、その強い輝きに気圧されたように息を呑んだ。

呪師が遺灰を凝縮させて作る形見の 護り石 は、普通は、皆がいかにもその人らしいと思うような、その人の生前の佇まいを偲ばせるような色をしている。たとえば、生前のその人が好んで身に付けた色や、その人の瞳の色や、その人の人柄や雰囲気になんとなく似つかわしいような色。

だから、私もみんなも、彼はもっと地味な色の石になると思っていた。彼の瞳のような穏やかに澄んだ灰緑色や、彼の物静かで控えめな人柄に相応しいひそやかな青色、あるいは落ち着いた砂色に。

けれど、一瞬の驚きの後、私にだけは、彼がその色の石になった理由が分かった。

昔、一度、彼が言ったことがある。

もしも自分が君より先に死んで、君の護り石になるとしたら、自分らしい色になんか、ならなくていい。君の身を飾るのに相応しい、君に似合う色の石になりたい、と。君によく似合う真紅の石になって、美しい君をますます美しく飾るのだ、と。

確かに私は赤が好きだったし、私のきつめの顔立ちや奔放な立ち居振る舞いには、赤が似合った。気性も激しく、みんなからつねづね『炎のような』と言われ続けているから、きっとみんな、私が石になるとしたら真っ赤な石になると思っているだろう。自分でも、そう思う。

それなのに、私ではなくあの人、真紅の石になったのだ。

でも、実は、その色の激しさは、もともと彼の中にあっただけのものなのかもしれない。自分らしい色になるよりも私に似合う色になりたいというほどの、その、想いの強さこそが、控えめだった彼の、内に秘めた激しさだったのかもしれない。燃え立つような真紅は、みんなが知らなかっただけで、本当は彼に似つかわしい色なのかもしれない。

そう思うと、今となっては自分がどれだけ彼のことを知っていたのか分からないような気がしてくる。

呪師が厳かに差し出す小さな宝石を、震える手で受け取って、胸元に抱きしめた。

彼の中に燃えていた激しい愛が、私の胸を熱くする。

私は今も変わらず、彼を愛している。今も、これからも、彼だけが、こうして私の胸に触れることができる。

サーレイ。私の、ただ一人の恋人。

黒い喪布を被って立ち並ぶ一族たちの葬送の歌を聴きながら、炎のように燃え上がる荒野の夕焼けに誓った。

私は一生、あなたを忘れない。あなたの思い出を、こうして胸に抱いて生きてゆく。

実り豊かな森に定住する 森の民 は、死んだ人を土に埋めるのだという。そうすると、そこから木が生えてきて、みんな、その木に寄り添って、いつまでもその人を偲ぶのだと。

でも、荒地に生きる私たちは、死んだ人を火葬にする。お墓も作らない。

だって、どこかに埋めてお墓を作っても、私たちは季節が変わるたびに呪師が占うままに新しい土地に移動してしまって、もう一度その場所に戻ってくることがあるかどうか分からないもの。

だから私たちは、お墓を作る代わりに、呪師の力で遺灰から宝石を作ってもらって、それを首飾りや耳飾

りにして身に付ける。そうすれば、どこに移動しても、愛する人と一緒にいられるから。

形見の宝石には、その人の魂の一部が封じられている。石の中から、遺された人の人生を見守ってくれる。

そうして、ただ一度だけ、その人の生前の似姿を眼前に現し、声を聞かせてくれる。それは触れることのできない幻だけれど、ただの幻じゃない。形見の石には、その人の一部が宿っているのだから、その幻も、その人の一部なのだ。死んだ人がこの世に残していった、自分の存在の最後のひとかけらなのだ。

どうしても寂しくなったら、石を握り締めて、祈ればいい。その人の名を呼べばいい。本当にその人を愛した、その人が愛した人の祈りなら、その人は、眼前に立ち現れる。きっと微笑んで、触れることはできなくても手を差し伸べてくれる。

その瞬間を、何度、思い描き、焦がれたことか。

たった一目でも、ほんのつかのまでも、もう一度、あの人の姿が見たい。あの人の声が聞きたい　そう思わなかった日は、一日もない。

でも、私は、決してそれをしない。

なぜなら、一度、生前の姿を石の外に呼び出してしまったら、その時、形見の石は砕けて、その中に封じられていたその人の存在の欠片ごと、永遠に失われてしまうから。砕けた石は、岩陰に溶け残っていた氷を切り出して日向に置いたみたいに、みるみる溶けて、消え去ってしまうのだという。

そんなのは、耐えられない。

ほんのひとかけらでもこの世に残っているあの人の一部を、もう一度、失うなんて。生きている間に、もう二度と、あの人の姿を見られなくなるなんて。

形見の石を持ってさえいれば、どうしても会いたい時には強く望めばもう一度だけあの人に会えるのだと思いながら、その思いを支えに生きていける。でも、本当にそれをしてしまったら、残りの一生を、私は、もう一度あの人の姿を見られるという希望無しに生きていかなければならないのだ。そんなのは、きっと、耐えられない。

だから私は、形見の石からあの人を呼び出すのは、自分が最期の息を引き取る、その瞬間と決めている。そうすれば、私は、愛しいあの人の姿をこの目に映しながら死んでゆくことができるから。

細い鎖で胸元に下げた護り石を握り締め、もし今あの人に呼びかけたらあの人は現れてくれるだろうと思い描き、寂しさに耐えられなくなるたびに今日こそ、今こそと思い詰めては、でもそうするともうあの人がこの世に残したわずかな名残も消えてしまうのだと自分に言い聞かせて、引き裂かれる思いに惑い、煩悶し、枯れることのない涙に人知れず浸る、そんな日々が、のろのろと過ぎていった。

あの人がいなくなってから、世界は何もかも色褪せてしまった。私の世界の中で鮮やかな色をしているのは、あの人の真紅の石だけ。

ほんの子供の頃から結婚を誓いあっていたあの人が婚礼を待たずに死んだ、その後、しばらくの間は、多くの男たちが私の愛を争った。

私は誰にも応えるつもりはなかったけれど、男たちは、私に求婚する権利を巡って果たし合いを始めた。男たちが私を巡って争うのを、止める権利はなかった。

一人の女を複数の男が望んだ時、部族の男たちは、互いに闘って、勝ち残ったものが求婚の権利を得る。それは男たち間の問題であって、当の女がそれをどう思おうと、止める権利はないのだ。

そのかわり、女には、勝ち残った求婚者を拒否する権利があった。闘いに負けて求婚の権利を失った男に、自分のほうから求婚する権利も。

勝ち残っても拒否されるかもしれないのに勝手に闘い合うなんて、ばかげている。勝とうが勝つまいが、結局、女が試合の結果とは関係なしに好きな男を選ぶのだったら、闘う理由などないはずだ。

それでも、男たちは、古くから繰り返されてきたこの闘争を止めない。

なぜなら、それが男たちの間の伝統であり、力を誇示し誇りを体現する行為であるだけでなく、実際に、勝者の求愛を拒む女はあまりいないからだ。

荒地の女なら、たいていは、自分のために闘って勝利を勝ち取った強い男に惚れるものだ。それまでその男のことを特に愛していたわけでもなく、闘いを勝ち抜いてきた荒い息のままに目の前に立たれ、手を差し出されれば、その瞬間に、突然、その男に魅了されてしまうのだという。私には分からない奇妙な感覚だけれど、おそらく、過酷な荒野で生きてゆくためにはなるべく強い夫を持つのが有利だという、何世代にも渡る経験の積み重ねが、部族の女たちの身体に深く染み付いているせいだろう。

それでも、ごく稀には、勝者の求愛を拒む女もいた。

けれど、その女が敗者である別の男を選んだという話は、一度も聞いたことがない。

なぜなら、闘いに負けた男は、もともとその女の愛を望んでいたはずなのに、女から選ばれる権利を永遠に放棄してしまうからだ。

自分で女を勝ち取らず、男同士の闘いに負けた上で女から選ばれるのは、彼らにとって、不名誉であり、屈辱なのだという。

では、きっと、その男の愛なんて、そんな程度のものだったのだ。男同士の間の面子より軽い愛でしかなかったのだ。その男が本当に欲しかったのは、その女ではなく、闘いに勝ち残った男であるという名誉のほうなのだ。

だから、勝者を拒んだ女は、結局、すべての求婚者を失うことになり、生涯を独身で過ごすことになりやすい。たぶん、それも、勝ち残った男を女が拒まない理由の一つなのだろう。

夫を持たずに生きる女に、部族は冷たく、女一人で生きるには、荒野の暮らしはあまりにも過酷だ。

勝ち残った瞬間にその男への真実の愛が芽生えるという、少女たちが憧れるおとぎ話の裏には、生涯を孤独に貧しく蔑まれて暮らすことと、たとえ一番好きだった相手ではなくても他人に自慢できる強い男の妻になって羽振りよく暮らすことを比べれば、後者を選ぶのが得だという打算もあるのだろう。

けれど、私は、勝者を拒んだ。

もともと誰にも応えるつもりはなかったし、それまでに言い寄ってきた男には、それぞれにはっきりとそう伝えてあった。それにもかかわらず私を巡って争ったのは、男たちの勝手だ。

それでも、断る時は、部族のしきたりにのっとって礼を尽くし、相手を尊重しつつ、丁寧に辞退するつもりでいた。

勝ち抜いた男は、別に好きではなかったが、部族の一員として尊重するに相応しい立派な男ではあるはずだった。愛してはいなくても相応の敬意は持っていたはずだ。

が、それまで特に嫌っていたわけでもないその男、アーガンが、勝利に昂ぶり、闘いの汗に濡れたまま、まるでもう私が自分のものになったとでもいうような勝ち誇った様子で悠然と目の前に立ち、手を差し出してきた時、私は、その、すでに手に入れた戦利品を見るような目に、ふいに言い知れぬ嫌悪を覚えて、思わず言っていた。

「私はあなたを拒否します。殴り合いに勝ったくらいで、私を手に入れたなんて思わないで。私は試合の賞品じゃない。私はモノじゃない」

アーガンは、一瞬の驚愕の後、怒りに顔を赤黒く染めて、足音も荒々しく立ち去った。

見ていたものたちは、いっせいに私の無礼を非難した。

確かに、私は彼をあのよう侮辱すべきではなかった。

勝者を拒む女は実際のところ滅多にいないのだから、試合に勝ち残った彼が当然私を手に入れたものと思込んでしまっても無理はなかったのだし、そもそも彼は、そのように思い込んだからといって私に無礼を働いたわけではなく、単にしきたり通りに前に立ち、手を差し出しただけなのだから、何ら責められる謂れはないのだ。

けれど、私は、彼を侮辱したことは悪かったと思っているが、彼を拒んだことは悔いてはいない。

彼の行動に非はなかったのかもしれないが、だとしても、彼が、私の父や兄たちと同じように、手に入れた女を家畜や家財を見るような目で見ると男たちの一人であることには変わりがないのだから。

彼や、父や、兄たちだけではない。部族の男たちは、だいたいみんなそんなふうで、それが悪いことだとは、誰も思っていない。そして、女たちもまた、それが当たり前だと思っている。

それから私は、独り身のまま生きてきた。

一族の女を飢えさせるのは家長の恥だから、老いた父から家督を継いだ兄は私を追い出しはしなかったが、私を疎ましく思っていることを隠そうともしない。父も兄も、かつて部族の男を侮辱した私のことを今でも怒っているし、部族の常識に従わずに独身を貫く私が目障りなのだ。そうでなくても、兄嫁が何人もの子供を産んで家族の天幕は手狭になり、私は邪魔者で、庇ってくれる母もすでに亡かった。

私は、自ら願い出て家族の大天幕を出、かつて弟たちがしていたように、大天幕を取り囲む独身者用の小天幕で寝ることにした。

この荒野で、単身で生きてゆくのは、女でなくとも無理だ。独身者用の天幕で寝る若者は、連れ合いを得て完全に独立するまではその家に属し続け、大天幕の周囲で暮らして、煮炊きと食事は共にする。それは、既に結婚した兄のいる次男以下の若者が成人してから結婚するまでの短い時期に置かれる中途半端な立場であり、普通は女がする生活ではないし、いつまでもするような生活でもない。

けれど私は自らそれを選び、自ら申し出て煮炊きも食事も別にした。辛い暮らしではあったけれども、私は、自分の生き方を貫く自由が欲しかったのだ。

兄は私にわずかばかりの山羊を分け与えた。

アーガンの求婚を拒否して以来、男たちに冷たい目で見られるようになったことは仕方がないと思うが、辛いのは、女たちから、部族の規範に従わない女として後ろ指を指されることだった。

ちょっと美しいからと思い上がって我が儘勝手に貫くとあのような惨めな境遇になるのだよ、などと少女たちを諭す聞こえよがしの囁きの中を、私は、まっすぐに顔を上げて黙って通り抜ける。

好きに言えばいい。確かに暮らしは厳しいけれど、私は自分を惨めだなどと思っていない。

あの人を偲びながらひっそりと生きる人生を、私は自分で選んだのだ。他の男と結婚することで得られるだろう利益を、自分から放棄したのだ。

私とサーレイは、まだ婚礼をあげていなかったけれど、私が十七になったら結婚する約束になっていた。いったん結んだ約束を取り消せるのは、当事者たちだけだ。あの人が高死んだ以上、約束を取り消せるのは私だけのはずで、私はそうしなかった。だから私は、十七になった時、あの人高妻になったのだ。

あの人高生きていても死んでいても、私はあの人高妻だ。夫への貞節を貫くのは、夫高生きていようと死んでいようと、名誉あることのはずだ。私は、名誉ある寡婦として、亡き夫への貞節を守ってつつましく生きることを認められて良いはずだ。私は誇りを持って、あの人高想い続ける。誰にも文句は言わせない。

けれど、ときどき、ふと心が弱くなる。

そんな時、私は、胸元の護り石を握り締める。

サーレイ、私を護って。私を押しつぶそうとする孤独から。

真紅の宝石は、手の中で、ほのかに温かい。その温もりと、これを持っていればいつかもう一度だけサーレイに会えるのだという想いだけが、私の支えだった。

そんな私に、一人だけ、好意を寄せ続けてくれる人がいた。

かつて私を巡って男たちが闘った時の敗者の一人、ヤレン。彼は、あの時、アーガンに敗れて私に求婚する権利を失ったが、私に求婚される権利を放棄しなかったのだ。

それは、前例のないことだった。

あの日、敗者たちはみな、何も言わずに立ち去ったが、誰もが暗黙のうちに、全員が私を諦めたものと思いを込めていた。

ところが、ヤレンは、その翌日に私の許を訪ねてきて、自分は私からの求婚を待つ権利を放棄していないと告げた。一晩考えてそう決めた、私に選ばれるのをいつまでも待つ、と。

それによって、ヤレンは、男たちの間での名誉を失い、女に血迷って誇りを捨てた腑抜けとして笑いものになった。

けれどもヤレンは、そんな嘲笑に耳を貸さなかった。

私はヤレンに誰とも結婚するつもりはないとはっきり告げたのに、あれからずっと、ヤレンは、誰も娶らず、付かず離れず私を待ち続けている。もう十年近くも。

ヤレンと私は、あまり話をする事もない。彼はただ、折々に私の天幕の近くまでやってきて、私が一人で重いものを運んでいれば片側を持ってくれたり、女手に余る仕事に手間取っていると黙って手伝ってくれたりするだけだ。宿営地を離れて山羊に草を食べさせる時、自分も同じ場所に山羊を連れて来て、少し離れて黙って座っていたりもする。ヤレンは何も言わないけれど、たぶん、護衛のつもりでいるのだ。女が一人で宿営地から遠く離れるのは、普通はないことだから。

私は何度もヤレンに言った。こんなふうに私にかまけていては、あなたは自分の人生を棒に振る。私はこの先も誰とも結婚するつもりはない。どうか私を待つのは止めて、他の女を娶って欲しい、自分の生活を大切にしたいと。

気にかけてくれるのは嬉しく、手助けは正直言って有り難かったが、利用しているようで気がひけたのだ。

けれど、ヤレンは笑って首を振るだけだった。

俺はただ待ちたいから待っているだけだ。それは俺の権利であり、誰にも、君にも奪えないものだ、と。

男たちは、ヤレンを腰抜けと嘲笑う。けれど、こんな勇気が、これほどの強さがあるだろうか。誰からも馬鹿にされ、名誉を失いながら、報われるあてもないのに自分の意志を貫くなんて。

それなのに、私には、ヤレンのその気高い勇気に報いることはできない。それが心苦しかった。

ヤレンと私は、他人がどう思っていようとも、一度も同じ天幕で眠ったことはない。山羊を見張りながら近くに座っていても、互いに触れることはない。けれど、ときどき、ヤレンの熱い渴望の眼差しに、胸苦しいような気持ちになることがある。

一度だけ、ヤレンが私の手をとったことがある。大きな、荒れた、温かい手だった。

その時、ヤレンは言った。

俺はあの時、アーガンに負けて良かった。勝っていたら、あの場で君に拒まれ、君に選ばれるのを待つ権利を失っていただろうから。負けたおかげで、今、こうして、君が振り向いてくれるのを待つことが許されている。

そして、こうも言った。

あの時の俺が求めていたのは、本当は君ではなく、ただ、『部族で一番美しい娘を勝ち取った男』という名誉だったのかもしれない。君に拒まれたアーガンと、何も変わりがなかった。けれど、君が誇り高く頭を上げて「私はモノじゃない」と言った時、俺は本当に君に恋をしたのだ、と。そのことに一晩かけて気づき、それで翌日、君の許を訪れたのだ、と。

そうして、もう一度、言った。負けて良かった、と。

そう言って笑ったヤレンの、大きな手の温もりに溺れそうになった。そういえば、母亡き後、家族も女友達さえも、私に触れる人は誰一人いなくなっていたから、人の手の温もりを忘れかけていた。

私はそんなにも寂しかったのだと、ふいに気づいて、慌てて手を引いた。

そうしなければ、ヤレンがこのまま私を引き寄せてくれたら良いのにと感じてしまいそうで、もしも引き寄せてくれたらその頼もしい腕に縋ってしまいそうで、怖かったから。

ひとときでも優しい誰かの腕に縋ったら、私は、きっと、二度と一人で立てなくなる。

ヤレンの手は、私の手を追わなかった。

「でも、あなたはそれで私を手に入れられたわけじゃないじゃないの」

一瞬の弱い心を振り払おうとして、つんと頭を上げ、わざと冷たくそう言うと、ヤレンは、手に入れられなくても望み続けることは許されている、それすら許されないよりはずっといい、と答えた。

笑っていたけど、その目は苦しげで、熱かった。

その、苦痛と熱の入り混じる視線に耐えられず、私は目を伏せた。

夜、冷たい寝床の中で、ヤレンの硬く荒れた指先の記憶がふいに私の指先に蘇って、その思いがけない熱さに、私はたじろいだ。まるでヤレンが私に触れているみたいに。

幻の熱の中に自分が崩れ落ちてゆくような気がして、私は怯えた。指先の幻を振り払うために、私はサーレイの石をきつく握り締めた。サーレイ、私に力を。孤独に耐える力を……。

私の手の中で、サーレイの石はほのかに温もり、私を宥めてくれた。

ああ、今こそ、サーレイに会えたら……。

そう、切なく願ったけれど、その願いを押し殺した。

私はこの先、まだずっと、一人で生きていかなければならないのだから。いつかもう一度だけサーレイに会える、そのことだけを支えに。

今夜より辛い日が、きっと、きっと来る。その日のために、今は自分の弱さを退け続け、耐えなければならぬのだ。

だから私は、迷子の山羊を追って崖から落ちた時にも、サーレイを呼ばなかった。

形見の石は、時に、持ち主が本当に生命の危機に瀕した時になど、不思議な力を現して持ち主を救うことがある。形見の石が『護り石』と呼ばれる所以だ。石に宿ったその人の魂の欠片が、死してなお残る想いの

強さ故に、愛する人を救うのだ。

だから私が本当に危ない時にはサーレイが助けてくれると、ずっと信じていたけれど、でも、私は、護り石に助けられたくはなかった。なぜなら、その時、護り石は、愛する人の姿を呼び出した時と同じように、砕け散って消えてしまうのだから。

そうしたら、その後、生き延びた私は、サーレイの護り石無しで 　いつかもう一度だけサーレイに会えるのだという希望無しで、その後の長い人生を生きなければならなくなる。それくらいなら、その場で死んだほうがいい。さっさと死んで、サーレイの待つ生命の岸辺に行けるほうがいい。

そう、もしかすると、私は、死にたかったのかもしれない。

自ら命を絶ってしまったら、私の魂は、先祖たちの魂が区別もなく溶け合っ流れる生命の水脈に戻れない。太古から流れ続ける永遠の命の川の中でサーレイとひとつになることができない。だから私は、生きているしかなかった。

けれど、自ら命を絶つのではなく、たとえば病で、たとえば、そう、誤って崖から落ちたりして死ぬことができれば 　。

家族から見放された女一人では思うように良い草場をあてがってやれずに痩せこけた私の山羊たちが、わずかな草を求めて宿营地からどんどん離れてゆき、他人があまり行かないような危険な崖近くまでさまよい出てしまったりするのは、無理もないことではないか。どんなに意地を張っていてもか弱い女に過ぎない私が、広大な荒地で貴重な山羊の一頭を見失い、夕闇が迫るまで探し回った拳句、険しい岩場でうっかり足を滑らせて谷底に落ち、誰にも知られぬまま朽ち果てたとしても、仕方のないことではないか。

心のどこかでそう思って、私は、ただ一人、ひとけのない岩場をさまよっていたのかもしれない。

だから、本当に足を踏み外した一瞬にも、自分は死ぬのかもしれないと感じながら、心の中でサーレイに助けを求めようとはしなかったのだ。

ただ、ほんの一瞬の間に、どうかこのままサーレイのところに行けますようにと願ったような気がする。

けれど、私は死ななかつた。ほとんど怪我さえしていなかつた。私が落ちた場所は、背の高い男なら跳び上がれば崖の縁に手が届くような、すぐ下の岩棚で、私はただ、しばらく気を失っていただけだつた。

気がついた時には、ヤレンの腕に抱かれていた。ディア、ディア、と私の名を呼ぶ必死の声を聞きながら、自分がまだ生きていることを知った。

君が帰らないから捜しに来たんだ、良かった、無事で良かった……と繰り返すヤレンに、まだ夢を見ているようにぼんやりと抱え起こされながら、そういえばこんなふうにヤレンに触られるのは初めてなのだと思ひあたり、不思議な気持ちがあつた。

ヤレンは、私に大きな怪我がないのを確かめると、力強い腕で私を軽々と崖の上に押し上げてくれた。

私はあっけなく生命の川への道から引き戻された。私の心も現実の世界に戻ってきた。覗き込むと、細い岩棚の下は、かなりの深さの谷だつた。あそこに落ちていたら、きっと死んでいただろう。

私が登り終えたのを見届けて、ヤレンが崖の縁に手をかけようとしたその時、足元の岩棚が崩れ、ヤレンの身体が宙に浮いた。一瞬空を掻いたその手は、崖縁に張り出した灌木の根を掴んだけれど、根は細く、ヤレンの重みにずるりと土から抜けかける。

私は悲鳴を上げ、とっさに身を乗り出してヤレンの片腕を掴んだ。もう片方の手で、崖際の木を幹を掴む。

宙吊りになったヤレンは、なんとか体勢を立て直そうともがいたが、その足は足がかりを捉えることができずに虚しく宙を蹴った。

私の力では、ヤレンの体重を長くは支えられない。私の掴まっている木も、細くひねこびた荒地の灌木に過ぎない。

ヤレンが落ちてしまう。死んでしまう。私のせいで。私を助けたせいで。

私は、自分が落ちかけた時には感じなかった激しい恐怖に襲われた。

ヤレンは私がこういう危険に遭わないようにと、私が遠くに山羊を連れて行く時はなるべく一緒に来てくれていたのだ。なのに私は、たまたまヤレンと一緒にない日に、ふらふらと危険な場所にやってきて、そのせいで、ヤレンを危険にさらしてしまった。私の無分別のせいで、もしもヤレンが死んだりしたら……。

ふいにヤレンがもがくのを止め、一瞬、静かな目で私を見上げた。

「ディア、手を離してくれ。でないと、君も落ちる」

「嫌ッ！」

私は叫んで、聞き分けのない子供のようにかぶりを振った。

ヤレンが死ぬなんて、ヤレンを失うなんて。何の得もないのにずっと私を支え続けてきてくれたヤレンを、私のせいで死なせるなんて。

私は渾身の力でヤレンを支えながら、気がつくともう夢中で叫んでいた。

「いや、いや、いや！ サーレイ、助けて！ 助けて、サーレイ！」

小さい頃、強情で無鉄砲なくせに泣き虫で甘えん坊だった私は、生来の意地っ張り負けず嫌いのために、よく、陥らなくても良いような無駄な窮地に陥っては、そのたびに、こんなふうにはサーレイに助けを求めたのだった。

私より二つしか年上でなかったけれど、その頃から落ち着いて大人びた少年だったサーレイは、いつだって、穏やかに苦笑しながら私を助けてくれた。泣きじゃくる私を抱きしめて、優しく頭を撫でてくれた。

大丈夫、もう大丈夫だよ、ディア……。

思い出の中の優しい声が、その時、すぐ耳元で聴こえたような気がした。

同時に、背中に包み込むような温もりを感じて、ヤレンの腕を握る私の手に、誰かの手がそっと添えられたような気がした。

私の腕にかかっていたヤレンの重みが、ふっと軽くなった。

まるで、背後にいる誰かが私の背中越しに手を伸ばして一緒にヤレンの腕を掴み、力を合わせて引き上げてくれたみたいに。

女一人ではありえない強い力で崖に引き上げられたヤレンは、自分が助かったことにも気がつかないように呆然と顔を上げ、目を見開いて私の背後を見ていた。

「……サーレイ？」

その視線を追って振り向いた。

サーレイが立っていた。

生きていた時そのままに、穏やかに微笑んで。

「ディア……」

私はずっと感じたのは、歓喜ではなく、恐怖だった。

では、私は、護り石からサーレイを呼び出してしまったのだ。私の許にとどまっていたサーレイの魂の

一部は、これでもう、消えてしまうのだ。私はサーレイを、もう一度、失うのだ。

私の目から、涙が溢れた。

「サーレイ！ サーレイ！」

涙を振りこぼしながらサーレイに縋りつこうとした私の腕は、その身体を突き抜けた。さっきは、背中に懐かしい温もりを感じたのに。私の手に重ねられた手のひそやかな重みを、確かに感じたのに。

サーレイは寂しそうに微笑んだ。

「ごめんね、ディア。抱きしめてあげられなくて……」

生きている時そのままだと思ったサーレイの姿は、よく見ると少しぼやけて、後ろの荒野が透けていた。影は無く、足は地面についていなかった。

どうしてサーレイは姿を現してしまったのだろう。護り石が持ち主以外の命を救うなんて、聞いたことがない。なのに、なぜ。

「なんで、どうして？」

脈絡のない言葉の意味を汲み取って、サーレイは答えた。

「君が落ちそうになった時は、僕には、大丈夫だって分かってた。でも、ヤレンは、助けなければ死ぬところだった。もちろん、護り石が護るのは、持ち主だけだ。なのに僕がヤレンを助けたのは、ヤレンが死んだら君の心が死ぬからだ。僕はヤレンではなく、君を救ったんだよ。君の心と、君の幸せな未来を。愛しいディア、今まで、ずっと君を見ていたよ。君のことも、ヤレンのことも。ずっと僕を想ってくれていてありがとう。だけど、ディア、これからはヤレンと幸せにおなり。　　ずっと前から、そう言いたかったんだ。でも、君が僕を呼び出してくれないから、言えなかった」

そんな言葉、聞きたくなかった。私はサーレイを呼び出したくなかった。死にそうになっていたのが私だったら、助けたりしなくて良かったのに、と、理不尽^{なじ}に詰ったかもしれない。でも、助けられたのはヤレンで、助けなければヤレンは死んでいて、それは私のせいなのだ。

嘆くわけにも責めるわけにもいなくて、サーレイに縋りつくこともできなくて、私はただ、子供の頃のように繰り返しサーレイの名を呼びながら、泣きじゃくるだけだった。

ヤレンがそっと進み出て、私の横に立った。

サーレイがヤレンに微笑んで頷きかけるのが見えた。

「ディア、ごめんね。僕はもう行かなくちゃ。僕はもう君が困った時に助けてあげられなくなるけど、でも、これからは、きっとヤレンが君を助けてくれるよ。ヤレン、ディアのこと、頼んだよ」

「やだ、やだ、サーレイ、帰ってきて。消えないで！」

幼子のように駄々をこねる私に、サーレイは、昔、聞き分けのない私によく見せたのと同じ、困ったような笑顔を見せた。

「ディア、僕はもう、本当はここにはいないんだよ。ここに見える僕は、夕日が沈んだ後に残る薄明かりみたいなもの。時間が経てば薄れて消える。でも、僕の魂は、命の川で君を待っているよ。君も、僕も、ヤレンも、部族のみんなの魂が、いつかは同じ大きな命の流れに還って、ひとつに融け合って、地下を流れる見えない川みたいに、永遠にこの世界の底を流れ続けるんだ。その時は、みんな一緒だよ。だから、泣かないで」

「いや、だめ、行かないで、置いていかないで！」

「ごめんね、ディア……」

サーレイの、実体のない指が、そっと私の頬を撫でて、離れてゆく。

サーレイから幻がはらはらと剥がれ落ちて、その姿が透き通ってゆく。最後まで残った微笑みの名残が、空気に溶けた。

思わず駆け寄って手を伸ばしたけれど、手に触れるものはない。

立ち尽くす私にヤレンが歩み寄って、後ろから肩を抱いた。

私は振り向いて、ヤレンの温かな胸にしがみつき、声を限りに泣きじゃくった。

ヤレンの前で泣いたのは、初めてだった。ヤレンでなくても、誰かの前で泣くのは、サーレイが死んでから初めてだったかもしれない。

ヤレンは黙って抱きしめていてくれた。

いつのまにか戻ってきていた山羊たちに服をひっぱられて我に返った。

そっとヤレンから身体を離して、首にかけていたはずの護り石の鎖を手繰ってみると、そこには、空っぽの留め金があるだけだった。サーレイは行ってしまったのだ。

もうすぐ日が暮れる。夜の荒地には危険な獣が出る。暗くなる前に宿営地に帰らなければ。

そう思っても、動けなかった。石をなくした留め金のように、自分も空っぽになったような気がした。

じっと留め金を見ていると、ふいに、留め金を持つ自分の手がすっかり荒れて硬くなり、年寄りめいていることに気づいた。

部族の女は誰でも厳しい仕事をこなしているけれど、中でも私は、他の女が家の中で衣服を縫い赤子をあやしている時にも荒地で山羊を追い、普通は男がするような荒仕事もできるかぎり一人でしてきたのだ。手が荒れているのは当たり前かもしれない。

けれど、それだけじゃない。

さっき私の前に現れたサーレイは、滑らかな額も若々しい、涼やかな若者だった。

あの若者の隣に似合うのは、哀しみも恐れも何ひとつ知らぬまま幸福な驕慢と恋の情熱に輝いていた奔放な少女　今はもういない少女だ。

彼が死んだ時、彼は十八で、私は十六だった。それから十年経った。私は歳をとったのだ。

「ヤレン。サーレイは、行ってしまったわ」

「ああ」

言葉は短かったけれど、ヤレンの目には、サーレイを失った私への気遣いが宿っていた。そして、たぶん、つかのま再会した遠い若者時代の幻を再び見送った、自分自身の寂しさも。そう、ヤレンにとっても、サーレイは、若者時代を共に過ごした同年代の仲間の一人だったはずなのだ。

「あなたもサーレイを見たのね」

「見た。声も聞いた。……あいつ、ぜんぜん変わっていなかった」

「私たちは変わったわ」

「ああ」

私たちはなんとなく寄り添って、さっきサーレイが立っていた場所を見やった。そこにはただ夕映えの荒野があるだけで、もう何も見えないのは分かっていたけれど。

私は歳をとり、護り石は消え、サーレイは行ってしまった。かつて当たり前のように私に降り注いでいた男たちの賞賛も遠い夢となり、家族の温もりも失い、女友達も、それぞれに家庭を持つにつれて自然と遠くなっていった。

けれど、そんな何ひとつ持たない私のそばに、今もいてくれる人がいる。

そのことを思うと、傍らに寄り添うその温もりが、私の中の空白を満たしてゆくのを感じた。

ヤレンの顔をそっと見上げて、恐る恐る囁いた。

「ヤレン、今でも私の求婚を待っている？」

「もちろんだよ」

ヤレンは驚いたように答えた。

「私は一人で危ないところに来てあなたまで危ない目にあわせるような、こんな考えなしの馬鹿だけど、それでも？」

「それを言ったら、動転して人手も頼まず一人で君を捜しに飛び出してきた俺だって馬鹿だよ」

「でも、私はもう、こんなに年寄りよ？ もっと若くて綺麗な娘がいくらでもいるわ」

ヤレンは一瞬、ぼかんとして、それから笑い出した。

「何言ってるんだ。君は今でも部族で一番の美女だよ。女たちの間で君に風当たりが強いのは、そのせいもあるんじゃないかな。君がいつまでも一人でいると、君が部族の男たちを惑わすんじゃないか、自分たちの夫や恋人を君に取られるんじゃないかと、心配でしかたないんだろう」

「私がそんなことするわけないのに」

「そうだろうけど、女たちは心配でしょうがないのさ。君があんまり美しすぎるから。実際、君は俺を惑わせてるしね。もう十年も」

ヤレンは笑った。私は頬が赤らむのを感じて俯いた。

「でも、こんなに手が荒れているわ。顔だって、きっと」

私は鏡を持っていないから、自分の顔なんて、もうずっと、水に映った歪んだ影くらいしか見たことがないけれど。

「俺だって、手は荒れてるよ。顔だって、こんなだ」

ヤレンがわざと変なふうに顔をしかめてみせたので、私は思わず笑った。そうして、自分がまだ笑えることに驚いた。

そう、私が年寄りなら、ヤレンだって年寄りだ。私より幾つか年上のはずだから。普通なら、とっくに結婚して、子供が何人もいるはずだ。実際、あの頃私を争った他の男たちはみな、とっくの昔に妻を得て、たいていはもう何人も子供を持っている。そんな歳になるまで、ヤレンは私を待っていてくれたのだ。

私はまっすぐ顔を上げ、ヤレンを見つめた。

今、言わなければ、きっと一生、言えないままになる。

「ヤレン、怪我はしてない？」

「かすり傷だけだ」

「じゃあ、今夜、私の天幕に来て」

ヤレンは言葉もなく頷いた。

その眼差しの熱さに灼かれながら、私は、首にかけた空っぽの鎖を外そうとした。

その手を、ヤレンが優しく押しとどめた。

「それは、付けておおきよ。石はなくても、サーレイの思い出として」

私が頷くと、ヤレンは微笑んで、それから私を胸元の鎖ごと強く強く抱きすくめ、薄れ行く夕映えの中、奪うように口づけた。

息ができなくなるような、長く激しい口づけだった。

私たちの結婚を、手放して喜んでくれる人は少ないだろうけど、反対する人もいないだろう。揃って部族の常識から外れる生き方をしてきた私たちは、ずっと困り者と見なされてきたから、私たちが一緒になると言えば、これで部族内の厄介事がひとつ片付いたと、みな安堵して、好きにさせてくれるだろう。はみだし者同士、私たちは、肩を寄せ合って、この広い荒地の片隅で、ひっそりと生きてゆこう。いつか、サー

レイの待つ命の川に還るまで。

私たちの生命は、悠久の命の川の流れからつかのま飛び出した水の飛沫のようなもの。たまたま跳ね上がった水飛沫の一滴が、一瞬の旅を終え、再び川面に落ちて流れに戻るように、私たちはみな、やがて、すべての命が流れ込む大河に還る。愛した人も憎んだ人も、みんなひとつに融け合って。

その時は、私もヤレンもサーレイも、名前もない祖霊の一部になって、悠久の流れの中から、この荒地を、そこに生きる子孫たちを、いつまでも見守り続けるのだろう。

了

文：冬木洋子（ふゆき・ようこ）

<http://www.geocities.jp/canopustusin/>

異世界ファンタジーがメイン・ジャンル、恋愛がサブ・ジャンルという感じで、たまに他のものも書きます。無駄にトシくってるのがウリです。

絵：恵陽（けいよう）

http://www.geocities.jp/keiyo_u/top.html

こんにちは。物書きのくせに絵描きでも参加させていただきます。

大したもの描けませんが、少しでも皆様を楽しませることができればなあと思っています。よろしくお願いいたします。

GreenBeetle

illustration
女将

冒
険

め
ぐ
る

炒
り
豆
を



恋人に逢うために、
はるばる旅をしてきたリーナを待っていたものは
都会の誘惑と、とんだトラブル!?

パワフルなライトノベル

おおー、着いたぞーっ！

そう心の中で叫んでから、リーナは大きく伸びをした。豪快な動きに合わせて、太い三つ編みがぶんぶん揺れる。

喧騒渦巻く、州都の停車場。つい今しがた停まったばかりの乗合馬車から、リーナに少し遅れて、残る乗客がのろのろと地面に降り立ちはじめた。皆一様に疲れの目立つ表情で、大儀そうに腰を叩いたり伸ばしたりしている。

「リーナちゃんは元気ねえ」

「へへへへ、そりゃー、若いですからね！」

リーナは思いっきり得意げに胸を張って、長旅の道連れ達に笑い返した。

「リーナちゃんのお蔭で、楽しかったよ」

「そうそう。また帰りも一緒だったらいいね」

馬車から降り立った八人は、それぞれ荷物を抱えて、各々の目的地へと散っていく。さてと、と大きな鞆を肩にかけようとして、リーナは外套のポケットのふくらみを思い出した。右のポケットから干し芋を、左のポケットから炒り豆が入った袋を取り出し、鞆の中に移し替える。どちらも、馬車に乗り合わせたおじさんおばさんから貰った大切な品物だ。

私って、年上受けするのかなあ。

これで、一食分の食費が浮いたかも。リーナはにんまりと笑みを浮かべた。

峰^{ほうとう}東州の都ルドスと、東の最果ての街サランとの間を、十日に一度の割合で長距離の乗合馬車が行き来している。元々郵便を運搬するために開設されたこの馬車便は、いつの頃からか、同行者がおらず、経済的に余裕がなくて護衛やお供を雇えない旅人を、比較的安価な運賃で運ぶという重要な役割をも担うようになっていた。

リーナがその乗合馬車に乗り込んだのは、もう半月も前の事だ。

サランの西隣、イという名の小さな田舎町でリーナは暮らしている。町に一つしか無い教会の、治療院が彼女の勤め先だ。この旅のために、リーナはここ数ヶ月間、休日を全て返上する勢いで働いた。

だが、そうしてやっとの事で手に入れたひと月余という長期休暇も、州都までの長い道のりの前にはあまりにも心もとなかった。多くの路銀と時間とをつぎ込んだにもかかわらず、彼女がルドスに滞在する事が出来るのは、わずか一週間にも満たない。

仕方が無いよねえ。あっちだって、状況は同じようなものなんだし。

大きく溜息をついて、リーナはこれから会う予定の人物の顔を思い描いた。栗色の前髪の下から覗く人懐っこい瞳。男前には違いないが、どこか掴みどころの無い笑顔が特徴の恋人 サンが出仕している帝都は、ここから更に西、険しい山々の向こうにある。

二年前、サンが上京して半年、初めての里帰りに彼はわずか一日しか故郷に滞在する事が出来なかった。それも、悪天候を一切考慮しない、やけっぱちもいところな強行軍だったらしい。

たまたまあの時は運に恵まれた、だが、流石にもうそんな無茶は出来ないだろう、次はいつ帰れるか分からない。そう語るサンからの手紙に、じゃあ、どこか途中で落ち合わない？ と返したのは、リーナの方だったのだ。

って、でも、こうするしか他に手は無かったよねえ？

ルドスで会おう、って自分が切り出さなければ、サンは一体どうするつもりだったんだろう。まさか、それっきり、はい、サヨウナラ、って事は無いと思いたいけれど、あのままでは、いつまでたっても「会いた

いね」「会えたらなあ」を繰り返したまま、二人の関係は自然消滅してしまったかもしれない。

大体、煮えきらなさ過ぎなのよね、あいつ。何を遠慮してるんだか知らないけれど、したい事、して欲しい事があるなら、ずば一っと言えばいいのに。

まったく水臭いんだから、とリーナが鼻息も荒く両手を腰に当てた、その時。石畳を蹴る軽い足音とともに、彼女の背中に何かが勢い良くぶつかってきた。

うぎゃっと情けない悲鳴を上げて、リーナは前方につんのめった。その拍子に、肩にかけていた鞆が路面に落ちる。すんでのところまで体勢を立て直したリーナの前に、帽子を目深にかぶった一人の少年が、息せききった様子で回り込んできて、落ちた鞆を拾い上げてくれた。

「ごめんよ、急いでるんだ！」

「危ないでしょ、まったく。気を付けなさいよ」

分かった、と大きく頷きながら、少年は路地の向こうへと走り去っていく。

「……全然解ってないし」

ふう、と大げさに溜息をついてみせてから、リーナは大通りをゆっくりと歩き始めた。

「もう逃げ場はねえぜ」

「さあ、観念してアレを渡すんだな」

見るからに悪人面をした二人の男が、ひとけの無い路地に追い詰めているのは、先ほどリーナにぶつかってきたあの少年だ。

「お前がアレをお頭からスリ取ったのは分かってんだ。酷い目に遭いたくなければ、返してもらおうか」

背が高い方の男が、少年の胸倉を掴んで力任せに引き上げる。少年は両足をばたつかせながら、必死で大声を上げた。

「知らないよ！ 僕、そんなもの知らないよ！」

「嘘をつけ！」

「嘘なんかじゃないよ！ 持ってないよ！ 嘘だと思っただったら、探してみろよ！」

少年の叫びに、背の高い男 仮に、悪党其の一とでもしておこう がほんの少しだけ怯んだ様子を見せた。その隙に、少年は其の一の腕を振り払って地面に着地する。即座に脱兎のごとく逃げ去ろうとした少年を、今度はもう一人の男 こちらは悪党其の二か が捕まえた。

「やい、お前、どうしても痛い目に遭いたいらしいな」

「だから、持ってない、って言ってるだろ！ 離せよ！ あんたら、子供を捕まえるのと、宝石を取り戻すのと、どっちが目的なんだよ！」

その言葉を聞いて、悪党其の一と其の二はお互いに顔を見合わせ、しばし沈黙した。

「なるほど」

「よし分かった、お前の持ち物を調べさせてもらうぞ」

言うが早いか、其の二が少年の上着のポケットに手を突っ込む。其の一はズボン。服の上から少年の身体をパタパタと叩き、帽子を逆さに振り、上着の裏地を調べ……。

「兄貴、こいつ、持ってねえ……」

最後に少年の口の中を覗き込みながら、其の一がそう絞り出した。

「ほら、知らないって言っただろ？」

得意そうな顔で少年が上着の襟元を正す。じゃ、頑張ってるね、と立ち去ろうとした彼の首根っこを、其の

二が慌てて驚掴みにした。

「って、お前、なんでアレの中身が宝石だって知ってるんだ!？」

重要な点によりやく気が付いたらしい男は、しまった、という表情を作る少年に向けて拳を固めた。

「お前、やっぱり、盗ってやがったな！」

「知らない、知らないよ！」

「ふざけるな！」

「でもよ、兄貴、現にこいつ、何も持ってなかったぜ」

「おい、お前、どこに隠した！」

「知らないって！」

「まだトボけるか!？」

噛み付かんばかりの勢いで少年を恫喝する其の二に、其の一が至極不安そうな視線を絡ませた。

「どうすんだよ、兄貴。お頭にどやされちまう……」

「待て、良く考えるんだ。あの時、お頭にこいつがぶつかって来るまでは、あの袋はあったんだろ？」

「で、その後すぐに俺達はこいつを追いかけた」

「どこかに隠したか、仲間に手渡したか……」

そこで、二人はもう一度顔を見合わせて、今度は叫び声を上げた。

「あー！ さっきの女！」

一瞬生じたわずかな隙を、少年は見逃さなかった。勢い良く其の二のむこうずねを蹴り上げ、緩んだ手を振りほどく。そうして少年は全速力で袋小路から逃げ出した。

「うわーっ！ 助けてー！ 殺されるーっ！」

表通りへと続く細長い坂道は、人通りこそ無いものの、彼らが先ほどまでいた場所とは違って見通しは格段に良い。石畳と家々の壁に反響した少年の声に、男達は激しく動揺した。

「おい、こら、人聞きの悪い事言うな！」

ひと角走ったところで、其の二はやっと少年に追いつく事が出来た。問答無用で少年を羽交い締めにし、なんとか口を塞ごうとする。

「あの女の居場所を言えば何もしねえよ！」

「たーすけてーっ！ 人さらいだー！」

「くそ、黙れ！ クソガキ！ あの、茶色の三つ編みの田舎娘はどこだ！」

あれだけの邂逅で、リーナの事をこれだけ把握出来ているというあたり、この悪党其の二、ある意味大した慧眼の持ち主なのかもしれない。

「ころされるうー!! だれかー！」

「何だか知らないけど、子供相手に大人げ無い。離してやれよ」

突然頭上から涼しげな声が降ってきた事に驚いて、其の二と少年は一様に顔を上げた。

ひょろりと背の高い、だが意外にがっちりとした肉付きの若い男が、腕組みをしながら二人を見下ろしていた。

その飄々とした態度と気の良さそうな瞳に勇気を得たのか、其の二は不敵な笑みを浮かべて若い男をねめつける。

「よおよお、兄ちゃん。これは身内の問題なんでね、関係無い奴はすっこんどいてもらおうか」

「嘘だ、嘘だよ！ 身内なんかじゃないってば！ こんなおっさん知らないよ！」

「……って、言ってるけど？」

「反抗期ってやつさ。さあ、とっとと……」

威勢良くそこまで啖呵を切って、それから其の二は動きを止めた。硬直した視線は、若い男の腰に注がれている。外套越しでも窺う事の出来る、ひと振りの長剣の存在に。

「兄貴、どうしたんですかい。こんな優男、さっさと……」

少年が自由を取り戻すのを見て、其の一の目が丸く見開かれた。

「兄貴!？」

「……どのみち、あのガキは持ってなかったんだ。女を捜すぞ」

「で、でも兄貴……」

「うるさい、行くぞ！」

「ええー!? あにきいー」

どたどたと騒々しく走り去っていく二人を、若い男は無言で見送っていた。

その後ろでは、危機を脱した少年が、これ幸いとばかりに、そろりそろりこの場から離脱しようとしている。

「ちょっと待った」

だが、少年が走り出そうとするよりも早く、若い男の手が少年の右手首を掴み取った。

「な、なんだよ」

「……何か言う事があるだろ？」

「へ？」

本気でわけが解らない様子の少年に、若い男はがっくりと肩を落とした。

「あのねえ、別に感謝されようと思って助けたわけじゃないけどさ、こういう時は、一言お礼を言うものだろ？」

なるほど、と合点がいった様子で、少年は深々とお辞儀をする。

「助けてくれてありがとうございます。……じゃ、そういう事で」

爽やかにそう言い捨てるや否や、すかさず回れ右をして駆け出そうとする少年であったが、今度は男に左手首を掴まれ、大きく前につんのめってしまった。

「な、何すんだよ！」

子供らしからぬ気迫を瞳に込め、少年は男を睨みつける。その視線を事も無げに受け流しながら、男は顎に手を当てて何事かを考え込み始めた。

「……茶色の……、田舎……、いくらなんでも、考え過ぎだと思うけど……でも、なんかひっかかるんだよなあ……」

「何だよ、手を離せよ！」

「……ま、時間もあるし、思い過ぎだったらそれはそれで問題無いわけだし……」

「おい、何言ってるんだよ！」

「……よし」

何やら納得した表情で大きく頷いてから、男は長身を折り曲げるようにして少年の眼前にしゃがみ込んだ。じたばたと暴れる少年と改めて視線を合わせて、にっこりと笑顔を作る。

「さてと。どういう理由で、あいつらに追われていたんだ？ おにーさんに話してごらん？」

「……あんた、何者だよ」

「俺？ 俺はサン。通りすがりの旅行者さ」

朗らかに少年に笑いかけているにもかかわらず、サンの眼差しは少しも緩んではいなかった。

「いやーん、かわいー！」

市の立つ広場の一角、硝子細工の装飾品を並べた小さな屋台店の前にリーナはいた。キラキラと目を輝かせながら、組み合わせた両手を右頬に当てて、うっとりとして首飾りに見入っている。

「お嬢ちゃん、お目が高いねえ。それ、ウチの自信作だよ」

「そうなんですかー。こんなに綺麗なの、私、今まで見た事無いですよー」

「嬉しい事言ってくれるねえ」

鼠色のショールをまとった年配の女が、ワゴンの中の小箱から一粒の硝子玉を摘み上げて、陽にかざした。綺麗に磨かれた多面体が、秋の太陽を幾つも映し込んで幻想的に輝く。

「どうだい、宝石もかくやのこの煌き」

「ホントだ、すごーい！ キラキラしてる！ 宝石なんて見た事無いけど、本当にこんな感じなんだろうなあ！」

「んふふふふ。お嬢ちゃんたら、上手だねえ。どうだい、特別にオマケしておくよ？」

女主人が思わせぶりに片目をつぶる。リーナはほんの一瞬だけ目を輝かせて、……それから穴の開いた皮袋のように、みるみるうちにその身体を萎ませてしまった。

「……あ、でも、持ち合わせがそんなに無いんですよね……」

「うーん、じゃあ、これなんかは？ どうだい？」

そう言って女が取り出したのは、普通の丸い硝子玉と、美しくカットされた硝子玉とが、ほど良く混ざり合って作られた首飾りだった。

「これで、お値段は……」

続きを耳打ちされたリーナの目が、再び見開かれる。だが、彼女はすぐに悲しそうな表情になって、再度がっくりと肩を落とした。

「……帰りの馬車代をとっておかなきゃならないし……」

さしもの女主人も、少し不機嫌そうな眉で小さく唇を尖らせる。

「ルドスに着いたばかりって言ってたろ？ 買い物に来たんじゃなかったのかい？」

「買い物もしたいけど、一番は、人に会いに来たから……」

そこで、女主人の瞳がきらりん、と光った。

「デートかい」

「ええ、まあ」

「なんだい、なんだい、景気の悪い顔をして」

「いや、ちょっと今、我に返ってしまって……」

右手でこめかみを押さえながら、リーナは、はあっ、と大きな溜息をついた。

「バカみたいな大金使って往復一ヶ月も馬車乗って、せっかく州都に来たのに好きなもの一つ買う余裕もなくて、そこまでしても一年にほんの数日しか会えなくて、私、一体何やってんだろう、って……」

リーナのぼやきに、女主人の眼差しが同情の色を帯びる。と、ふと何かを思いついたらしく、女は悪戯っぽく口の端を上げてリーナの肩をポンポンと叩いた。

「馬鹿ねえ。簡単な事じゃない。彼氏に買ってもらえばいいのよ」

「へ？」

「向こうの都合で、遠路はるばる呼びつけられてるんでしょ？ 好きなもの一つぐらい、彼氏に買わせなさいよ！」

「買わせる……」

「そうそう」

「好きなものを……？」

「そうよお」

にこにこ顔で女主人につられるように、リーナは晴れ晴れとした表情で顔を上げた。

「そっか！ 買ってもらえばいいんだ！」

「こんな遠くまで来てあげたんだぞ、って、お礼の品ぐらいねだっても構わないわよ」

「そうですよね！ 構わないですよ！」

「そうそう、その意気！」

「よーし、なんだかやる気が湧いてきましたー！」

「……って、どう考えても無理よねえ……」

硝子細工の店から離れて、リーナは再び大きく嘆息した。店のおばさんに乗せられてああは言ったものの、数歩も行かないうちに彼女の足取りはすっかり重くなってしまっていた。

「あいつだって、無理してルドスまで来てくれてるんだもん。買わせる、つってもなー」

興奮した時の癖で独り言を連発している事に気が付かないまま、思考だだもれ状態でリーナは歩き続ける。

「でもさ、近衛兵のお給金って、なんだか良さそうだよね。……ああ、でも、帝都って物の値段が高いって言ってたしなあ。『葡萄酒が一杯どれだけすると思う？』って、それは単に贅沢してるだけじゃん」

サンの声色を真似てみせてから、自分で反論してみても。独り芝居を繰り広げつつ、リーナは広場を歩き続けた。そうこうしているうちに、暗い気持ちが少しずつ晴れ始めて、再び買い物気分が盛り上がってくる。そもそも、彼女はあまり落ち込みが持続する性格ではないのだ。

「そうだよ、見るだけならタダだもんね。眼福、眼福」

リーナは鞆を肩にかつぎ直し、足取り軽く買い物客の人波の中へと戻っていった。

ぐう、と腹の虫が自己主張を始め、リーナは正午に近い事を知った。今日の朝食が、小さな硬いパンと干し肉一切れだけだった事を思い出してしまい、空腹感が更に増幅される。

『十月の第一週あたりの夕刻に、前回と同じ宿屋で』

これが今回、サンとなされた約束である。お互い天候に左右される長い旅程ゆえに、正確な日付を指定しての待ち合わせは不可能だ。無事会えた暁には夕食をともにする予定だったが、果たしてそれが叶う日が来るのかどうか……。

もしも自分が魔術師だったなら、この風に声を乗せて彼に届けるのに。そこまで考えてから、リーナはがくりと大きく肩を落とした。あの複雑怪奇で意味不明な古代語の呪文を習得するなど、自分に出来よう筈が無い。そもそも癒やしの術で手一杯な身が何を言う、と。

「……ま、悩んでも仕方の無い事は忘れるに限る、ってね」

あっけらかんと自分に言い聞かせてから、リーナは改めて辺りを見回した。

「晩ご飯は、出たところ勝負という事でいいけど、まずは昼ご飯よね。干し芋も炒り豆も、帰りのためにとっておきたいしなー」

ついつい視線が、食材や軽食の屋台に吸い寄せられてしまう。

無難にパン屋を探そうか、少し奮発してあそこの揚げ菓子を買ってみるか、うーん、でも、向こうに

あった果物の露店も魅力的だ……。

眉間に皺寄せ考え込むリーナの背後に、ふっ、と黒い影が立った。

「お嬢さん、何かお探しですかい？」

揉み手すり手猫なで声に精一杯の愛想笑いも付けて、悪党其の一は、標的であるところのリーナに話しかけた。周りの買い物客が、ぎょっとした表情で二人を見比べては、そうっとこの場から離れていく。

「何を、って、それが、今悩んでいるところなのよ」

だが、当のリーナは何かぶつぶつと呟くばかりで、一向に背後を振り返ろうともしない。其の一は負けじと、ぎこちない丁寧口調で食い下がった。

「お洒落なお召し物なら、お向こうにお安くて良いお店があるぜ……ますよ」

客を呼び込むどころか、全力で逃げられかねない上ずった声が、痛々しい。

「別に、服は間に合ってるからいいや」

心ここにあらずといった風な返事ののち、リーナがぴん、と姿勢を正した。そうして何やら鼻をひくひくさせながら、きょろきょろと辺りを見回している。

ややあって、彼女はすたすたと歩き始めた。依然として悪党達に背を向けたまま、広場の片隅へと向かっていく。

「……ちょ、ちょっと待ってくれよー、向こうに安い店が……」

置いてけぼりを食らった其の一を肘で小突いてから、今度は其の二が小走りに標的を追った。

「お嬢さん、いい靴屋を教えてやるよ？」

「これ、まだまだ履けるしなあ。いらないや、ありがと」

リーナの歩調が更に少し速くなった。其の二は雑踏に揉まれながらも、必死で声をかけ続ける。

「鞆とか、帽子とかは？」

「いらない。お金に余裕ないし……」

すげ無い声が、瞬く間に周囲の喧騒にかき消される。

呼び込みの声、値切る声、笑い声、歓声。それらを彩る、行きかう人々の多種多様な服装。山の民、海の民、白い頭巾は砂漠の民か。色とりどりの人波に、香辛料と炙り肉の匂いがかぶる。……そう、おいしそうな串焼きの香りが。

香ばしい煙が上がる一角へと邁進するリーナの後ろで、二人の悪党はひそひそと額を突き合わせた。

「兄貴、なんか話が違うぞ？ 作戦間違いなんじゃ……」

「おかしいな。田舎から買い物に出て来る娘っこのお目当てといたら、このあたりの筈なんだが……」

流石の其の二も、まさかこのリーナが人に会うためだけにわざわざ州都にやって来たとは、思ってもいないのだろう。

「意外なところで、装飾品や化粧品の方が釣れるかもしれんな」

「でも、本当に金を持ってなさそうだぜ？」

二人とも、かなり失礼な事を言っている。

「嘘に決まってるだろ！ 買い物に来るのに、金を持って来ない奴がどこにいる？」

「なるほど」

お互いに大きく頷き合ってから、二人は改めて追跡を再開した。広場の外れ、串焼き屋台のすぐ近くまで歩みを進めた茶色の三つ編みに、なおも勧誘の言葉をかける。

「土産物にぴったりな、首飾りなんかはどうだい？」

「あー、もう！」と、そこでようやく、リーナが二人を振り返った。「その事は、今は考えない事にしてるの！ お腹空いてるんだから、ちょっと後にしてよ！」

そうして両頬を見事にふくらませたまま、再び串焼きへと向き直る。二歩ほど進んだのち、ふと彼女の足が止まった。

「……って、おじさん達、誰？」

あまりの言い草に、悪党二人の面^{おもて}に朱が入る。たまりにたまった鬱憤の堰が、遂に切れてしまった瞬間だった。

「全部話したんだから、もう帰ってもいいだろ？」

「だーめ」

にっこりとサンに笑いかけられて、スリの少年は思わず背筋を震わせた。視線を合わす事が出来ずに、烏打ち帽を目深にかぶり直す。

身体を掴まれているわけでも、紐で繋がれているわけでもないのだから、逃げようと思えばいつだって少年はサンのもとから離れる事が出来る。なのにそれを実行する気になれないのは、サンの屈託の無い笑顔の奥底に、言葉には言い表せない不穏な何か蠢いているような気がしてならなかったからだ。少年は今、助けを求める相手を間違えたんじゃないかという思いに、心の底から苛まれている最中であった。

「カイがあいつらの財布をスリ取ったのが原因なんだから、きっちり最後まで付き合う事」

「警備隊には突き出さないでくれるんだよな？」

二人は、前に行く荷馬車にならって大通りから細い路地へと角を曲がる。薄暗い建物の影がしばらく続く向こうに、明るく開けた広場が見えた。

「それは俺の仕事じゃないからね。ま、あまり人様に迷惑をかけないようにして生きる事だね」

余計なお世話だ、と鼻を鳴らしてから、カイと呼ばれた少年は、不貞腐れて腕組みをした。

「んじゃ、今している事は、あんたの仕事なのか？」

「そうかもね」

そう軽く答えたのち、サンが少し真面目な表情でカイを見やった。

「身長が五フィートとちょい、年の頃は十七、八。茶色の三つ編み、東部訛りで連れは無し。色んな布をはぎ合わせた大きな肩下げ鞆、おせっかっぱいおばさん口調……。流石、スリをしているだけの事はあるな。大した観察眼じゃん」

「それほどでも」

露店の並ぶ大広場に足を踏み入れた途端、二人の顔面を喧騒が打った。群衆のざわめきが、広場を取り囲む建物の壁々に反響して、うねるように四方から押し寄せてくる。

「その人物像が確かなら、その女とやらが俺の知っている人間と同一人物である可能性は、かなり高いんだよな」

長身を活かして辺りをきょろきょろと見回していたサンが、小さく頷きながら、広場の奥の方へと足を向けた。カイも慌ててその後を追う。

「で、もしも彼女なら、市の立つ今日、ここに来ないわけが無い」

「って、もしかして兄さんの恋人？」

「まあ、ね」と、少しだけ照れたような笑みを浮かべて、サンが再び前方へ向き直った。「折しも、昼飯時。彼女ならきっと、何を食べようか悩んで食べ物関係の屋台をさすらっているに違いない。手ごろで美味そ

うな店から聞き込んで回れば、多分すぐに……」

ふんぶん、と適当に相槌を打っていたカイだったが、次の瞬間、あるものを認めて大きく目を見開いた。
「あー！ 兄さん、あれ！」

カイの叫び声に、サンが弾かれたように振り返った。

買い物客でごったがえす広場とは対照的に、建物の壁沿いには、幾つかの屋台がまばらに出ているだけで、通路ともいえる空隙くうげきが細長く開けている。その遙か遠くの向こう隅、見覚えのある凸凹コンビが一塊となって建物の陰へと姿を消した。それはほんの一瞬の出来事であったが、二人組の悪党が三つ編みの女を無理矢理連れ去る様子が、はっきりと見てとれた。

「冗談じゃない！」

毒づくと同時に、サンが駆け出した。

何度も人にぶつかりそうになりながらも、彼はまるで風のように、俊敏に人波を避けては、女が連れていかれた路地を目指す。

「……すげー」

カイはしばし呆然とサンを見送って、それから慌ててその後を追いかけて始めた。これは面白い事になったぞ、と上唇を湿しながら。スリの本領発揮とばかりに、これまた見事な身のこなしで人々の隙間をぬい進む。

広場を抜けたサンに続いて、カイも角を曲がった。

明るさに慣れた目が、路地の薄暗さに視力を奪われる。思わず足を止めたカイの眼前で、サンの背中が影の中へと飛び込んでいった。微塵も躊躇わぬその豪胆さに、カイの口から感嘆の息がもれる。

石畳や塗り壁が次第に輪郭を取り戻し始める視界の中央、ひと角向こうで馬車の扉が閉まった。同時に辺りに響き渡る、鞭の音。

ゆっくりと車輪が回り始め、馬車は建物の陰へと消えていく。

「待ちやがれ！ その馬車！」

「兄さん！ こっちが近道だよ！」

すぐ左手の建物の裏、溝とも通路ともつかない家々の隙間が、大通りに繋がっているのを、カイは思い出したのだ。

「馬車が通れる道なんて、限られているもんね」

「なるほど。スリには土地勘も必要ってわけか！」

「その通り！ 僕にまかせてよ！」

言うが早いか、石壁の間へとカイは身をおどらせた。

二人組の男に飛びかかれて、問答無用に口を塞がれ、力任せに引きずられ、馬車に押し込まれて。

未だかつて無い非常事態に、半ばパニック状態に陥りかけたリーナを正気づかせたのは、馬車の中で待ち受けていた中年の男の、くるりん^{えが}と見事なカールを描いた口髭の存在だった。

「さあ、アレを返してもらおうか」

細面の輪郭からはみ出た焦げ茶色の巻き髭が、口の動きに合わせてゆらゆらと揺れるさまに、リーナは思わず二、三度と瞬きをし、それからふき出しそうになって思わず下を向いた。

「なに、怖がらなくなったっていいんだよ、お嬢ちゃん。アレさえ返してくれたら、無事に家に帰してあげるから」

ゆらゆら、ゆらりん。

夏の太陽の下で風に揺れるキュウリの蔓を思い出しながら、リーナは必死で笑いをこらえつつ顔を上げる。

「……あ、アレって、何ですか？」

辛うじてそう答えたリーナに向かって、巻き髭氏はフン、と鼻を鳴らしてみせた。それから、リーナの両脇を固める悪党其の一と其の二に、ちらり、と視線を投げた。

小型の二輪馬車の座席は狭く、一人で片側の座席にふんぞり返る巻き髭氏に対して、其の一と其の二は半分以上お尻が座席からはみ出した体勢で、窮屈そうにリーナを両側から捕まえている。そんな不安定な姿勢にもかかわらず、巻き髭氏の目配せを受けた其の二は慌ててリーナの鞆を奪い取った。

「な、なにをするのよ、ちょっと、これ私の鞆……！」

抗議の声を上げて身を乗り出そうとしたリーナを、其の一が座席に押さえ込んだ。うひゃあ、としりもちをつくリーナには目もくれずに、其の二が彼女の鞆の中を探り始める。

「あ！ ありましたぜ、お頭！」

「あーっ！ 私の豆ーっ」

得意そうに吼える其の二の手には麻の小袋が掴まれていた。それを見たリーナが思わず叫び、傍らの其の一が耳を押さえて床にうずくまる。

「何が豆だ。往生際が悪いぞ」

「って、お頭、本当に豆です」

その瞬間、ぴくり、と髭が痙攣するように震えた。ほんの一呼吸の間硬直していた巻き髭氏だったが、はっと我に返って其の二の手から麻袋をむしり取る。滑稽なほどに慌てた様子で袋の中に手を突っ込み、そして再び動きを止めた。

「……豆だ」

信じられないものを見る眼差しで、巻き髭氏は摘み上げた炒り豆を凝視する。

悪漢達三人の注意が一粒の豆に集中した隙に、リーナは勢い良く身を起こして、其の二から鞆を、巻き髭氏から炒り豆の袋を奪い返した。手早く小袋の口を縛り直してから鞆の中に放り込み、誰にも渡すものか、と身体全体で鞆を抱え込む。

「帰りに食べるのを楽しみにしてるんだからね！ おじさん達なんかにはあげないんだから！」

「誰が豆を欲しがるか！」

「取ったのはおじさんじゃん」

ぐ、と言葉に詰まりながらも、巻き髭氏はトカゲを思わせる瞳に精一杯の威厳を込めて、リーナを睨みつけた。

「宝石をどこへやった」

「何、その、ホーセキって」

怪訝そうに問い返すリーナに、今度は其の一が詰め寄ってくる。

「スリの小僧から受け取っただろう！」

「知らないよ」

「知らない筈が無いだろ！ あいつはお前以外の誰とも接触しなかったんだぞ！ さあ、答えろ、宝石はどこだ！」

今度は、リーナが耳を塞ぐ番だった。さっきの仕返しと言わんばかりの、其の一の大声は、狭い馬車の内部をびりびりと震わせる。

耳元でかなり立てる其の一の剣幕が一段落ついたところで、彼女はそうっと耳から手を離し、そうして

大きく溜息をついた。

「だから、本当に知らないんだってば。ねえ、そんなに大変な物を入られたんだったら、警備隊に行った方がいいよ。私も一緒について行ってあげるからさ」

「行けるわけが無いだろう！」

血相を変えてそう答える巻き髭氏に、リーナは殊更に軽い調子でひらひらと手を振った。

「やだなあ、おじさん、警備隊に行けないなんて、お尋ね者じゃあるまいし……」

冗談めかしてそう言ってから、リーナは微かな違和感を覚えて一同を見渡した。

向かいの席に座る巻き髭氏が、右隣に腰かけている悪党其の一が、左側に中腰で立つ悪党其の二が、やけに神妙な顔で黙りこくっている。

嫌な予感、が、する。

しかし主^{あるじ}の懸念をよそに、リーナの口は見事な勢いで言葉を吐き出し続けた。

「……それに、宝石が盗品だっていうわけじゃあるまいし……？」

その場に降りた沈黙は、更にその深みを増して、リーナの身体を呑み込んでいく。……そう、まさしく泥沼のように。

わざとらしい咳払いののち、巻き髭氏は手に持ったステッキで、馬車の天井を三度小突いた。

「おい、スーリヤの店へやってくれ。場所を変えて仕切り直した」と、ねっとり粘着質な視線をリーナに絡ませ、「なに、そのうち嫌でも隠し場所を喋りたくなるだろうよ」

藪をつついて、なんとやら。あまりの事にリーナは大きな目を更に丸くして、そして叫んだ。

「ええええーっ？ 正解なわけー!？」

にやり、と口角を上げる巻き髭氏。その拍子にご自慢の髭が、くるりんと可愛く揺れた。

馬車はそれからしばらくの間走り続け、ようやく目的地に到達した。

もちろん、リーナとて大人しく捕まっているつもりは無かった。他に何のとりえも無い自分だが、こう見えても癒やしの術だけは自信がある。イの町一番の癒やし手たる自負も充分に、「昏睡」の術で活路を開こうとした。

いわゆる魔術とは違い、癒やしの術は施術相手に触れる必要があるため、どうしても一度に相手が出る人数が限られてくる。だが、最初に二人を昏倒させる事が出来れば、残るは一对一。相手が武器を持っていたとしても、この狭い馬車内ではあまり役に立たないだろう。

そう覚悟を決めると、リーナは抱えた鞆の陰で慎重に指を動かし、密かに術の印^{えが}を描いた。気付かれないうちで口の中でボソボソと呪文を詠唱しながら、両手をそっと悪党達に差し伸べる……。

その瞬間、馬車が大きく跳ね上がった。車輪が小石を噛んだのだろう、礫^{つがて}が馬車の底面に当たる鈍い音が響く。

予期せぬ揺れに、リーナの両手が虚しく空を切った。驚きのあまり声を抑える事を忘れ、詠唱の続きが悪党達の耳に入る。

「お頭、こいつ、癒やし手だ！」

「なんだと」

「こいつ、汚い真似を！」

汚いのはどっちだ、とリーナが文句を口にするよりも早く、彼女の両手は其の二によってねじり上げられてしまった。そのまま後ろ手に手首を拘束され、術を封じられる。

「痛い痛い、痛いって！ 暴力反対！」

そうやって、成すすべも無いままに、リーナは馬車から引きずり下ろされ、どこかの裏口から薄暗い建物の中へと連れ込まれてしまったのだった……。

「ちょっと。何か良からぬ事にアタシの店を巻き込まないでくれよ」

泣きぼくろがちょっと色っぽい三十代ぐらいの女性が、気だるそうな表情で三人組とリーナとを交互にねめつけた。

ベッドと机だけが置かれた殺風景な部屋。窓には鎧戸が下ろされているのが、真っ昼間にもかかわらず暗い室内に、ランプの光がやけに頼りなげに揺れている。机に浅く腰をかけた女性の冷やかな視線に怯む事無く、巻き髭氏は部屋を悠然と横切ってベッドに腰をかけた。

「まあ、そうカリカリするなよ。これから長いお付き合いだろう？」

「まだ、そうと決まったわけじゃないよ」

あれ？ この人、この連中の仲間じゃないのかな？

扉の前、凸凹コンビに両脇を固められて立つリーナは、大きな瞳をぐるりと巡らせた。

両手を塞がれて術を使えない現在、彼女に出来る事といえば最善の機会を窺う事のみだ。三人がかりで襲い掛かれるという事態にでもなれば別だが、そうでない限りは下手に騒げば体力を消耗するばかりである。

癒やし手という博愛主義に満ち溢れた職業柄、曰くありげな怪我人の治療をする事も、それに付随した騒動に巻き込まれる事も、リーナは何度が経験している。我ながらヘンな度胸がついたものだわ、と嘆息しながらも、彼女は油断無く辺りに注意を配り続けた。ほんの一秒だけでも片手が自由になれば、こっちのものだ。そうなったら、ものの数秒で全てのカタはつけられる、と。

あのおかしな巻き髭のおじさんはともかく、右側に立つ背の高い奴はちょっとどんくさそうだし、左側の兄ちゃんは根は人が良さそうな雰囲気をしている。あのお姉さんも立ち位置が微妙そうだし、最初に狙うのは髭のおじさんでいいだろう。いや、それとも、まずは両側の二人を倒す方がいいかな……？

「『そうと決まったわけじゃない』？ なんだよ、まだ使ってなかったのかよ」

やだなあ、このおじさん。なんだかさっきから急に口調がねちっこくなってしまってるよ。

そう思いつつリーナがちらりと左右を窺うと、其の一も其の二も彼女同様に、げんなりとした表情で自分達のボスを見つめていた。

「馬鹿言うんじゃないよ！ いくら薬師やくしが問題無かろうって言っても、あんなもの、いきなりあの娘達こに使えるわけないだろ？」

「わざわざ薬師に調べさせたのか。用心深いこったな」

「当たり前だろ」

何の話をしているんだろう。ってか、私は一体どうなるんで？

疑問符を頭の周りに飛び交わせながら、リーナは黙って事態の推移を見守り続ける。

「……で、自分が試そう、と。相変わらずイイ女だな、スーリヤ。俺が相手してやろうか？」

ふゆふゆと揺れる髭が、全てを台無しにしているような気がする。気障な男に徹しきれない巻き髭氏を見つめながら、リーナはつらつらと考えていた。人間、中身で勝負って言うけれど、やっぱりある程度の外見は必要だよなあ……、と。

「謹んで遠慮させてもらおうよ。今晚にあの人が来るからね」

「ふん。だが、その必要は無いぜ。今から、この女で試せばいいんだからな」

そこで初めて、巻き髭氏はリーナの方を向いた。その、やけに粘ついた視線に、リーナの背筋に悪寒が走った。

「で、一体何事なのよ。この娘が一体どうしたって言うのよ」

スーリヤと呼ばれた女性が、怪訝そうに眉をひそめる。美人はどんな表情をしても美人だなあ、なんて暢気な事を考えている場合ではなくって！

急に話題の矛先が自分に向けられた事に、リーナの心臓は早鐘のように打ち始めた。

「なに、この女が、俺からくすねたブツのありかを、どうしても言いたくないらしくてな」

「だから、知らないんだってば！」

「……って、言ってるけど？」

すまし顔のスーリヤに、リーナの左腕を掴んでいる其の二が、どういうわけかどこか得意そうに胸を張る。

「姐さんともあろう人が騙されてるんじゃないよ。この女がどんなにしたたかに俺達の追跡をかわしたか、見せてやりたかったな」

追跡？ かわす？ なんだそれ。追跡されている事に気が付かずにかわしてしまう追跡って、それ、追跡って言えるわけ？

当然の疑問ではあるが、流石に口にするのは憚られて、リーナは眉間に皺を寄せるだけにとどめた。

「それに、あんただって、いくら薬師のお墨付きを貰ったにしても、効果の良く解らないものを使うのは、勇気がいるってモンだろう？」

「え、まあ、そりゃあ、ね……」

得意げな巻き髭氏に、言いよどむスーリヤ。リーナの胸中に不吉なものが押し寄せてくる。

「じゃ、決まりだ。あれを一つ持ってきてくれないか？」

「……ここにあるわよ」

少しだけ躊躇いがちに、スーリヤが懐から小箱を取り出した。

「あの一。イマイチ話が見えないんですけど……」

嫌な予感に耐えきれず、リーナはおずおずと口を開いた。と、巻き髭氏が、酷くもったいぶった調子でスーリヤを指し示す。

「この姐さんはな、ここ、『風雪花』の女将なんだよ」

「『風雪花』って？」

巻き髭氏の手^{いざな}に誘われるがままに、今度はスーリヤの方に問いかけるリーナ。

「妓楼さね」

「ぎろー？ って、え？ その、あの、妓楼!？」

リーナの故郷、辺鄙なイの町には、売春宿など存在しない。純朴な田舎娘としては、思わず叫んでしまうのも仕方が無いだろう。

「……したたか？ なんか、雰囲気違うんだけど？」

「演技だ、スーリヤ。騙されちゃいけない」

勝手な事をしたり顔で述べてから、巻き髭氏がゆっくりとベッドから立ち上がった。

「とにかく！ この姐さんは妓楼の女将で、先日、この俺様を頼って、ある悩み事を相談してきたのだ！」

「別に、相談したんじゃないくて、あんたが勝手に愚痴に喰いついてきただけじゃないか」

「とにかく！ 曰く、新人のウブな娘^こが、客をとるのを躊躇らっていて、ナンギだと！ 出来れば、無理矢理させるのじゃなく、自然と職業意識を出してくれるようにならないだろうかと！」

不必要に力の籠った演説に、リーナの両側から微かな笑いがもれた。

「そこで！ この『貪欲丸』の登場だ！」

何、そのイケてない名前。

今度は、リーナも失笑を禁じえなかった。だが、そんな聴衆の様子に欠片も気付く事無く、巻き髭氏は芝居がかった態度でスーリヤから小箱をむしり取った。

「東の砂漠近くの秘境に生えているという、神秘の植物ルカカラの根を煎じて調合した、究極の媚薬！ わざわざ辺境から取り寄せた、貴重な一品！ これさえあれば、どんな生娘だろうが、瞬くうちに艶めかしい妖婦に変身する事間違いなし！」

なるほど。それは確かに、薬師に相談もしたくなるだろう。毒ではないと判ったにしても、こんなにいかがわしいもの、なかなか使用には踏みきれない筈だ。

そこまで考えて、リーナは、ふと我に返った。我に返った途端に、一気に全身から血の気が引いていく。

「ちょ、ちょっと待って！ もしかしてそれを……」

好色そうな目つきで、巻き髭氏が口の端^はを吊り上げた。これまで笑いの対象でしかなかった口髭が、急にいやらしいものを感じられてくる。

「拷問するのはな、痛いモノとは限らないんだよ、お嬢ちゃん。すぐに俺達の言う事をききたくて堪^{たま}らなくなるだろうさ。スーリヤも、薬の効果を直に見る事が出来るわけだし、まさしく一石二鳥だな」

「お頭、あったまいいー」

物凄く嬉しそうに其の一が合いの手を入れる。ぞわぞわと鳥肌が立つのを覚えて、リーナは無我夢中で大声を上げた。

「冗談じゃないわよ！ なんで私がこんな目に遭わなきゃならないわけ!？」

「嫌なら、宝石のありかを白状する事だな」

「だーかーらー、知らないって言ってるでしょ、この禿オヤジ！」

その言葉に、目を丸くして頭を押さえる巻き髭氏。どうやら痛いところを突かれてしまったらしい。

言っちゃった、と思いつつ、気が治まらないリーナは、勢いに任せて暴れ始めた。

「大体、お尋ね者が盗品スられて何をブチ切れているわけ!？ 自分がした事を他人にされて怒ってりゃ、全然世話無いじゃん！ 子供じゃないんだから、自分の胸に手を当てて良く考えてみたらいいのよ！」

「語るに落ちたな。やっぱりお前がスったんじゃないか！」

「おじさん達がそう言ってたんでしょ！ バッカじゃないの！」

小娘に罵倒されて、巻き髭氏の顔色がみるみる赤みを増してくる。だが、歯軋りののち大きく息をつき、彼はにやり、と卑猥な笑いを浮かべた。助平心が怒りを呑み込んだのに違いない。

「そうやってしらばっくれられるのも、これまでだ。やい、お前ら、娘っこを押さえつけろ！」

「了解！」

二人組の、これまでに無い絶妙のコンビネーションに、リーナの頭は真っ白になった。

こ、こんな事態は完全に想定外だ。どうすればいい？ どうやって……

「そ、そこのお姉さん！ 助けてー！」

「この状況では、ちょっと無理ねー」

苦笑とともにスーリヤが肩をすくめた。本当に美人は、どんなポーズをとっても美人だ……なんて見とれている場合じゃない。

「ええええ、そんなあー！」

「ごめんねえ」

リーナの膝の裏を、其の一だか其の二だかが軽く蹴った。がくっと膝が折れて、リーナはそのまま床の上に正座する形となる。

先刻までの余裕はどこへやら、リーナの背中を冷や汗が滝のように流れ落ちていく。叫び声を上げようにも、カラカラに乾いた舌は全く動こうとしてくれない。

ああ、どうしよう。媚薬、って、やっぱり、ソノ気にさせる薬なんだよね？ 究極の……って、何？ 私、こんな奴らの相手をさせられるわけ!?

「さあ、観念するんだな」

うきうきとダンスのステップを踏むかのような足取りで、巻き髭が目の前に近づいてくる。必死で歯を食いしばるリーナの口を、男の指がこじ開ける。

助けて、サン！

リーナは心の中で絶叫した。

『風雪花』と書かれた扉を開け放した途端、甘ったるい香りがサンの身体を包み込んだ。薄暗い店内、釣り灯籠が投げかける華やかな光に、お香の煙が薄っすらと渦を巻く。カイが追いついてきたのを目の端で確認してから、サンは室内へと足を踏み入れた。

「ちょっとお兄さん、一体……」

「悪い、上がらせてもらうよ」

出迎いの女を軽やかにかわし、サンは早足でまっすぐ広間の奥へと向かう。何事か、と視線を向ける女達に、にっこりと微笑みかける事だけは忘れずに、彼は奥の扉を押し開いた。

「何が近道だ」

「近道には違いないさ。ただ、ちょっと、予想外だったかなーって」

「結局回り道だったろ」

「そんなの、僕のせいじゃないぞ！」

カイが教えてくれた近道はあまりにも効率が良過ぎたために、かえって悪漢達の馬車を見失う羽目になってしまった。慌てて裏路地を戻り、偶然見つけたカイの仲間達を目撃証言を得、そうして彼らは、ようやくこの妓楼に辿り着く事が出来たのだ。

二人は押し問答をしながら狭い廊下をずんずん進んでいく。片っ端から扉を開けて中を覗き込んで、傍若無人に家捜しを続けた。食堂、厨房、風呂場、洗濯室、……リーナが囚われているのは、どうやら一階ではないらしい。

鉤の手状に曲がった廊下の突き当たりに、上の階へと向かう階段があった。吹き抜けの天井を見上げてから、サンは大きく息を吸う。

「リーナッ！ どこだ！ 返事をしろ！」

二人が二階に到達する頃には、あちらこちらの扉から店の女の子達やその客が、何事かと顔を出し始めていた。これ幸いと、サンは開いた扉から強引に中を覗きつつ、廊下を奥へと進みゆく。あちこちから湧き起こる誰何と非難の声をものともせず、彼らはリーナの姿を求めて次から次へと部屋を渡り歩いた。

「大騒ぎじゃん、兄さん」

至極楽しそうにカイがそう言うのを聞いて、サンは微かに眉をひそめた。

「誰のせいで、こんな事になったと思ってるんだ」

「そりゃあ、もちろん、あの悪党達のせいさ！」

大きく溜息をつき、サンは目の前の扉を開けた。ほとんどの扉が開いている中、唯一固く閉じられた部

屋に踏み込めば……簡素なベッドの上、四つん這いになった金髪の女に覆いかぶさる男の姿が……。

咄嗟に、サンはカイの目を塞いだ。そのまま慌てて扉を閉じる。

「おい、手を離せよ！ 前が見えないじゃんか！」

「……お前にゃ、五年は早い」

店の主人が不在なのが幸いしたのだろう。サン達の暴拳に対して女達は文句を言いこそすれ、それを止める手立てを持たなかった。彼の腰で揺れる長剣の、並々ならぬ存在感のお蔭とも言えるかもしれない。二人は誰に邪魔される事も無く、とうとう最上階である三階に足を踏み入れた。

彼らの少し後方には、事態の推移を見守る女達が階段の幅一杯に列をなしていた。そういったてんやわんやの外野には目もくれずに、サンはただひたすら搜索を続行する。これまでと同じように手近な扉から開こうとしたところで、彼はふと、その手を止めた。

微かな金切り声。……女の、悲鳴？

声の聞こえてきた方角へと、即座にサンは振り向いた。

廊下の一番奥が、その手前。そう見当をつけて足を速めるサンの耳に、今度は明瞭に女の叫び声が飛び込んできた。

リーナ、無事でいてくれ。それだけを祈りながら、サンは勢い良く一番奥の部屋の扉を押し開く！

「あんた、こんな危険なものを、よくもアタシらに売りつけようとしたね！」

「いや、これは何かの間違いだ」

「何が間違いなのさ！ もう、金輪際あんたには店の敷居は跨いで欲しくないね！ さっさと目の前から消えとくれ！」

扉を開けたサンが見たのは、一人の女が、センスの悪い口髭の男に物凄い剣幕でくっつかかっている姿だった。

青い顔でヒステリックに叫ぶ女の形相は、なかなか鬼気迫るものがあった。怒りのあまりに吊り上がった目が、くっきりと血走っている。部屋の隅へと巻き髭氏を追い詰めたところで、女はくるりと振り返り、今度は泣き出さんばかりの表情で部屋の中央へと戻ってきた。

「ああ、可哀想に。まさかこんな事になるなんて思ってなかったから……、許しておくれね」

そう言って女がひざまずいた先に倒れているのは……、茶色の三つ編みの若い女。

リーナだ。

板張りの床に無造作に投げ出された細い腕は、ピクリとも動かない。

その一瞬、サンは我を忘れそうになった。伝説の狂戦士のごとく、その場の全てを薙ぎ払いたい衝動にかられながらも、彼は辛うじておのれを制す。

「お前ら、彼女に何をした？」

やっとの事で、サンはその一言を絞り出した。地獄の底から響いてくるかのような怨嗟の籠った声に、その場の空気が完全に凍りつく。

怒りに震える手を必死で制御しながら、サンはゆっくりと腰の剣を抜いた。

漆黒の闇に、薄っすらと光がさしてくる。

完全なる静寂に、微かなざわめきが押し寄せてくる。

失われていた手足の感覚が戻り始め、心地良い浮遊感が身体を包む……。

「気が付いたか？」

懐かしいその声に、リーナは反射的に微笑み返した。少し遅れてようやく焦点が定まってきた彼女の視界に、心配そうなサンの顔が大写しになる。

「あれ？　ここは？　サン？　私、どうしてこんなところで寝てるの？」

陽光の差し込む明るい部屋は、狭いながらもとても開放的であった。大きく開かれた窓の向こうには、少しだけ色づき始めた広葉樹が、気持ち良さそうに風に梢を揺らしている。

眩い陽の光に照らされながら、リーナはベッドの上で起き上がった。洗いざらしの寝具からほのかに立ちのぼるお日様の香りが、鼻腔をくすぐる。首を巡らせば、白を基調とした壁紙と、掃除の行き届いた室内が目に入ってきた。清潔感に溢れたその部屋は、リーナにとって、とても馴染みの深い気配がした。

「憶えてないのか？」

「え？　いや、ちょっと待って。えっと……」

酷く混乱しながら、リーナは額に手をやった。記憶の中を探りつつ、もう一度ゆっくりと室内を見渡す。ベッドに起き上がる自分は、普段着のまま。窓際の小さな台には自分の鞆が載せられていた。知り合いから貰ったはぎれで作った、遠出用の丈夫で大きな鞆。

そうだ、ルドスに来てたんだ。サンに会うために。

ベッドの足元には、白のエプロンをつけた妙齢の女性が静かに立っている。彼女の佇まいと部屋の調度から、リーナはここが治療院である事をはっきりと確信した。

「今日の未明に、ここルドスのとある名家の屋敷に賊が押し入って、宝石を幾つも奪っていったらしい」

ベッド脇の椅子に腰かけたサンが、リーナの目を覗き込みながら静かに語り始めた。何の話だろうか、と、思いつつも、リーナは黙ってサンの語りに耳を傾ける。

「で、こいつが……」サンが自分の肩越しに背後を振り返った。「……たまたま財布をすり取った相手はその賊で、その財布には盗品の宝石が入っていた、と」

サンの後ろから、ひょこっと小柄な影が飛び出てくる。ばつの悪そうな笑顔を浮かべて、少年はリーナに向かってペコリと頭を下げた。

「追いかけられ、捕まりそうになったところで、こいつは、たまたま道でぶつかった相手の鞆に、盗った財布を紛れ込ませてしまった」

『ごめんよ、急いでるんだ！』

『危ないでしょ、まったく。気を付けなさいよ』

おお、と両手を打ってから、リーナはカイを指差した。

「あの時の少年！」

「ごめんよー、姉さん」

口では謝っているものの、カイは一向に悪びれる様子も無い。

サンが苦笑を浮かべながら立ち上がった。リーナの鞆の傍に行くと、一言「悪い」と断りを入れてから、やにわに鞆の中に手を突っ込む。突然の出来事に文句を言う事も忘れて、ただ口をぱくぱくと開閉するリーナの目の前に、小さな麻袋が差し出された。

「ほら、これだ」

「私の豆！」

やたら力の入ったリーナの台詞に失笑しつつも、サンは黙って小袋の紐をほどく。摘み上げた彼の指先では、目も眩むばかりの貴石が一粒、日光を受けてキラキラと輝いていた。

顎が外れそうなほどに、あぐりと口を開けて、リーナは固まってしまった。

その様子を見るなりサンが盛大にふき出した。肩を小刻みに震わせながら宝石を袋に戻す。それから彼は、空いた方の手を再び鞆の中へと差し入れ、第二の袋を取り出した。

「豆はこっち。石は重いからね、すぐに鞆の底の方に潜っていったのさ」

袋はお互い瓜二つで、ぱっと見ただけではどちらがどちらか判別出来ない。もう一度双方の中身を確認したのち、宝石の方の袋を手にも、サンが再び椅子に戻ってきた。

「それより、リーナ。どうしてこんな無茶をしたんだよ。たまたま俺が間に合ったから良かったものの……」

サンを言葉で、部屋の隅に控えていた癒やし手が静かに言葉を発した。

「あなた、自分で自分に『昏睡』をかけたでしょう？ どうやって『解呪』するつもりだったの？ 彼がここに運んでくれなかったら、大変な事になっていたわよ」

「あー……」

そこで、やっとリーナは全てを思い出した。

変な巻き髭の男、悪党面した二人組、妓楼の女将。

宝石を返せ、ってこういう事だったのか、と、得心のあまり繰り返し頷く。

「……助けに来てくれたんだ」

「ああ。偶然にこいつと出会って、もしや、と思ってさ。あの店で倒れているお前を見た時は、本当にどうしようかと思ったぞ……」

何度目か知らぬ溜息をもらして、サンが大きく肩を落とす。その横でカイが、心持ち及び腰でサンを一瞥した。

数刻前、妓楼『風雪花』。

サンの後を追ってその部屋に飛び込んだカイは、即座に激しい後悔の念に苛まれる事となった。

鎧戸を締めきった薄暗い部屋の中で、鬼火のように光るのは、ランプの灯りを映し込んだ長剣の刃。その向こう、床に横たわっているのが他でもない自分達の尋ね人と知り、冷や汗がカイの背筋を伝う。

調子に乗ってこんなところまでついてきた自分が馬鹿だった。隙を見てさっさと逃げるべきだったんだ。おのれの浅慮を呪いつつ、カイはじりじりと廊下の方へと下がり始めた。サンを刺激しないよう細心の注意を払いながら。

「……彼女に何をした？」

サンが、低い声で同じ言葉を繰り返す。凍てついた氷のようなその気配に、カイは自分の直感が正しかった事を知った。

この兄ちゃん、怒らせたなら絶対怖そうだったんだよな。

情けない悲鳴を上げて、巻き髭の男が床にしりもちをついた。がくがくと震える顎からは、意味不明な

音の羅列がもれ出てくるのみ。

部屋の反対側では、悪党其の一が、壁に張り付くようにしてサンとの距離をとりつつ絶叫した。

「し、知らねえよ！ 俺、何もしてねえぞ！」

「お、俺もだ！ あいつが、」と、今度は其の二が巻き髭男を指差して、「変な薬をこの娘に飲ませて、そしたら急にぶっ倒れてしまっ！」

ガツン、と突然響いた大きな音に、カイは心の底から震え上がった。床に剣の切っ先を突き立てたサンは、柄から手を離す事無く、倒れ伏すリーナの傍らに膝をつく。そうして、指先をそっと彼女の首筋に当てた。

「……生きてる」

その瞬間、その場にいる全員から大きな溜息がもれた。これで、あの剣が血の舞を舞う事は無くなった、と。

静寂が降りる室内に、金属同士が擦れる音が響く。一同が顔を上げれば、剣を鞘に収めたサンが、リーナを抱きかかえて立ち上がる場所だった。行く手を塞ぐ巻き髭に、刃のごとき瞳で一言。

「どけ」

「ひいいいいいっ、どきます、どきます、どきますからあつ、命だけはご勘弁をおおおっ！」

「カイ」

「は、はい！」

話しかけられたただけなのに、どうしてこんなに心臓がばくばくいうのだろうか。カイは必死で平静を装って、サンの前に立った。

「治療院はどこだ」

「あ、う、うん、案内するよ！」

急いで部屋から出ようとしたカイは、ふと大事な事を思い出し、立ち尽くす凸凹コンビの傍に転がるリーナの鞆をかつぎあげる。

「急ぐぞ」

「了解！」

本当に、この姉ちゃんが無事で良かった。でなきゃ、今頃自分はあの世行きの船の上でベソをかいているに違いない。

思い出すだけでも身の毛がよだつ。知らず背筋を震わせて、カイはもう一度サンを 穏やかに微笑むサンの顔を 盗み見た。

「聞けば、あなた、結構な使い手だっていうじゃない。もしモルドスの治療院に、自分よりも腕前の良い癒やし手がいなかったらどうするつもりだったのよ？」

「すみません……」

リーナが申し訳なさそうに下を向いて身を小さくした。癒やし手は、ふう、と大げさに息を吐くと、眉間を緩めて優しい笑みをリーナに向ける。

「ま、大事に至らなくて、本当に良かったわ。もうこんな馬鹿な事をしては駄目よ。解っていると思うけれど、しばらくはふらふらする筈だから、もう少しここでゆっくりしていけばいいわ。今はベッドも部屋も沢山空いているから」

そう言ってから、癒やし手はサンから例の小袋を受け取った。「じゃ、これは警備隊の方に届けておくわね。それと、君」

天使の微笑みを向けられて、カイは思わず頬を染めて姿勢を正した。癒やし手の右手が優雅にカイに差し伸べられ……

「君には、助祭様からお説教のプレゼントがあるからねー」

「痛たたたたたっ！」

耳たぶを引っ張られながら、カイが扉の向こうに姿を消した。廊下に反響した悲鳴が、ゆっくりと遠ざかっていく。

苦笑を浮かべつつ、サンは静かに立ち上がった。ようやく訪れた二人きりの時間である。彼は今まで座っていた椅子を脇へよけ、ベッドの縁に腰をかけた。そうして、ぽんぽん、と優しくリーナの頭を叩く。

「まったく。無茶にもほどがある」

言いたい事は山ほどあったが、それを全部彼女にぶつけるわけにはいかないだろう。そこまで考えて、サンはようやく重要な事実気が付いた。今回の騒動において、リーナは被害者の立場にあるのだ、という事に。

そういえば、彼女はさっきからずっと俯いたままだ。あのリーナが、ただ黙ったまま、しょぼくれているなんて。恐ろしい目に遭った筈の彼女に、ねぎらいや慰めの言葉をかける事無く、あろう事が彼女の非を責めてすらいた自分に気が付いて、サンはほんの刹那瞼を固く閉じた。

「怖かったろ。もう大丈夫だから」

可能な限りの優しい声でそう囁きながら、静かにリーナを胸に抱き寄せる。彼女がそのまま自分に身を預けてきた事に、彼は心底ほっとした。

「……仕方が無かったのよ……」

ぽつり、とこぼしてから、リーナが顔を上げた。

潤んだ大きな瞳がやけに艶めかしく見え、サンは小さく息を呑んだ。慌ててわずかに視線を外し、軽く咳払いをする。

「……ん。あー、どうした？ 顔が赤いけど」

「ああ、どうしよう。やっぱり？」

「やっぱり、って？」

サンの問いに、リーナがもじもじと身じろぎした。何事か言いよどんでから、彼女は再び下を向く。桜色のうなじが、サンの目を射た。

久しぶりに会うせいだろうか、なんだか今日の彼女はとても色っぽく思える。知らずサンは彼女を抱く腕に力を込めた。ついうっかり弾みそうになる声を抑えつつ、当たり障りの無い会話を続けようとする。なんとかすぐにでもここを出て、一刻も早く宿屋にしけ込めないだろうか、と、その事だけを考え続けながら。

今朝早くルドスに到着したサンは、既に待ち合わせの宿に部屋をとって、荷物もそこに置いてきているのだ。後は、リーナを連れてその部屋に直行するのみ。しまり屋の宿の親父相手に、宿泊条件の押し問答を長々と繰り広げる必要も無い。

「……あのね、やばいのよ」

会話の流れとして有り得ない単語が、突然リーナの口から飛び出てきた事で、サンの夢想は強制的に中断させられた。眉間に皺を寄せながら、リーナの顔をそうっと覗き込む。

「何が？」

「飲まされたの」

「何を？」

「なんて言ってたっけ……、究極の媚薬、とかいうやつ」

「び……!？」

絶句、そして硬直。

動きを止めて固まったサンを、濡れた瞳が切なそうに見上げてくる。

「宝石のありかを教えろ、って。知らないって言っても、全然聞いてくれなくて。あ、やだ、なんか……」

更に頬を上気させ、リーナが目を伏せた。微かに身体をうねらせる様子に、サンの喉がごくりと鳴った。

「……………で？」

「でね、白状させてやる、って言って、そのお……、薬を無理矢理飲まされて……」

リーナがそこで一旦息を継いだ。サンはといえば、固唾を呑んで、話の続きを待つばかり。

「抵抗しようにも、両手縛られてたら呪文も唱えられないでしょ？ 無理矢理、口をこじ開けられて……、仕方が無いから、素直に飲み込んだわけ」

息切れがするのか、またもリーナが大きく息を吐く。

「私が飲んだのが判って、連中は手をほどいてくれたから、とりあえず自分に『昏睡』かけて。そうやったら、薬も効きようが無いでしょ？」

……いや、違う。息切れなどではない。高まってきた気分を逃がすために、彼女は深呼吸をしているのだ。

その事に思い当たってしまったサンの口の中に、再び唾が溢れてくる。

まずい。

おのれの身体の変化を自覚して、サンの背中を冷たいものが走った。ここは、神聖なるアシアスを祀る教会の、その敷地内にある治療院なのだ。更に言えば、自分は休暇中とはいえ、帝国の要を守る選ばれし近衛兵。こんなところでこんなものをおっ勃てている場合ではない。

そんな彼の葛藤を知る由も無く、リーナがまたしても顔を上げた。そしてサンを真っ向から見つめる。……熱の籠った目で。

「店の人は、悪い人じゃなさそうだったから……そのうちに治療院に運んでいってくれるだろう、って思ったし。その頃には、薬の効果も切れているかな、って思っていたんだけど……」

確かに、それは良い考えだったかもしれない。サンがこんなに早く助けに来なければ。

ただだと冷や汗を流しながらも、どろどろとした熱い塊が身体の中で蠢き始める事を、サンは感じ取っていた。

「あ……、だめ、やっぱり、まだ……」

甘い吐息とともに、リーナが身をくねらせる。こう見えて彼女は結構スタイルが良い。柔らかい双丘が胸に押し付けられる感触に、サンの身体を衝撃が走った。

ヤっちまえよ。あの癒やし手は当分戻っては来ないだろうし、残りの癒やし手も、こちらが呼ばない限りは奥には来ないだろう。

「……まだ？」

いやいや、やはりそれはまずいだろう。もしも他人に見られてもしたら、末代までのいい語り草だ。

「やっぱり、まだ、薬が……」

「……効いているんだ？」

こくりと小さく頷くリーナのあまりのいじらしさに、サンは思わず彼女の耳元に口を寄せていた。途端に、腕の中の身体が、びくん、と跳ねる。

誰もいない部屋、そして恐らくは、当分誰も来ないであろう部屋。

サンは生唾を飲み込んで、大きく息を吐いた。

治療院の奥の部屋。そうだ、これって、俺が何度もおかずにしている設定じゃないか？ これで彼女がいつものあの白いエプロンをつけていれば、もう完璧に。

いや、しかし！ ここで踏みとどまってこそ、後の楽しみが増すというものだ！

そう必死でおのれに言い聞かせるサンの決意を、リーナは容赦無く揺り動かす。

「……………ごめん、サン……………」

「何が？」

「……お願い、少し、離れて……。耳が……………」

「耳がどうかした？」

「くすぐったい……………の」

逆効果、とはまさしくこういう事を言うのだろう。艶めかしいリーナの声に、サンの鼻息は更に荒くなった。

おのれの呼吸に合わせて腕の中で小刻みに震える肩が、^{たま}堪らない。

一年間も待ったんだ。メインディッシュはもう少しおあずけだとしても、これぐらいは許されるだろう？

言い訳じみた思いを胸に、唇が触れるか触れないかという距離で、サンは囁き続ける。

「耳、触ってないけど？」

「でも、息が……………っ、ほら、また……………」

「え？ 何だって？」

「や……………、もう、バカっ、意地悪っ、サンなんか……………っ」

溢れんばかりの雫をたたえた瞳が、まっすぐサンに向けられる。切なげに震える彼女の唇に、サンの喉がごくりと大きく上下した。掌が一気に汗ばむのを感じながら、彼は静かに問いかける。

「俺なんか？」

輝石の煌きが、リーナの頬を伝ってサンの膝に落ちた。たった一滴の熱が、サンの身体から一瞬にして自由を奪い取る。

言葉を失い、身動き一つ出来ないサンの胸元、縋るようにしてリーナがしがみついていた。

「……………だい、す、き……………」

熱い吐息が、サンの呪縛を解き放つ。彼はリーナの身体を強く引き寄せると、空いている手で彼女の顎をすくい上げ、唇を重ねた。

この、何ものにも代え難い瞬間を、一年もの間彼は渴望していたのだ。

肉体の乾きは、やろうと思えばいくらでも潤せる。例えばおのれ自身で、また例えば色町で。だが、お互いの心と心を溶かし合うこの行為だけは、彼女が相手でなければ叶わないのだ。

そっと瞼を開けば、恍惚とした表情のリーナがサンの視界を満たす。少しだけ眉間に皺を寄せて、眠るように目を閉じ、頬を紅色に染めたリーナの顔。こんな頼りなげな表情をしながら、今まさに彼女は激しく食欲に自分を求めてきているのだ。

サンの頭の奥底、一番深い部分で、ぷつん、と何かが切れた。

「ただいま」

「あ、お帰りなさい。どうでした？」

「丁度、警備隊に被害者が詰めていたから、すぐに手渡せたわ。盗まれた宝石も全部揃っていたみたい」

治療院の玄関脇、職員詰所。リーナに解呪を施した癒やし手が、話しかけてきた同僚にそう答えていた。脱いだ外套を壁にかけ、背中越しに今度は逆さに問いかける。

「で、例の彼女の様子は？」

「いえ、特に問題無いみたいですよ？ って、ちょっと前に来た怪我の子供に皆でかかりっきりだったから、一度も見に行っていないんですけど」

「まあ、彼氏がついているから、何かあったら言いにくるでしょうけど。ちょっと見て来ようかしら」

「本当に、どうしてまた、自分で自分に術なんてかけちゃったんでしょうねえ」

同僚の声に軽く肩をすくめてから、癒やし手は奥へと向かった。日の光が差し込む明るい廊下を、ゆっくりと歩いていく。

リーナのいる病室の前に立ち、ドアノブに手をかけた癒やし手は、何かの気配を感じ取って一步下がった。

ほぼ同時に、ばたん、と大きな音をたてて扉が内側から開かれる。戸を蹴破らんかの勢いで、リーナを抱えたサンが彼女の目の前に飛び出してきた。

「すみません！ 治療代は明日に、必ず！ 払いに来ますから！」

酷く切羽詰まった様子で、サンが叫ぶようにそう宣言した。彼の腕の中では、上気した頬のリーナがぼんやりと彼に身を預けている。

「え、ええ。いいけど……？」

「じゃ、そういう事で！」

癒やし手の返答を聞くや否や、サンは物凄い勢いで廊下を走り去っていく。外へ向かって。

「……………お大事にー」

呆然としながらも、癒やし手は二人の背中に向かってひらひらと手を振った。

* * *

明けて翌日、市の最終日。

買い物客でごったがえす人ごみの中を、小さな人影が悠然と歩いている。烏打ち帽を目深にかぶり、あちらこちらにさりげなく視線を巡らせて歩くのは、誰あろう、カイだ。

助祭様のお説教などどこ吹く風といった調子で、カイは鋭い視線を前方から歩いてくる中年の紳士に絡ませる。

そっと深呼吸して、いざ獲物に近づかんと歩調を速める彼の足が、唐突に止まった。

「身体のおちこちが痛いー」

聞き覚えのある声に、カイは慌てて傍らの屋台の陰に隠れた。声のした方をこっそりと覗けば、予想通りの顔が二つ、こちらに向かって歩いてくる。

「酷いよー、一体ナニをしたのよー」

「憶えてないわけ？」

「憶えていたら、訊かないよー。大体、私、治療院にいた筈なのに、なんで気が付いたら宿屋なわけ？」

「それは、まあ、色々あって」

昨日とは打って変わって、サンの表情はやたら晴れ晴れしく、そしてスッキリとしている。随分な変わりようじゃなか、とカイは思わず一人心中で呟いていた。

「ああ、もう、痛いったら……」

「そんな、無理をしたつもりは無いんだけど。おっかしいなあ」

見つからないように屋台の隙間に身を縮ませるカイの目の前を、二人は横切っていく。

「絶対変な事した。そうじゃなきゃ、なんでこんなところが筋肉痛になるのよ」

「まあまあ、お詫びに何でも好きなもの買ってあげるからさ」

その台詞に、リーナがぴょん、と跳びはねる。「本当!? ジャあね、昨日見つけたんだけど……」

そこで、彼女はしばし動きを止めて、眉根を寄せた。

「あれ? 今、お詫び、って言ったよね? やっぱり悪い事した自覚があるんだ!」

「そりゃないだろ……」

二人が完全に通り過ぎていったところで、カイはそっと物陰を脱した。人波に埋もれていく背中を見送ってから、ふう、と息をつく。

なんだか知らないけど、色々大人も大変なんだな。

大きく伸びをしてから、カイは再び鋭い瞳で人々の海へと飛び込んでいった。

文：GreenBeetle（ぐりーんびーとる）

<http://greenbeetle.xii.jp/>

ファンタジーや謎解き、恋愛など、その時々のおもひのままに書いています。タネや仕掛けのある物語が大好きです。

絵：女将（おかみ）

まだまだ未熟者ですので、どこまでできるか怪しいですが精一杯やりたいと思っています。どうぞよろしくお願いします！

正しい夏の つくりかた

ほたるはニセモノが嫌い。
見せかけばかりの宇宙暮らしの中で、
本物を求めて奮闘するのだが……
キュートなライトSF

中井かづき
illustration
あから。



夏などない。

船はすでに港を離れ、宇宙空間をのんびりと航行している。

あたしは手元のキーボードをやや乱暴に叩いて、むふふと笑った。メインディスプレイの隅に表示された室温表示が「25」からゆるゆると上昇していくのを横目に、コンソールの上に足を投げ出す。

船の全システムのうち、いまマニュアル操作しているのは、操船とは関係のない居住環境系がひとつ。操縦系はロックしてあるから、多少変なところを蹴り飛ばしても運行には影響しない。

宇宙船の操縦にオーディン・システムが用いられるようになって以来、コンソールはすっきりとまとまっている。必要な機材はすべてフラットな卓か、操縦席正面に広がるパネル状のメインディスプレイ、そうじゃなきゃあたしたちのここ……頭の中にある。や、比喻じゃなくて。

宇宙船製造技術は日進月歩で、より速く、楽に、快適に、安くて長もちするものを！ と、尽きることのないニーズに応じて、ソフト・ハード両面のバージョンアップや改造、改装が以前に比べて格段に気軽に、安価でできるようになっている。

この船は少人数での運用を目的にしたものだから、速くも強くも大きくもないけれど、まあまあそれなりに多機能だ。

あたしが、念願の「夏」を再現できるくらいには、ね。

「おい、足どける、足！」

ふいに電子音声が入った。機械っぽさがまったくなくて、聞き慣れてない人はこれが電子音声だなんて思わないだろう。そのくらい肉声に近いから、不機嫌そうな声だ、なんてこともばっちりわかる。

「どけませーん。どけたらぱんつが見えちゃうじゃないの」

「アホかッ、ぱんつが見えるような服を着るな、規定外だろうがっ！ ああッ、やめろッ、レンズが曇る！」

あたしは船内カメラのひとつ、コンソール上のそれに素足を突っ張るようにして、ペディキュアを塗っていた。

割って入った声は、この船のメインコンピュータのもの。頭の悪そうな物言いではあるけれども、単なる大容量の計算機ではなく、人工知能 A・I だ。

A・I との音声でのやりとりは、あくまでインターフェイスのひとつにすぎないんだけど、キャッシュディスペンサーみたいな電子音声や、メッセージの棒読みが味気ないってことで、最近は A・I に色々なキャラクタをインストールして、個性を持たせることができる。これは、「幼馴染み」。たまに入れ替えると、気分転換にいいんだよね。

他にも「俺様」「兄貴」「王子様」「執事」バージョンを持ってるけど、「執事」以外は相方にすこぶる受けが悪い。きっと、「執事」以外はユーザーに、というより、あたしに対して横柄な口調だからだろう。それがいいのに、まったくわかつちやいないんだから。

ちなみに、いまのをキャラクタなしで言うなら「その服装は『宇宙もしくは無重力・無重量空間における服装規定』に違反しています。直ちに着替えてください。船内カメラのレンズの曇りを除去してください」とでもなるだろうか。

発売当初、ふざけていると非難が集中した A・I のキャラクタ市場も、閉鎖環境で長時間過ごすクルーたちのストレス軽減に役立つ、っていう論文が発表されてから、俄然活気づいた。まったく、学者さまさまだ。

不機嫌だった音声に、呆れたような響きが混じった。

「あのさあ、何で居住環境系だけ、マニュアルにしてんの？ 室温三十五度って、ばかかお前？ 俺を壊す気？ それともお前を壊す気？」

「うるさいなあ。今日のコンセプトは夏！ 夏を楽しむの！」

だから勤務中の服装規定を破ってまで、パフスリーブのTシャツとミニのティアードスカート、生足に生腕といういでたちなのだ。放射線防護スーツでは、夏の雰囲気味わえないから。というか蒸れて倒れるわ。

「何か夏っぽい映像とか、ない？」

訊いてみると、データベースにアクセスした一瞬の間をおいて、すぐに答えが返ってきた。

「三百年前の海水浴場のホームビデオがライブラリにあるけど」

「かいすいよく？ ってことは、地球の話？」

何でそんなものがライブラリにあったのかはわからないが、ペディキュアを乾かす時間つぶしにと思って許可すると、メインディスプレイにでかでかと現れたのは、とんでもなく破滅的な映像だった……涼を求めて海にやってきた人、人、人の渦。

生々しいし暑苦しいし、見てるだけじゃちっとも楽しくない。

メインの被写体は三つか四つくらいの男の子。初めて海に来たのだろう、おっかなびっくり、母親らしき人と波打ち際まで歩いていく。寄せてきた波に足をすくわれてよろめき、ぼてんと尻餅をついて泣き出した。朗らかに笑う母親のもとへ、ベソをかきながらも駆け寄る男の子。

うーん、とあたしは唸った。次々に浮かぶ不満の言葉を、キャンディを舐めてごまかす。

「あたしが見るには、少々面白みに欠ける気がするんだけど」

だってこの子、生物学的には男でも、ちょっと若すぎでしょ。興味ないわよ。

「どこ見てんだよ」

「そりゃもう、地球人類と地球外人類の外見上の相違を比較してるんじゃない。わかんないかなあ？」

「わかんないね」

雑談しながら何気なくディスプレイの端に目をやったあたしは、思わず身を乗り出した。たいそうはしたくない格好だけど、慣性航行時に乗員の姿勢を注意する機能はA・Iにはないから気にしない。

もちろん、ディスプレイに近づいたところで、映像がよく見えるようになるわけじゃないんだけども。

「あのサングラスのお兄さん、いい腹筋……！」

あっと、よだれが。……ん、いや、でも、あのゴールドのぶっといネックレスはいただけないわ。男ならボディで勝負しなきゃ。

「ねえ、お年頃でお色気むんむんのお兄さんばかり登場するとか、鼻血もののビデオはないの？」

「ポルノは感心しない。この前大量にダウンロードしてたアニメーションも」

「あたしの『兄貴の花園』秘蔵コレクションにケチをつけようっての？ いい度胸ね」

A・Iの小言に応じつつ、あたしは画面に映る夏の象徴を眺めた。水平線から立ちのぼる、マシュマロのような積乱雲。人々の肌をじりじりと焦がし、砂浜に濃い陰影をつくる強い陽射し。発泡スチロールの皿に盛られた焼きそば。真っ赤な顔をして、昼間だというのにビールで乾杯してる若い人たち。

どれもこれも、はるか昔の光景だ。いま、地球の海に砂浜はないし、地球で暮らしている人もほんのわずかしかない。

海、と言われてあたしたちがまず思い浮かべるのは、砂と石しかない月の海か、この宇宙だ。月の居住区から三十八万キロ離れたところに浮かぶ水球の青みを、一番はじめに挙げる人って少ないと思うな。

それくらい、あたしたちにとっては馴染みのないものなんだ、地球の海って。あたしたちのご先祖がこの映像みたいに海で泳いでいたなんて、ちょっと信じられないもの。

映像をオフにして、A・Iに呼びかける。

「この肉の海はもういいから。写真撮って、記念写真」

「記念？」

「オペレーション・夏の記念に決まってるでしょうが。早くしてよ、汗でファンデーションが流れちゃう」

「暑いなら、室温を下げればいいのに。そんなに汗をかくのは、身体に悪いと思うけど」

またしても発せられた小言を受け流し、あたしは服と同時に衛星通信網のオークションで手に入れた、ミュールというゾーリをはいた。地球で人類が暮らしていた頃、あたしのような年頃の女性に人気があったシューズで……うぐ、何よこの非実用的な履き物はっ！

こんなちっぽけな船に、遠心重力装置なんて立派な設備はない。あたしはゾーリ、もといミュールと格闘しながら、「植木鉢」につかまって浮遊する。土に代わる、無重力空間でも植物の育成が可能な培地が開発されてから、宇宙船の中でもガーデニングは可能になった。低重力環境でも「上」に向かって蔓を伸ばすように改良された朝顔のそばで、にっこり笑ってピースサイン。天井のカメラが赤い光を瞬かせ、撮影終了を告げた。

あたしは忌々しいゾーリを即座に脱ぎ捨て、居住環境系をオートに再設定、イニシアチブをA・Iに譲る。ふごー、という間抜けなエアコンの稼動音を聞きながら、四季も風流なだけじゃない、とため息をついた。

環境汚染による森林破壊や砂漠化が、地球規模の問題になっていたのも数世代前のこと。地球は再び「水の惑星」としての姿を取り戻している。

早い話、決壊しちゃったんだ。極地の氷が。

気温が上がって氷が溶けて海面が上昇して、異常気象に次ぐ異常気象、天変地異のフルコースの末に、陸地のほとんどがドボンしてしまった。猛り狂った水の蹂躪が一段落ついた後の地球、その陸地面積の割合は、かつての二割弱だと言われている。

この一連の大災害による死者数は、莫大なものとなった。桁が把握できないほどにゼロが並んでいて、何度も数え直さなきゃならないくらいに。

人類の多くは大災害の前に、虫が追い立てられるみたいに宇宙に出ていたから、そのまま何事もなかったかのように月や火星の居住区で暮らしているんだけれどね。

皮肉なもので、人類がほとんど宇宙に出払ってしまったせいで、地球環境は落ち着いているらしい。けれど大災害は陸地だけでなく、季節の移り変わりまでも奪って行ってしまった。いまや、地球にも地球外の居住区にも、四季という概念はない。生まれ育った居住区もこの船も、温度や湿度はいつも一定に保たれている。

あたしのような宇宙生まれ、宇宙育ちの世代からしてみれば、「四季」なんて死語だ。そりゃあ、知識としては知ってるけど、「貝塚」や「はやぶさ」とかとおんなじレベル。理科や歴史のテストのためだけに覚えるような、薄っぺらい知識でしかない。

でも、四季に、季節のうつろいに憧れはある。あたしは、四季を愛でたというジャパニーズの子孫だから。あたしは八月、夏生まれなのだけど、夏がどんなものか知らないだなんて、悔しいじゃない？

そう、あたしが「夏」を求めた理由がこれだ。シミュレーションや記録映像やテキストで得られる、想像と大差ない知識。そんなニセモノはいらない。あたし自身が、自分の感覚で、本物の夏に触れてみたかったんだ。

うだるような暑さ、流れ落ちる汗、日焼けした真っ黒な肌。風鈴の音を聞きながら、冷たい畳に貼りつく

ように昼寝して、縁側に座ってスイカを食べて、ひまわりと背比べをして、短くなってゆく蚊取り線香を眺めて、煙くさくなるまで花火をして、それから……。

そんな経験を、したかったんだ。

あたしがここで再現しようとしたのもニセモノ、そんなことは百も承知だけど。

「終わった？」

キャビン側の通路から首を出したのは、あたしの相方。名をユーリという。

幼馴染みという関係にあるあたしとユーリは、なぜか常に進路が同じだった。いまもこうして、同じ船に乗っている。

彼はあたしのオペレーション・夏に爪の先ほどの興味も見せず、個室に引きこもっていたのだけど、計画も終了とみて、出てきたらしい。

「暑かったわ」

肩をすくめてみせると、彼はさもありませんというふうに鼻で笑って、有無を言わせずA・Iのキャラクター機能をオフにすると、メインディスプレイを確認した。あたしも何となく、彼にならう……現在位置、速度、進路、推進剤残量、各種レーダー。オールグリーン。

あたしはライトグレイの放射線防護スーツに着替え、写真用のメイクをきれいに落とし、再びコンソールの前に戻っていた。

足蹴にしたカメラをきれいに拭ってから、卓の側面からケーブルを引き出し、首のジャックに差し込む。一瞬の作動音の後に、脳内に移植されたコンピュータが起動、船の航行・操縦系と同期する。

この高速神経網汎用操縦システム、すなわちオーディン・システムのお陰で、あたしたちのような若造が無限の空間を航行できる。あの肉の海の時代からしてみれば、飛躍的な進歩じゃない？

今回の出航は、アステロイドベルトの外れにあるS型小惑星に設置された観測ポッドの回収と、航路のデブリ（宇宙ゴミ）拾いのためだ。かけもちするには少々ハードだけど、ぶうぶう文句を言うほどでもない。デブリはあたしたちにとって、共通の脅威だから。

ユーリはふとあたしの顔を覗き込んだ。くすんだ紫の目に見下ろされ、落ち着かない気分になる。オペレーション・夏が大成功とはいえない結果に終わっていらいらしてるのを、勘づかれたかもしれない。

「マスカラがだまになってる」

むかつ。

「それに、髪をしばる位置が左に一センチずれてる。直していい？」

いいとも悪いとも言わないうちに、彼は慎重な手つきで髪の毛の束の根元を持ち、ヘアゴムを抜き取った。後れ毛を丁寧に拾い上げて、満足のいく位置でくるくるとお団子を作る。

ユーリはものすごく頭がいいのだけど、ものすごく神経質だ。まっすぐであるべきものがまっすぐでないとか、彼ルールから逸脱しているものが許せないらしい。手直しできるものは手直しせずにはいられないんだ……こんなふうに。

あたしたちは、小さい頃はお風呂に一緒に入ったりもしたけど、いまは花も恥じらうお年頃の男女だ。こんなのを二人きりで長期間、船に閉じ込めておいて、何かあったら会社はどう責任を取ってくれるんだろう。いや、ユーリは責任を取ると嬉々として申し出るだろうけれど。

「動かないで」

ユーリはマスカラのだまに取りかかった。蜘蛛の足みたいに細長い指が近づいてきて、あたしは反射的に目を伏せる。目元をくすぐる乾いた熱が離れるまで、そうしていた。

頭の中で時報が鳴る。定時報告の合図だ。異常なしの定型文を港の管制室と、会社の航行管理部に送る。処理はすべて移植されたコンピュータを通じて行っているから、手足を動かす必要はない。メインディスプレイに送信完了の表示が出てはじめて、ユーリがそちらに視線を逸らした。

「あとどのくらい？」

あたしたちはいま、ポッドの回収に向かっている。コイントスの結果、船外作業はユーリが担当することに決まっていた。その後、方向転換してデブリを拾って（こちらはあたしが船外作業を担当する。まったく腹立たしいコイントス！）月に帰還する。

気圧順化の必要ない宇宙服が一般化されたことで、船外作業の準備はうんと楽になっている。大昔は宇宙服内の気圧を下げなければ、宇宙に出たときに宇宙服が膨らんでしまって作業ができなかったから、身体を低圧に慣らす長い時間が必要だったとか。

「二時間二十九分。一時間前になったら準備ね」

うん、と幼い返事をして、ユーリはシートに身体を預けた。長い足を組んで（あたしが足を組むと怒るくせに）ディスプレイに回収するポッドと小惑星の情報を呼び出す。

もうすっかり覚えてしまっているに違いない詳細なデータを見ながら、ユーリはどこかに意識を飛ばしている。

何を考えているのか、きれいに整った横顔はまったくの無表情。

彼の宇宙を包むものは居住区の隔壁よりはるかに薄いのに、あたしには到底届かない。そのことがほんの少しだけ、寂しいような気がする。

観測ポッドの回収、デブリ拾い、それぞれを無事に終えて、あたしたちは報告書を作っていた。

こういう場合は、実際に船外作業をした方が報告書を書くのがルールだ。ユーリの場合、トラブルがあったわけではないから、用意されたテンプレートを埋めるだけで済むけど、あたしが船外に出たデブリ拾いの場合、重量、形状、作業にかかった時間、その他細々したことを測定し、記入しなくちゃならない。デブリ拾いの船外作業が嫌なのは、この面倒くさい報告書をやっつけなきゃいけないからだ。

嫌だ嫌だと言っても、埒があかない。デブリの回収作業ももう慣れっこだから、宇宙服を脱いだついでに、デブリを積んだコンテナの重量も船外作業時間もちゃんと調べてある。

船外作業をしたあたしに代わり、オーディン・システムを立ち上げたユーリが、できあがった報告書と定時報告をまとめて送信している間に、あたしは席を立っておやつを取り出した。

一口サイズのフルーツクッキーと、アイソトニック飲料。どちらも、ビタミンやらミネラルやらがふんだんに添加されてて、まずくはないけど、噁くさい味のやつだ。まあ仕方ない。

ルーティンワークのように、クッキーをもぞもぞと噛んで、ドリンクで流し込む。不満はないけど、満足というわけでもない　航行中は、こんなのばかりだ。ううん、普段の生活だって。

ニセモノ。

見せかけだけの。

「ねえ、どうして夏にこだわるの」

ぼんやりしているとばかり思っていたユーリが絶妙の間合いで話しかけてきたので、あたしはぎょっとした。

考えていることが伝わってしまったのかと思った。ユーリとは幼馴染みだけれど、以心伝心というほどではない。断じて！

「どうしてって……夏が好きとか……」

歯切れが悪いのを、クッキーを食べるふりをしてごまかす。やはり噓くさい味がした。

「何かね、最近元気がなかったから。ほたるちゃん、毎年誕生日が近づくとそわそわするんだよ。すぐわかる」

なんですって。

シートに投げ出していた身体をしゃんと起こして、我が身を振り返る。彼に、そんな素振りを見せたっけ？ あたしは普段通りにしていたはずなのだけど。

クッキーの袋と、ドリンクのアルミパウチを芸術的な形にたたんでから、ユーリはゴミ入れにそっと入れる。これも、彼ルールだ。

「そんなに、変だった？」

あたしはゴミを適当に丸めて捨てた。ユーリは頭がいいばかりじゃなくて、妙に気が回るところがある。気配りができるという意味ではなくて、相手の感情を根拠に推論するんだ。それがまたびたり当たるから、気持ちが悪い。そんなわけで、あたしはユーリに隠し事ができない。隠しても、すぐにばれる。

「変っていうか……いつもなら、こんな本気で夏ごっこなんかしないよ」

「だって、夏がどんなのか知りたいから……」

あたしの声は、どんどんと小さくなってゆく。そういえば、何で夏なんだっけ？

夏だけじゃなくて、冬も春も秋もあたしは知らない。四季を感じるというなら、たとえば室温を下げて冬を演出してもよかったはずだ。なのに冬じゃなくて夏を選んだのは、どうして？

とどめとばかりに、ユーリの声が突き刺さった。

「ニセモノ嫌いのくせに？」

意地悪くにやっと笑う。女心をまったく理解しないやつなのだ、昔から。そういうこともあるんだ、なんて譲歩は、彼には通用しない。

あたしは、ニセモノが嫌いだ。

そもそもあたしがニセモノという言葉に敏感になったのは、忘れもしない、十二歳のとき。その日は家族参加の課外授業だった。

あたしは五歳の誕生日に父親を亡くしていたので、母さんと、伯父さん……父さんのお兄さんが参加してくれた。伯父さんはそれまでもあたしたちの家庭を何かと気にかけてくれていて、顔もおぼろげな父さんよりずっと現実味のある存在でもあったから、伯父さんが課外授業に来てくれることに対しては、何とも思っちゃいなかった。

それで……まあ、どこにでもいるんだよね、調子に乗った考えなしのやつって。

お調子者でクラスいち乱暴なそいつは、覚えてたの薄っぺらな言葉であたしを、母さんを、伯父さんを、それから父さんまでをも侮辱した。

「フギの子！」

もう、そのときのクラスの空気ったらない。

まずは大人たちの表情がマネキンみたく強張って、その緊張は子どもたちにも伝染した。穏やかな雰囲気だったクラス中が、あっという間にぎこちなく凍りつく。手を伸ばせば触れるんじゃないかってくらい、こちこちに冷えて固まったあの気まずさを、あたしはいまでもはっきり覚えている。

時間が止まったみたいな静けさを打ち破ったのがあたしだった。あたしはそいつを、ごく控えめに言っただけにし、ぼこぼこになったそいつばかりか、あたしまでもが病院に連れて行かれるはめになった。

腫れ物もしくは危険物扱いの数週間が過ぎ、学校に戻ってみると、クラスでいちばんの乱暴者はあたし

ということになっていた。何のことはない、こんな末端までこの世は実力社会だったということだ。

その一件が、微妙なお年頃だったあたしの心理にどんな影響を与えたのか、詳しいことは聞いていない。どうだっていい。その後はきちんと人並みに感情を制御することができるようになって、オーディン・システムの移植手術もできたし、宇宙船操縦免許も取れた。あたしにひどいことを言ったあの男の子は、実はあたしのことが好きだったんじゃないか、なんて、思い返す余裕もできた。

変わってしまったのは、むしろユーリだ。

病院に運ばれて心理テスト漬けになっていたあたしに、好物のシュークリームを差し入れてくれて、そこまではいい。麗しき友情、というやつ。その後がどうにもいけない。

ユーリは、箱越しにも感じられるバニラの香りにそわそわしてるあたしの手を取って、「結婚しよう」とのたまったのだ。

大人しくて控えめで、可憐な、という形容がはまる美少年だったユーリが、だ！

あたしはユーリよりもシュークリームを愛していたから、シュークリームに同じことを言われたら、間髪いれずにイエスと答えていただろう。けれど、言ったのはユーリだった。おまけにあたしたちは十二歳で、何一つ公的な権利を持たない、ちっぽけな子どもだった。

ノーと答えたあたしを、誰が責められるだろうか？

彼はしたたかだった。へこたれるということを知らなかった。諦めるとか懲りるとかも知らなかったし、習得するつもりもないようだった。むしろ打たれて鍛えられているふしもある。

その後もユーリはことあるごとにあたしに愛を囁き、婚姻届をふりかざし、結婚しようと繰り返している。プロポーズというものは一生のうちでごくまれにしか起こらないからこそ、価値のあるイベントなのだとはあたしは思っているのだが、ユーリはそうではないらしい。彼にとってプロポーズは日常茶飯事、宇宙港へのドッキングより回数をこなしている。

「昔さ、『愛は地球を救う』って言った人がいたんだって」

彼は突然、話し始めた。たぶん彼の頭の中では一連の話なのだろうけれど、あたしには理解できない何度かの飛躍を経ているから、がらりと話題が変わったように感じられる。もう慣れっこだ。

「僕はそういうの、思い上がりだと思うんだよね。愛って言えば、何でもできると思ってる。地球を救えるくらいの愛なんて、存在すると思う？」

と、偉そうな口調なのは思い上がりではないのだろうか。言い負けるのは確実なので、黙っておく。

「でもね、愛することに力があるのは本当だと思うんだ。心の底から誰かを愛するその思いが、もしかすると巡り巡って地球を救ったかもしれない。もちろん、地球人がみんな本当に地球を愛していたなら、地球環境は守られてたと思う」

つまり、と彼は続けた。

「僕がほたるちゃんを愛することで、ほたるちゃんは救われる」

「あたしはそういうの、思い上がりだと思うけど」

我慢できなくなって口にすると、ユーリはおばさんくさい仕草で右手をぱたぱた動かした。

「ほたるちゃん、だからね、僕とほたるちゃんの間で愛を育むわけ。なせばなるって言うだろ。やればできるとか」

「意味が違う」

あたしの言うことなんか、聞いちゃいない。ユーリはうっとりと続けた。だから嫌なんだよね、頭のいい人って、自分の考えに浸っちゃうから。

「僕とほたるちゃんだけじゃ、ちゃんと証明はできないけど、ほたるちゃんが赤ちゃんを産めば、ほたるちゃんがニセモノじゃないって、ちゃんと立つ場所があるって証明になるだろ。僕の愛はほたるちゃんを救うって、実証できる」

「ちょ、ちょっと待って。話しながら飛躍しないでくれる？ あたしがニセモノじゃないって、どういうことよ」

意味のわからないことを熱っぽく語るユーリを、慌てて止める。自分がとんでもなく鈍いのではと不安になった。もしかして、わかってないのはあたしだけ？

「ほたるちゃんはね、あのとき自分のルーツを否定されて、不安になったんだ。自分が何なのか、わかんなくなってるんだよ」

目の前でクラッカーが破裂したような気がした。ぱぁん。

そもそも、あたしがニセモノって何よ？ アンドロイド？ クローン？ ばかげてるわ。

あたしはあたし、それ以外の何でもなくて、そのことはあたし自身がいちばんよく知ってる。ユーリにどうこう言われる筋合いはない。

「そんなの、考えたこともない」

あたしはきっぱりと答えただけ、それを上回る断固とした声音で、ユーリは言っただけ。

「僕の考えでは、そうなる。ほたるちゃんはずっと自分が何なのかわかんなくなっただけで、自信がなくて、それが怖いんだ。だからニセモノを嫌って、本物を好むんだよ。自分があやふやなニセモノじゃなくて、ちゃんとした本物だって思いたいんだ」

「ちがうわ……」

あたしが本物かニセモノかって言うなら、本物に決まってる。記憶に自信もある。曖昧なのは、父さんの顔だけだ。それだってアルバムを見ればいい、小さい頃の写真はちゃんと残してあるんだから。

「おじさんが亡くなって、足元が揺らいじゃったんだ。夏にこだわるのも、関係あるんじゃないかな。おじさんが亡くなったの、ほたるちゃんの誕生日だったから」

医者だって断言はしなかったっていうのに、大した自信だ。思い上がりだ。

そう思いつつもあたしは、まったく最低なことに、ひどく動揺していた。その証拠に、ユーリの目が見られない。

父さんが亡くなったことと、あたしのニセモノ嫌いに関連なんてないはずだ。なのにユーリは違うと言う。あたしのニセモノ嫌いの原因は自己不信で、それを遡れば父さんの死に行き着くのだと。……本当に、そうなんだろうか。

ユーリはいつも、あたしの心情を手品みたいに言い当てる。外れたことなんてない。だから逆に、彼の言うことこそ本当なのではないか、なんて思ってしまうんだ。

おまけに、この問題を解決するにはユーリと家庭を築けばいいんだっていう、策略以外の何でもない彼の言い分にまで、それも一理ある、なんて納得してしまったんだから重症だ。

そんなわけないじゃないのって、笑い飛ばせたらどんなによかっただろう。

でも、ユーリの言うことを受け流せなかった時点で、認めたのと同じだった。

「僕がほたるちゃんを好きになっても、解決しないってわかってるでしょ？ ほたるちゃんが、僕を好きにならないとだめなんだよ」

「人を好きになったことくらい、あるわよ」

「観測されない事実は存在したとは言えない」

あっ、何か小難しいこと言ってる。舌戦で勝てるはずがない。ずうっと小さな頃から、そうだった。

「……何で、ユーリじゃなきゃだめなの」

辛うじて言い返すと、彼はフワフワした最高の笑みを浮かべた。天使の笑み、というやつを。

「何でほたるちゃんを他の男に渡さなきゃだめなの？」

「……っ」

いやいやいや。ちょっとぐらっときたじゃないか。ちょっとだけ。もうほんと、ちょっとだけだから。

ユーリはあたしの理性をなぎ倒す笑みを浮かべたまま、プリンタが吐き出した厚手の光沢紙をあたしに寄越した。……これって、オペレーション・夏の記念写真じゃないの。

いや。少しだけ、違う。

あたしが写真を撮ったときには、明らかに存在しなかったものが写ってる。デブリ拾いに出ている間に、ユーリがオーディン・システムを使って加工したんだろう。

「ばかじゃないの？」

あたしはユーリに言った。たぶん、顔は赤かったと思う。室温はとうに戻っていたのにも関わらず。

「愛ゆえに、だよ」

晴れやかな笑みは、あたしの中のモヤモヤしたものをすかっと吹き飛ばしていった。

パフスリーブのTシャツに、紺色のティアードスカート。ちゃらちゃらしたシルバーのミュールをはいて、にっこり笑うあたし。

その隣、朝顔の「植木鉢」を抱えるようにして。

ハイビスカス柄のど派手なシャツと、膝丈のワークパンツ。安っぽいサンダルをひっかけて、くすぐったそうに目を細めるユーリ。

なんてすてきな、愛すべきニセモノたち。

文：中井かづき（なかい・かづき）

<http://panorama-2.lix.jp/>

異世界ファンタジーを中心に、ほのぼのからシリアスまで、気の向くままに書いています。明るめの作品が多いです。

絵：あから

<http://www16.ocn.ne.jp/~ukatsu/gauss/index.html>

初めまして。あからと申します。

絵も全く最近は描いていないのですが、この企画をきっかけにまた描きたいなぁと思って参加させていただきました。

どうぞよろしくお願い致します！

さよならいぬの声

河田直樹

illustration

村崎右近



死んじゃだめよリリ!!

愛犬の死を受け入れられずにいた女性が体験した、
それは不思議な出来事。
心にしみる現代ファンタジー

「何で!! 死んじゃだめよりり!!」

..... また、あの日の夢を見た。

あの日、私は愛犬のりりと、朝の日課で散歩をしていたのだ。

だけどりりの体調が悪そうで、私は早めに家へ帰ろうといつもとは違う道を歩いた。

それがいけなかった。

走って交差点を渡った時、横からものすごい勢いでトラックが向かって来た。

あ、と思った時には、すでにトラックは目の前だった。

ぶつかる瞬間、りりの声がした。そして衝撃。次に思考を取り戻した時には、私は地面に倒れていた。ぼやけた頭のまま、何で私、生きているんだろうと思って、ふと辺りを見ると 二十メートルほど先の道路にりりが倒れていた。

りりはぴくりとも動かない。

そうだ。トラックとぶつかる瞬間。りりが体当たりをして来て、私は突き飛ばされたんだ。だから、私は生きている。

でも、あそこにいるりりは。

一目見てわかる。

りりは、死んでいた。

道路には赤い血が線になって続いている。錆びた、鉄の臭いがする。

さっきまで一緒に。一緒に散歩をしていたりりが死んでいる。

私は立ち上がって、よろよろとした足取りでりりの許へ歩いた。動かないりりは、苦しそうだけど何かをやり遂げたような、そんな表情だった。私は膝をついて、その場でまだ温かみが残ったりりの白い今は赤い 身体に顔をうずめて、泣くことしかできなかった。

夢がだんだんと薄れて、私は目を開ける。

「朝.....」

カーテンの間隙から光が洩れている。顔に当たって眩しい。

パジャマの袖で目をこすると濡れていた。まただ。また夢を見て泣いていたみたいだ。

頬のほうまで涙がつたっていたので、それも拭って、私は布団から起きあがる。

ちらっと横を見ると、そこには仏壇があった。

毎朝、毎晩、毎日目にする仏壇。そこにはりりと、りりの首輪が、置かれている。

「りり.....」

あの日からたったの一度も線香をあげていない。ううん、あげたくないだけ。ただの私のわがままだ。

「まだ、さよならしたくないよ.....」

未練がましくしているからなのか、毎日のように事故の夢を見る。

悪夢だ。

赤く染まったりりの姿を見るのも、血の臭いも、全部嫌だ。あれ以来、交差点に近づくことにさえ抵抗を覚えるようになった。近づくと、りりの死をはっきりと告げられているようで.....つらい。

時計を見ると、六時ちょうどだった。りりと散歩に行く時間なのに。こんな時間に起きても、今は何もすることがない。

あの日の夢を見て泣いて、起きてしまう時間に滅入って、仕事に行くのにどうしても通ってしまう交差

点がつらくて。こんなことならいっそ、外に出ないほうがいい。つらいから、もう外には出たくない。

「今日は休みだし、まだ寝よう……」

現実から目を逸らすように、私は再びまどろみの中に沈んだ。

目を覚ますと、私は床に寝転がっていた。

「……？」

ここは……寝室の床だ。

私、ベッドに寝ていたはずなのに、何で床に寝ているんだろう。もしかしてベッドから落ちたのか。いや、そんなことは今まで一回もなかった。そんなばかなと思い、立ち上がる、と違和感があった。

視界が低い。

目線の高さがベッドの高さとほとんど変わらないくらいだった。まるで世界が違って見える。明らかな違和感。いったい何が自分に起きたのか、全くわからない。周りを見回すけど、やはりここは私の家の寝室だ。いつも使うベッドはもちろん、今は見上げる形になっているけど、見慣れた仏壇だってある。

しばらくぼーっとして、何気なく、鏡を見た。

人がおさまるほどの縦に長い鏡　に何か映っていることに私は気がついた。

犬が映っていた。

「あれ……？　これ、リリ？」

それはどこをどう見ても、リリだった。

すらっとしてるけどたくましい大きな真っ白い身体。

ピンクのポイントが入った赤い首輪　はなぜか色が落ちてモノクロになっている。

そして鈴。くりくりした瞳がとてもかわいらしい、私自慢の愛犬。

夢？

そう思うが、あれ以来見る夢で、事故の日以外のものはなかった。それに、これは夢にしてはリアルだ。ちゃんと自分で自分の身体を動かせる。ほら、現にこうやって

カツ

鏡に映るリリに触れようとして、指先が当たった。反射的に手を引いて

「　へ？」

手が、どう見ても犬のそれだった。

なんだ。

なんだなんだ？

考えを巡らせるが、どうしてもわからない。

さっきからどうもおかしい。目線はやけに低いし、手は何でか白い毛でふさふさで、目の前の鏡にはリリが映ってるし。

映ってるし

姿が紛れもなく犬だった。ためしに身体を動かすと、鏡のリリは私と同じ動きをする。改めて手を見ると、肉球的なものの存在が確認できる。お尻らへんに、謎の感覚がある。

尻尾……。

ああ。

「私　リリになってる!？」

身体も犬臭かった。

そうか……私は犬か。

成す術もなく放心していると、突然後ろでガチャ、とドアが開く音がして、はっと振り返る。

「リリー、散歩行くよー」

これは夢なのだろうか？ もし夢じゃないならきっとここは天国だ。もしくは私の知らないどこか別の世界なんだ。

だって、そこに立っていたのは、私だったから。

もし夢なら、これは悪夢に入ると思う。

私は今、私に引っ張られて、散歩をさせられていた。

なんでこんなことに……は、恥ずかしい……。

私は犬で、ぺたぺたと地面を四つん這いで歩いているのだ。

首には当然のように首輪がつけられていて、歩く度にチリン、と鈴が小気味よい音を鳴らしてくれる。何度か首をグイッとやられてオエッとくる。

私は幾度もわんわんと抵抗の声をあげたが、人間の私はそんなどこ吹く風で、とろいのかにぶいのか「おーよしよし」と犬バカの様相を呈していた。

必死の声はまるで届かなかった。

毎朝日課の散歩は家から遊歩道、遊歩道から公園、公園から商店街、そして家という道のりだ。遊歩道を歩いていると、両脇にある桜の木は小さな薄桃色の芽を出している。春前だから普通ならちょっと肌寒い空気なんだけど、犬の身体だからなのか、ちょうどいい温かさだ。散歩は続く。

うわっ、近所のおばさんだ。こんな姿、なんて説明すればいいんだろう!?

わっ、おばさんが近づいて来た！ あ、頭を撫でられて……き、気づいてない？

げ、今度は悪ガキが！ おいこら石を投げるな！

おお、私が悪ガキに怒ってる。うん、さすが私。よい飼い主だ。

「リリちゃん今日は元気ないでちゅねー。どうしたでちゅかー？」

前言撤回。全然よくない！

よりもよって猫撫で声。普段はしないだろ、は、恥ずかしい……。

自覚は多少あったけど、いざこう自分自身の親バカもとい犬バカっぷりをまざまざと見せられると、恥ずかしいと言うか、泣けてくると言うか、精神的にきつすぎる。

夢なら早く覚めて……。

「むー、今日はリリちゃん体調悪いみたいだし、散歩早めに終わろうか。あっちに行こうね」

覚めないまま。

そうして普段の散歩コースから外れる。

時間がない時は、遊歩道から出て商店街のほうへ曲がる。商店街を真っ直ぐに行き、交差点を渡って、短く町内を一周できるお手軽な順路。

そして、少し歩いて、私はあることに気づく。

あっちに行こう？

あっちって、どっち？

この先。私たちが向かっている方向には、あの交差点がある。

え……ちょっと待ってよ。

とたんに強い既視感。頭に鈍い痛みが走り、それがどんどん強くなっていく。

この道順は、この交差点へのルートは、リリが死んだ日と同じものだ。

これ、事故の日と同じだ！

そうだ。このやり取りを私は知っている。何で今の今まで気づけなかったのか！

そう考えている間にも、刻一刻と交差点に近づいて行く。ほら、もう交差点が見えている。今は信号は赤。そして私たちが渡る頃にちょうど青になる。横からトラックが来て、轢かれる。

意識があのか交差点を激しく拒む。なのに、身体の動きが、歩みが、止まらない。首を引かれて一步一步、確実にあの場所に近づいて行く。

だめ、あそこは行っちゃだめ！ 私はもう二度と行きたくない！ だから、だから止まって！ 行きたくない行きたくない行きたくない!!

こんな必死に叫んでいるのに、声は一言も出てこない。私に届かない。反対の信号はもう点滅し始めている。

「リリ、早く帰って、朝ごはん食べようね。そしたらリリも元気になるよねー」

もう交差点はすぐそこだった。身体が言うことを聞かない。私の意識は身体に抵抗を続けるけど、言うことを聞いてくれない。

信号が青に変わった。

人間の私が走る。私も引っ張られて駆ける。私たちは交差点を一緒に渡る。横からトラックが来て

その時、身体が急に軽くなった気がした。

すべての思考がひとつに収束されて、身体が爆発するかのよう動く。

「ダメ　　ッ！！」

私は叫び声をあげながら、人間の私に体当たりをした。

次の瞬間、強い衝撃が意識を吹き飛ばした。

「何で!! 死んじゃだめよりり!!」

気がつくと、目の前で私が泣いていた。足許にはリリがいて、道路には赤い血が線になって続いている。錆びた、鉄の臭いがする。

私自身の意識は幽体離脱と言うのか、リリの身体から少し浮いているところにあった。

周りには何人か人が集まってきているのに、そんなことには意も介さないで、私はぐちゃぐちゃな顔をして泣いていた。

あの時の私が、今ここにいた。

もうなんで、なんでこんな顔して……本当に、もう、バカなんだから……。

「　ユウちゃん」

そんなことを考えていると、ふいに、私の名前を呼ぶ小さな声が後ろから聞こえた。

意識だけで振り向くと、そこには私の愛犬の　白くてすらりとした身体に、赤い首輪に鈴　リリがいた。

「リリ……」

「今日でもう四十九日だから、ユウちゃんとは、もう、さよならだね。明日から僕の夢も見なくなるし、自分を責めるのも、全部終わりだよ……」

幼い男の子のような声だった。リリの言葉が、不思議と胸に響いてくる。身体に浸透して心地いい。

「僕は、ユウちゃんを助けられて、すごくうれしいよ。だから、明日からも頑張って、僕の分もちゃんと生きてね……」

私は何を言えばいいのか迷った。

言いたいことはたくさんあるはずなのに、いろんなことが頭を駆け巡って、ぐるぐるして整理ができない。

でも、ただ、浮かんだ気持ちがあった。

私は、私は今までリリに何をしてあげられていたのか、これからは何ができるのだろうか？

「じゃあ、またね」

リリが私に背を向ける。

行ってしまおう。もう、さよならをしなきゃいけない。何か、何か言うことは

「リリ！」

気づいたら叫んでた。リリが振り向く。私の口から、自然と言葉がこぼれる。

「毎日、毎日お線香あげるから！ あとリリの分もちゃんと生きて、それから、それから、リリのこと絶対忘れない！ だから、助けてくれてありがとう……じゃあ、じゃあ……」

それ以上の言葉は口から出なかった。

そしてリリは、ふっと、煙のように消えた。

最後消える時の表情は、笑っているように見えた。

「!! ここは……」

はっと起き上がって辺りを見回すと、私は寝室のベッドの上にあった。

少し落ち着くと、目からたくさんの涙が頬にこぼれているのに気づく。起きあがったせいで布団にも落ちてしまっていた。私はパジャマの袖で顔を何度も拭う。そして拭い落とすと、目はもうすっかり乾いていて、涙は流れてこなかった。

「夢、だったの……？」

あれは本当に夢だったのだろうか。

そんなことを思いつつ、私はベッドから立ち上がろうとする。

チリン。

その時足に何かが触れた。

「あ……これ、リリの首輪……」

ピンクのポイントが入った、赤い首輪。ちゃんと仏壇に置いておいたはずなのに、どうしてベッドに……。

私は立ちあがって、仏壇にかけよった。

そこには白い箱があった。その中にはリリの遺骨が入っている。

箱の横に首輪をそっとそなえる。ロウソクを用意して火を点け、線香を一本取り出して火を灯した。ゆらゆらと、細い煙があがった。

それから、長い長いお祈りをした。

「うん……元気出た。もう、あの夢を見ても私泣かない。内にこもったりしないで、目を逸らさないで、ちゃんと前を向いて行くよ。じゃあね。さよなら、リリ」

そして私は、リリにさよならをした。

了

文：河田直樹（かわだ・なおき）

<http://x95.peps.jp/02050110/>

愛知県在住のラノベ書きです。「救いのある物語作り」をモットーに創作をしています。

@misty7ginkgo

絵：村崎右近（むらさき・うこん）（イラスト特別提供）

犬派なんです。



旅人が密林の大河で見たものは、

運命の奔流に抗おうとする命の鮮烈な輝きだった

名作異世界ファンタジー

河を渡る

月下世界紀行

椎堂かおる

illustration: 塩

船を待っていた。

湿って熱い空気が風もなく人々を包み、うだるような真昼の時間が、ねっとりと言うように過ぎていく。

船着き場は、細長い木の葉で葺かれた屋根があるだけの、掘っ立て小屋のような建物だ。人々はその地べたに直に座りこみ、思い思いの方法で時間をつぶしていた。

私には行く宛^{あて}がなかったが、とにかくこの河を渡ってしまいたかった。

一見、海かと思うほどの、雄大な大河だ。泥のような色をした水がうねり、水量豊かに流れ去っていく。

河岸近くには、丸い形の大きな浮き草が繁茂^{かかん}していて、その上を歩けば、水の上に立っても沈まないのではないかと思えるような、鮮やかな緑の絨毯となっている。

浮き草は、鮮やかなピンク色の大きな蕾を、いくつもつけていた。

あれが咲く時には、ぼん、と弾けるような音がしそうだ。

私はそんな妄想をして、河岸の柵にもたれながら、わずかな荷物を抱えていた。

もう朝からずっと、ここで待たされている。地元の者らしい他の客たちが、文句を言う気配もないのを見ると、この船着き場に船がなかなか来ないのは、どうやらいつものことらしい。

とにかく暑い。蒸籠^{せいろう}の中で蒸されるように、暑い。汗にまみれた喉嚨が、垢じみて痒かった。誰の目もなければ、今すぐ裸になって、目の前の河に飛び込んで泳ぎたいくらいだ。たとえ泥のような河でも、いくらか涼しくなるだろう。

私がそんな軽口を言うと、私に世間話をしかけてきた地元の老人は、楽しげに私を止めた。

「それは止したほうがいい、旅の人。この河には、人食い魚がおるから」

なんなら試しに飛び込んでみたらどうかという、悪戯好きな悪童の表情が、白髭を蓄えた老人の、穏やかな赤銅色の顔に浮かんでいる。

「人食い魚？ それはいったい、どんな魚なんです？」

興味をそそられて、私は訊ねた。この際、どんな法螺話でも、退屈しのぎに有り難い。

「なに、どうということもない、普通の魚だよ。手のひらぐらいの大きさと、群れでやってくる。やつらは何でも食うだけだ。人も魚も獣も、分け隔て無くな」

「それは怖いですね」

調子を合わせて、私は応えた。すると老人はくしゃくしゃと顔をしかめた。

「いやいや、この河岸で本当に怖いのは人食い魚などではない。船に乗ってやってくる人買いだ」

首を振り、舌打ちをしながら、老人は語った。

「貧しさのあまり、娘を街に売って糊口^{ここう}を凌ぐ連中がおる。ほら、見ろ、そこにもおる」

老人が指さす先を見ると、船着き場のすみに、ひとりでじっと座っている若い娘がいた。

すらりと伸びた美しい脚をしており、細かく波打った長い黒髪を、華奢な体にまとうように伸ばしている。赤銅色の肌をした顔には、硬い表情が浮かんでいたが、河を見つめる彼女の黒い瞳は、はっとするほどの強い視線を放っていた。

綺麗な娘だった。

荷物に腰掛けて、河を見つめる横顔をこちらに向けている彼女に、私はしばし見とれた。

彼女は首からさげた、麻ひものようなものを、しきりに指でなぶり、そこに吊してあるらしい何かを、まさぐっている。首飾りのようなものに、私には見えたが、それは美しい彼女の身を飾るには、あまりにもお粗末だった。

彼女のためになら、高価な装身具や衣装を、いくらでも買い与える男がいるだろう。河岸の泥に咲いた、鮮やかな花のように、彼女はこの船着き場の埃っぽい空気の中でも、際だって美しい、異質な存在だった。

それは周囲で待つ者が、彼女を避ける様子でいるせいかもしれなかった。こんなに美しい娘なのに、誰も彼女に微笑みかけもせず、物欲しげに眺める者さえいない。忌まわしい不運に関わらぬようにと、皆が皆、知らん顔を決め込んでいるらしかった。

その姿に、じっと目を向けているのは、通りすがりのよそ者である私ひとりだ。

娘は私の視線に気づく様子はなく、決然と押し黙り、河を見つめるだけだった。

やがて不意に彼女は立ちあがり、首からさげていたものを、力任せに引きちぎった。そして手の中にある何かをじっと見つめ、とうとう意を決したように、河へ向かって投げ捨ててしまった。

彼女が何を投げたのか、私はとっさの興味で河へと視線をうつした。長い弓のような軌跡を描き、それは丸い浮き草の尽きた先の、河の流れの中へと落ちていった。

河の上流から、一艘の白い船が現れていた。

船体は三階建てになっており、船の両脇に二つ建った黒い煙突から、もうもうと白い煙を吐いている。その客船は外輪船と呼ばれる種類のもので、石炭を焚いて湯をわかし、その蒸気で水車のような巨大な輪を回して、船を推進させる仕組みになっているものだ。

汽笛を鳴らし、船はこちらへやってきていた。

船着き場で待ちくたびれていた乗客たちが、一斉に、よっこらせと重い腰をあげる。

ゆっくりと接岸した外輪船は、大人の腕ほどもある太い舳綱^{もやいづな}で、船着き場に係留された。船の柵が開くと、そこから降り立つ乗客は多くはなく、街から戻った土地の農民ふうの者がちらほらいる他には、明らかに異質な、太鼓腹で、口ひげを蓄えた、赤いシャツの男がひとりきりだった。

男は白いハンカチをとりだして、汗をふきながら、大股で船着き場へと入り込んできた。一目見て、いやな男だと思える人物だった。

旅を楽しむふうでもなく、嫌々やってきたという不愉快顔で、河岸に降り立ち、男は少しの間きよろきよろとして、船に乗り込んでいく他の乗客たちの中を、探し回る目をしていた。

太った男の目元は、だらりと緩みきっており、鈍重そうだったが、それでも群れの中から、^{ほふ}屠る一頭だけを見極めるような、鋭い目つきだった。

大汗を垂らしながら、男は立ちつくして自分を見ていた若い娘を、やっと見つけた。

私と老人は、それを眺めた。

男は酒に焼けたような大声で喋った。

「こりゃあ別嬪だなあ、畜生め。これなら街の旦那も気に入ってくださるだろうよ。お前は運がいいぞ。旦那は牧場もお持ちだし、こんな田舎の連中には思いもつかないような、学もおありになる立派なお方だ。せいぜいご奉仕して、可愛がってもらえ」

大笑して、男は腫れたような指をした手で、娘の尻を叩くように撫でた。

娘はただ、うつむきがちに、険しい顔でそれに耐えていた。

そうしていると、彼女はまるで、殉教者のようだった。これから火にあぶられるか、銃で撃たれるかするが、それでも我が身に変わりはないと、そういう決意の表情をしていた。

「それにしても汚ねえ形^{なり}だなあ。街に着いたら、綺麗な服着て、化粧もしねえと。別嬪さんに磨きをかけてやるから、楽しみにしてる。さあ、とっとうご乗船といこうや」

汗をふきふき、男は娘に背を向けた。

彼は娘の手を引くわけでも、縄をかけるわけでもなかったが、彼女が男に牽かれていくのは、誰の目にも明らかだった。

抗いもしない重い足取りで、娘はさっさと歩く男に従い、とぼとぼと乗船口へ歩いていった。

「ナナ！」

その時突然に、船着き場に走り込んできた者の声が叫んだ。

娘はそれに、驚いたふうに振り返った。

太った男もそれに倣い、私と老人も、叫んだ者のほうを見た。

そこには粗末な格好をした、しかし若くて健康そうな青年が立っていた。全力で走ってきたらしく、彼はまるで雨にでも降られたように、赤銅色の顔に、滴るほどの汗をかいていた。

「行かないでくれ、ナナニータ」

乱れた呼吸を整える間もなく、青年は、まだ乗船口にいる娘に、喘ぎ喘ぎそう呼びかけた。

それが彼女の名前のようだった。娘はどこかぼかんとして、青年を見返した。

「やっぱりお前を、忘れるのは無理だ。俺の女房になって、一緒に住んでくれ。俺が一生懸命働いて、借金も返すし、お前の家族も食わせていくから」

そう掻き口説く青年の顔は、滑稽なまでに真剣そのものだった。娘は険しい顔で、じっと彼を睨んだ。そして今はもう無くなった、あの粗末な首飾りを、彼女は探ろうとした。それがいつもの癖だったのか、そこにあるはずのものを握ろうとする指が、一瞬彼女の豊満な胸元をまさぐったが、指は何もないところを虚しく掴んだだけだった。

「何を寝ぼけたことを言ってやがるんだ、こん畜生が」

太った人買い男は、大笑して言った。

「こいつの借金を、てめえみたいな貧乏人の小倅が、返せるわけがねえ。この女の飲んだくれの親父がよう、いくらせびったか知ってるのか。娘が別嬪なのを笠に着て、ずいぶん吹っ掛けやがったよ。とっとと帰んな、若造。お前にゃあ、勿体ねえ上玉よ」

面白い冗談を聞いたという笑い方で、人買いは笑い続け、うつむいて立ちつくしている娘の腕をとった。それに引かれるまま、娘はやはり、とぼとぼ歩いた。

青年は食い入るように娘を見つめたが、彼女はただそれに背を灼かれ、項垂れて甲板にあがってゆくばかりだった。

老人は私と顔を見合わせた。

「乗ったらどうかね、旅の人。船はもうすぐ出るだろうよ」

柔和に微笑んで、老人は私に勧めた。その口調が見送るふうに聞こえたので、私は軽い驚きを覚えた。

「お爺さんは、乗らないんですか」

私の問いに、老人は頷いた。

「儂はここに、船に乗る連中を見に来ておるだけだ。気をつけていきなさい、旅の人。河には人食い魚がある。わずかでも血を流している時は、決して河に落ちるでない。やつらは血を嗅ぎつけると、あっという間にやってきて、あんたを骨だけにしちまうからな」

憎めない意地悪さでそう教え、老人は湿気た熱気の中でも、なぜか不快さのない温かく乾いた手で、私の頬をぼんぼんと優しく叩いた。それは別れの挨拶だった。皺だらけに乾いた手のひらが、自分の肌に触れた一瞬で、私は不思議に勇気づけられた。

こちらも別れを告げ、船に乗り込んだ。

乗船口の柵が閉じられ、船の煙突があげる、もうもうとした蒸気が、さらに強まった。

舳網が解かれ、出航を告げる河船乗りたちの声が、低く朗々と川面に響いた。船を推進させるための黒い鉄の外輪が、機構のうなりと水音をたてて回り始めた。

甲板から見返すと、青年はまだ船着き場の入り口で、じっと佇んで娘を見ていた。

人買いは舷側から物見高くそれを見返し、煙草に火をつけた。

娘は両手で舷側を掴み、じっと青年を見つめ返していた。

河からは泥を溶かした水の、何とはなしに薬くさいような苦い匂いが立ちのぼっていた。どこかで密林の獣が吼えていた。

船が岸を離れた。

ゆっくりと用心深く、船は岸辺の丸い浮き草を押し分けて出て行った。鮮やかなピンク色をした蕾が、はじかれて咲くのではないかと、そんな妄想が湧いた。

浮き草と思っていた大きな丸い葉たちは、長い茎で水底からつながってでもいたのか、船に押しやられても、結局もとのところへ戻っていき、またすぐ川面を埋めた。

その上を歩いて、また岸に戻れそうな密集した群生だった。

船がその濡れた緑の果てるあたりまで岸を離れる頃、私は川面の丸い葉に、何かが浮き沈みして引っかかっているのに気づいた。

娘が投げた首飾りだった。

濁った河の悪戯か、流れに揉まれて、押し戻されて来たようだった。

甲板から見下ろすと、それはただの木ぎれを削って作った不器用な品で、細長い棒のようなものに、地元の部族の祖^{トータル}霊らしきものが彫り込まれていた。その正体が何か、旅人である私に分かるはずもなかったが、なぜかその象^{かたち}は、愛を守護する魔法を持った者と思えた。

ふと見ると、娘も川面の落とし物を見つけたようだった。

彼女はさらに険しい表情を、眉を寄せた美しい顔に浮かべ、じっと睨むような目で、濁った水面に見え隠れする首飾りを見下ろしていた。

「ナナニータ」

いつの間にか河岸の水際まで来ていた青年が、船に叫んできた。娘は、はっとしてそれを見た。

「俺がやった、約束のお守りはどうしたんだよ。お前はあれを、捨てちまったのか」

叫ぶ声に訊ねられ、娘は首飾りを探る手で、自分の心臓のあたりを掴みしめた。

「落としちゃったのよ、レオニート」

想像もしていなかったような美しい絶叫で、娘が答えた。

ぎょっとして、私も人買いも、美貌の娘を見た。甲板の誰もが、ぼかんと驚いて、娘を見た。

「河に落としちゃったけど、でもそこにある。草に引っかかっているの」

川面を指して、娘は教えた。そうかと答える青年の声が、川面を渡ってきた。

「心配するな。俺が拾ってやるから」

そう言って、青年はおもむろに、河に飛び込んだ。

船着き場の老人が、面白そうにそれを目で追った。

ほとんど水しぶきをあげない軽快な抜き手で、青年は丸い草の葉を押し分けて泳ぎ、娘が指さしたあたりへと、あっという間に泳ぎ着いた。

離れてゆく船の上から、娘は両手で口を覆って、それを見ていた。

青年がこともなげに見つけて拾いあげた首飾りを、振りあげた手に握っているのを見つめ、娘は目を見開いて胸を喘がせていた。

「あったよ、ナナ」

器用に立ち泳ぎしながら、青年は叫び、まじめに教えてきた。

船上のナナニータはそれに大きく頷いただけだった。

「戻ってきてくれ、ナナニータ。俺と暮らそう。お前のためなら、ジャガーだって素手で殺してみせる。お前もここで、一緒に戦ってくれ。俺と生きよう」

再び掻き口説く若者の声は、しだいに遠ざかっていった。船は流れをつかみ、速力をあげるらしかった。

娘は微かに震えながら、押し黙っていた。

「ばかな色男があったもんだぜ」

煙草を吸いながら、人買いが笑って罵った。

それを聞き終わることもせず、娘が舷側に足をかけた。

河に飛び込もうとする彼女に、人買いが驚いて飛びついた。男に比べて華奢な体に、背後からとりついて激しく揉み合う様子は、まるで太った人買いが哀れな娘を力づくで犯そうかという有様に見えた。

それに呆然として、船上の人々はどこか青ざめ、二人を見つめている。

「やめねえか、このくそ女が。金はもうお前の親父に払ってやったぞ。いまさら逃げられると思うなよ」

怒鳴って男は娘の体を甲板に引き戻した。男がくわえていた煙草の燃えさしが、唾とともに河に落ちていった。

娘は甲板にうつぶせのまま押し倒されながら、男を振り返って、その顔に容赦なく爪をたてた。

「はなしてよ、この悪魔。誰があんたみたいな豚野郎に買われていくもんか」

娘は美しい声なのに口汚かった。

それでも娘は、少しも下品には見えなかった。この河岸の密林と同じ、天性の野性味のある美が、彼女を包んで見えた。

固唾を呑む船上の空気は、明らかに彼女を応援していた。

河岸から、この男に娘が掠われてゆくのは、これが最初じゃないだろう。船に乗るうちの幾人かは、別の娘が泣きながら河を下るのを、見た者がいるのだろう。

誰も手を出せずに立ちすくんでいるので、私は思いあまって、娘に加勢しようかと思った。

しかし娘が、乱れたスカートの裾から露わになった脚で、人買いの男の急所を激しくけっ飛ばしたのは、まさにその時だった。

ぎゃあっと悲鳴をあげて、太った男は股間を押さえ、甲板に背を丸めうずくまった。

見守る人々はそれぞれに、猛烈に痛いという顔と、してやったりという顔をしていた。

娘は男の体の下から勢いよく這い出し、そのままの素早さで、舷側に足をかけ、一瞬の迷いもなく河に身を躍らせた。

水しぶきがあがった。

さすがに彼女は河岸の娘だった。先ほどの若者が見せたのに似た、華麗な抜き手を切って、彼女は河を泳いだ。まっしぐらに、若者の待つほうを目指して。

「畜生め、なめやがって……」

汗と血を滴らせ、人買いが立ちあがった。

男の頬を引っ掻いた娘の爪は、想像以上に鋭かったらしい。

ざっくりと二筋、男の無精ひげの伸び始めた頬に、縦に引き裂かれた傷が走っていた。

その傷よりさらに血走った憎悪の目で、男は河を泳ぎ戻る娘の背を見ていた。

そしてそれを追うため、舷側に足をかけた人買い男を、皆がじっと押し黙って見つめた。

男が血を流しているのを、おそらく誰もが見ていた。

そしてこの河にいる、血を好む魚のことを、脳裏に思い描く静かな戦慄した目を、皆がしていた。

ざぶんと激しい水音をたてて、男は飛び込んだ。

誰ひとり、悲鳴もあげずにそれを眺めた。危ないから止せと教えてやる者も、誰ひとりいなかった。

私もそれを、ただぼんやり見守った。

人買いは水しぶきをあげて泳ぎ、娘を追いかけた。その距離はなかなか縮まらなかった。

娘はもうすぐ愛しい男のところに泳ぎ着きそうだった。

畜生めと人買いが叫ぶ声がした。

それは始め、娘か、その相手の男に向けられたものだった。

しかし大した間断もなく、男が悲鳴をあげるのが聞こえた。泳ぐのをやめて、畜生めと、彼はまた叫んだ。腕や脚をばたつかせ、彼は何かを振り払おうとしていた。

やがて見る間に、男を包む水面が泡立ち、小さくはね回る泥のような水面に、真っ赤な血がまじり始めた。逃れようと藻掻く男の悲鳴は、耳を突く恐ろしい絶叫に変わっていた。

泳ぎ着いた娘は、愛しいレオニートと抱き合い、振り返ってそれを見た。

船上からも、無数の目が、河に食われていく都会の男を見下ろしていた。

魚たちはすみやかに食事を終えた。船着き場の老人が言っていたとおりだった。

泡立つ水面に、どれくらいの数の魚が集まったのかは、一見ただけでは分からない。魚たちは貪欲に食べ、水面を汚した血液までも、すべて綺麗に平らげてしまった。

男の骨はたぶん、水底の泥に沈んだだろう。

そしてそれは、魚よりもっと貪欲で、ゆっくりと食う微細な生き物たちに、しばらくの饗宴を与えるだろう。

若い男女は、目の前に見た恐怖を振り払うように、お互いをそれから守るように、川面を見つめたまま、ぎゅっと固く抱き合い、それから離れて、船着き場へ戻るために、それぞれ静かに泳いでいった。

船はもう、河を下り始めており、泳ぎ戻った彼らが老人に手を引いて助けあげられ、水浸しの体で河岸に再び立ったのを、私はちらりと見ただけだった。

河岸も密林も、どんどん流れ去って見えなくなった。

下流にある対岸の都市まで、一日半の船旅とのことだった。

私はそこからさらに西へ、旅を続けるつもりだった。

だからこの場所へ再び戻る日があるかは、怪しいことだ。

だが、もしも。あてにならない風の便りにでもいい。この密林の出来事を、遠い旅の空の下に、伝え聞くことができるなら、私は訊ねてみたかった。

美しいナナニータがそれからどうなったか。一途なレオニートが彼女のために、素手でジャガーを倒したか。彼らが遠い密林で、幸せに生きられたか。

そんな旅先のおとぎ話を、私に聞かせてくれる風があればいいが。

外輪船は熱帯の川風の中、泥の河を快調に下っていった。

私はその夜、ねっとりとした熱い密林の風にふかれ、揺れるハンモックで眠った。とても静かで、時折けたたましく、獣の騒ぐ夜だった。

文：椎堂かおる（しどう・かおる）

<http://www.teardrop.to/>

執筆歴二十数年の子持ち主婦です。ファンタジーやS F 作品を主に執筆しています。心理描写が主体の地味な作風ですが、心に響く物語を目指して書いています。

絵：塩（しお）（イラスト特別提供）

<http://www.pixiv.net/member.php?id=131016>

主に水彩絵。

その男の名は「もぐら」
ひとりの少女の夢を守るために、
無敵の男が放つ弾丸が砂漠の空気を切り裂く!!
痛快SFアクション

音が
響き
わたる場所

村崎右近
illustration
女将



闇に支配された空間を進む。

一步、また一步と足を進める度に、熱い空気が首元を撫でる。

俺を待ち受けるのは不偏の闇。ありとあらゆる光の存在を認めない暗黒の空間。

俺の目は、光を感じるようにできていない。だから、俺の前に存在するのは闇。闇とは光のない状態。光がなければ何も見えない。何も映らない。この世界における原則。

だが、世界の形を知る方法ならば、光に頼らずとも他に幾らでもある。

足元に広がるのは剥き出しの地面。タイルもシートも敷かれてなどいない。

絡み付く熱気。鼻に付く臭い。いずれも不快極まりない。

ガソリン、油、火薬、焼けたゴム。それらすべての臭いが、競い合うようにして鼻腔に侵入してくる。

熱気の正体は炎。

燃えているのは車。

炎上させたのは俺。

必要な情報はそれだけだ。

車には誰も乗っていないが、無人の車に火を付けて回る趣味があるわけじゃない。爆発の直前に乗員が脱出しただけのこと。だからこそ、運転席にも助手席にも焼死体はない。勿論、後部座席にもだ。

「手間を掛けさせてくれる」

俺に銃口を向けた者が辿る末路は常に一つ。生きているのならば、見つけ出して始末しなければならない。これは見せしめなのだ。

炎上する車に背を向けて、自身の車へと足を進める。

俺の愛車、フォードG P W。通称・ジープ。屋根はなく、フロントガラスも取り払ったフルオープンカーだ。

運転席に乗り込み、キーを差し込む。それと同時に、後部の荷台に隠れていた何者かが掴み掛かってきたが、意に介さずキーを回し、エンジンを始動させた。

連続した二発の銃声が響く。

背後から俺の首に回されつつあった二本の腕は、銃声を合図に力を失い、重力に引かれて車から転落した。

車を奪いに来ることは分かっていた。なぜなら、この地域で車を失うことは、そのまま死に直結するからだ。

ここは、アメリカ合衆国アリゾナ州ソノラ砂漠。西隣のカリフォルニア州と、国境を跨いだ南隣、メキシコ合衆国ソノラ州に広がる、北アメリカ最大の砂漠だ。

砂漠と言っても、見渡す限りの風紋が広がる砂地ってわけじゃない。随所にサボテンが生え、その周りには低木植物が群生している。

サボテンの花が咲けば昆虫が飛んできて花粉を運び、サボテンの実が生ればそれを食べる動物が集まる。昆虫を食べるキツツキはサボテンに巣穴を掘り、使われなくなった穴はネズミが再利用する。ネズミを餌とする食肉類までもがサボテン周辺に集い、食物連鎖が形成される。

しかし、人間にとって厳しい環境であることに変わりはない。容赦なく照り付ける太陽は、あらゆる生命を死に追いやるのだ。

再び、二発の銃声が響く。

断末魔の呻きは、遙か遠方から飛来するヘリのローター音に掻き消された。

「ごくろうさん」

略式の敬礼でヘリの搭乗者を慰労し、直後にそのままアクセルを踏み込んで、一路、南へと車を走らせた。

俺の名はトープ。名付け親はフランス人で、モグラ、という意味があるらしい。

俺は、アメリカへの密入国の手配と、入国後に就く仕事の斡旋を生業としている。俗にコヨーテと呼ばれる密入国斡旋業者の一人だ。

ソノラ砂漠を横断する国境には、アメリカ側への不法な入国を防ぐためのフェンスが設置されている。フェンスはそれほど高くはないため、大人が数人集まれば、道具がなくても乗り越えることが可能だ。

フェンスが設置される以前は、カリフォルニアのサンディエゴや、テキサス州の南側で比較的容易に国境を越えることができていた。

フェンスが設置されてからはそうもいかず、フェンスがない砂漠や山地を越えるルートを使った密入国を試みる者が増加している。フェンスは、市街地から数マイル離れたところで途切れているのだ。

しかし、フェンスが途切れたところは砂漠のど真ん中。そのルートは危険度が高い。国境巡視員に発見されることじゃない。命を落とす危険度だ。密入国者たちは、危険を回避するために俺のような密入国斡旋業者を利用するってわけだ。

残念なことに、密入国斡旋業者には悪質な奴らが多い。俺を含めて、まともな人間など皆無だろう。尤も、密入国させようって輩にまともであることを期待する方が間違っているんじゃないかとも思ったりするわけなんだが。

手口はこうだ。

まず、手数料を取ってアメリカに密入国させ、労働力として働かせる。そこまでは本人が望んでいた通り。雇う側にしても、安い労働力が手に入るため、諸手を挙げて歓迎する。

悪質なのはこの先だ。

自らが斡旋した就業先を、不法就労者がいる、と通報する。不法就労者は逮捕されるが、雇い主は罪に問われることはない。ただ一言、知らなかった、と言うだけだ。

そして、逮捕された不法入国者の保釈金を肩代わりするなどして、生涯にわたり上前を撥ね続けるってわけだ。奴隷の出来上がりだ。

被害者が警察に訴え出ないのは、メキシコに残してきた家族を人質にされていたり、家族をネタに脅されていたりするためだ。酷いときは、警察と雇用主と業者とが結託している場合さえある。

俺はそういう他人を不幸にして食っている奴らが嫌いだ。

許せないんじゃない。

自身を正義だと勘違いしている奴らが得意気な顔をして振りかざす、許せないという言葉も嫌いだ。

だから、許せないんじゃない。

ただ、嫌いなだけだ。

畜産と鉱業、そしてコルテス海を利用した観光業。

州都エルモシージョから北へ百二十マイル。ノガレスという国境の町がある。

「おや、旦那。珍しいことで」

朝食を求めて喚く腹を黙らせるために足を踏み入れた店で、店主のトーマスよりも先に声を掛けてきた人物がいた。半端な時間のせい、俺と声の主以外には誰も客がいない。

「白々しい真似は止せ、アントニオ」

「へへ、出会ってのは、いつでも偶然の産物なんですぜ。出会えなかったかもしれねえって考えると、出会いそのものに感謝するようになる」

「何が偶然の出会いだ。俺は毎朝ここで食事をする」

アントニオはノガレスで情報屋をやっている男だ。町の外やフェンスの向こうから来た連中に関する情報を取り扱っている。非合法的な仕事をしている以上、町を訪れた者に注意を向けるのは当然のことなのだが、来訪者が客かどうかを見極めてはいるってわけじゃない。

俺たち密入国斡旋業者は、人間をフェンスの向こう側に送り届けるのが仕事。

仕事にはルールがあり、同業者間には仁義がある。

ルールは三つ。

客を盗らない。客から盗らない。人間以外は運ばない。

第一のルール『客を盗らない』

値引き合戦などという馬鹿げた事態に陥らないためのルールだ。稼ぎが過ぎれば、少ない者のところへ回す。尤も、仲介人がバランスを考えて割り振っているため、滅多にそういった事態にはならない。一つの業者に肩入れしていた場合、その業者の摘発と共に失業してしまうため、仲介人は複数の業者とバランス良く付き合う。

第二のルール『客から盗らない』

密入国という性質上、家財道具一式を抱えて行くわけにはいかない。それでも身に着けている物は、本人にとって今後の人生の支えとなる品物だ。

第三のルール『人間以外は運ばない』

言ってしまうと、麻薬だ。

メキシコ国境からアメリカ国内へと流れる麻薬は、カリフォルニアが麻薬漬けから抜け出せない要因の一つとなっている。麻薬の流入が増えれば、国境の監視がより厳しくなり、仕事にも支障を来す。

来訪者に注意を向けるのは、麻薬をこのノガレスに持ち込ませないためだ。もし持ち込んだと分かれば、しばらく好きに泳がせて、買った方の人物を叩く。否、買った方の人物も叩く。そのときは、俺のような武闘派の出番ってわけだ。

ルールを破れば、それに応じたお仕置きが待っている。だがそれは、俺の独断で実行することじゃない。

「また派手に暴れなすったらしいじゃねえですか」

「久しぶりだったからかな、加減を間違えたかもしれん」

「旦那は毎回加減をお間違えなさるようで」

アントニオは陽気に笑っている。

「なら、いつも通りだ」

トルティーヤの焼けた香りが鼻腔をくすぐり、唾液の分泌を促進させる。トルティーヤとは、すり潰したトウモロコシを小麦粉の代わりに使った生地を、薄く円形に引き延ばして焼き上げたパンだ。

「今日は旦那に仕事をお願いしたいんでさあ」

「いつから仲介を始めた？」

「いえいえ、そんなんじゃないやせん。これが最初で最後でさあ」

「急ぐのか？」

「できれば」

アントニオは声のトーンを落とした。言葉以上に急を要しているらしい。

「朝食の時間ぐらいは欲しい」

「食べ終わる頃に本人を連れてきやすよ」

仕事を引き受ける前に、必ず本人と会うことにしている。話して気に入らない相手であった場合は、どんな大金を積まれても断ってきた。俺は金に興味はない。反対に、気に入った相手には、住む場所から仕事の世話までしたことがある。

アントニオは、ごゆっくり、と言い残して店を出た。歳は六十に近いはずだが、足取りからその年齢を感じることはできない。

アントニオとは、もう四年の付き合いになる。余所者の俺を、この町に馴染ませてくれた。今の俺があるのは、^{ひとえ}偏にアントニオのおかげだ。

本来なら俺が敬語で話すべきなのだが、アントニオはそれを拒み、更には俺を旦那と呼んでへつらう。俺が情報屋としてのアントニオと付き合うようになった以上は、そういったけじめが必要不可欠らしい。

朝食にはタマーレスを注文した。鶏肉とサルサをトルティーヤに包んで蒸した、メキシコでは一般的な料理だ。

残念ながら俺はその色を感じることはできないが、目を失う前に見たタマーレスは、トウモロコシの色が映える一品だった。

目を失ったのは、今から五年ほど前のことだ。

軍人だった俺は、派遣された中東における戦闘で重傷を負った。命は取り留めたものの、両目を失うという大きな代償を払うこととなった。

現在、俺の眼孔には義眼が収められている。

それはただの義眼ではなく、盲人となってしまった俺でも世界の形を知ることが可能になるといってもない代物だ。

反響定位という言葉がある。

それについて説明をする際に、蝙蝠と言えば大抵の人間は察しが付く。

蝙蝠は、自身が発した超音波の反射によって周囲の状況を把握しているため、暗闇の中を自由に飛び回れる。それが動物の反響定位というものだ。

人間の耳で反響の違いを聞き分けることはほぼ不可能とされているが、稀にそういう特殊能力を持った人間もいる。ハリウッドでは、日々そういうヒーローたちが作り出されている。持って回ったが、普通の人間の耳では、蝙蝠のような反響定位は不可能だということだ。

とはいえ、ある程度までならば把握することは可能であるし、反響の具合で物質を判断することも可能だ。

例えば、盲人が持つ白杖は中空で軽いために音が良く響き、杖が当たった物質を判断することができる。石と土では、叩いたときに全く違う音がする。アメリカでは、白杖の使い方と共にこの反響定位のトレーニングを推奨している。

反響定位を行うためには、二つの条件がある。

一つは、一定の周波数と音量を持つ音を、断続的に発生させられること。

もう一つは、その反射音を聞き分ける耳を持っていること。これは、反響によって得た情報を頭の中で整理し、メンタルマップとして組み立てる能力と言い換えてもいい。

一つ目の条件に当てはまるのは、白杖で地面を叩く音などだ。

二つ目の条件であるメンタルマップの作成については、個人の能力に依存する部分が大きく、不安定になってしまうことが課題となっている。

俺もこの反響定位を利用して周囲の状況を把握しているのだが、厳密には違っていて、少しばかり特殊な方法で反響定位を行っている。現時点でその方法が可能なのは俺だけだ。間違えないで欲しいのは、俺自身が映画の主人公たちのような特殊能力を有しているわけじゃないってことだ。

「ほらよ」

トーマスは、俺に向かってタマーレスを突き出した。

「早いな」

俺は驚嘆の声を上げた。なぜなら、注文してから十五分以上待たされるのが、この店の常識だったからだ。

「時間ぴったりだろ？ トーニョ（アントニオの愛称）がこの時間にこれを出せて」

「ぴったりと言われてもな」

だが言われてみれば、俺が注文する前からトルティーヤの焼ける匂いがしていた。

注文する品だけではなく、店に来る時間までもが見通されていたわけだ。情報屋ってのは恐ろしいもんだ。

「ビールは？」

トーマスの声は、いつも通りにやる気がない。

「これから仕事なんだ、コーラにしてくれ」

「はいよ」

ずれていたサングラスを正し、カウンターの奥から瓶コーラを開栓する音が聞こえてくる前に、大口を開けて極太のタマーレスにかじりついた。

アントニオは、俺がタマーレスの最後の一口を放り込んだ瞬間に戻ってきた。

足音は二人分。一つはアントニオの足音。もう一つの足音は、その大きさと間隔、一步毎の音量比較から、体重は軽く身長が低い人物であると分かる。

瓶に残っていたコーラを一気に咽喉へと流し込んでから、二人を迎える。

「この人がそうなの？」

耳に飛び込んできたのは、幼い少女の声だった。声質の幼さに比べると、口調には理知的な雰囲気がある。年齢は十歳前後といったところか。

メキシコの公用語であるスペイン語を話していることから、恐らくはメキシコ人。

そうそう、俺の母国語は英語だが、三年も過ごしていれば、日常会話程度ならなんとでもなる。

「ああ、そうだよ」

いつもは野卑なアントニオの口調が、不似合いな優しい口調に変わっていて、気持ちが悪い。

「そういう趣味があったのか」

「止してくださいよ旦那、子供の前ですぜ」

「悪かった。品のない冗談だった」

「何も言わず、何も聞かず、旦那のところで預かっていて欲しいんでさあ」

密入国斡旋業者の仕事だとばかり思っていたが、どうやら違うらしい。

「俺は子守りじゃない」

「旦那にしかできないことなんでやすよ」

立ったままの二人に着座を促す。

「ビールってわけにはいかないな。コーラを二人に」

カウンターの奥から、はいよ、というやる気のない返事が聞こえた。

「こいつはありがたい。ソニア、お礼を言いなさい」

名前を呼ばれた少女は、ありがとうございます、と丁寧に礼の言葉を述べたあと、俺の隣の椅子に腰を下ろした。物怖じせず人見知りしない女の子のようだ。

「ソニア、か。覚えやすくていい」

「お願いできやすか？」

アントニオは父親のような存在だ。尊敬も信頼もしている。

そんなアントニオの頼みなのだから、是非とも引き受けて信頼に応えたいところなのだが、生憎と俺は子供が苦手だ。

嫌いなんじゃない。苦手なんだ。

「旦那、どうしやした？」

アントニオの声で我に返った俺は、大きくため息を吐く。

「なんでもない。ああ、一つ確認したい」

「なんでやしょう？」

「俺が預かればいいんだな？」

「そういうことでやすよ」

間違いなく厄介事だ。この少女には、何かとんでもない秘密があるのだろう。間違いなく荒事になる。

少女は余所者で、余所の町で何者かに狙われて、ノガレスまで逃げてきた。アントニオには少女を守りたい理由があって、俺に護衛を頼んできた。その理由については想像もできないが、金じゃないことだけは間違いない。

アントニオには恩がある。今の俺にできる恩返しは、どんな厄介事であっても、二つ返事で引き受けることぐらいしかない。

「分かった」

「恩に着やす」

アントニオは、自分の出番はこれで終わりだ、とばかりに一步後退した。

「トープだ。よろしく」

俺が右手を差し出すと、少女はすぐに手を取った。

「ソニアです。お世話になります」

少女の手は、とても小さかった。

年中を通して気温が高いため、アスファルトなどは溶けてしまうのだとか。詰まるところ、資金不足なのだ。

ノガレスの中心を南北に貫き、サンタ・アナを經由してエルモシージョまで続く幹線道路は、アメリカから国境を越えてやってくるトラベラーやバイカーたちに人気のあるルートの一つだ。

アメリカからメキシコに入る際には、一切の手続きを必要としていない。それはメキシコ側の怠慢でもあって、本来は複数の書類に記入しなければならない。アメリカに再入国するには最低限パスポートが必要となる。

うっかりパスポートを忘れてしまい戻れなくなったアメリカ人の再入国を手助けするのも、密入国斡旋業者の役割の一つとなっている。国境係員の友人や、非番の国境係員などもやっているが、あくまでもパスポートを忘れてしまったアメリカ人だけに限定したものだ。

町の中心地から二マイルも離れると、周囲はサボテンが立つ砂漠の景色となる。

地面は砂と土だが、この辺りは比較的多くの植物が目につくため、歩いても死に直結するようなイメージを抱くことはない。

軍人時代のアリゾナ演習で見た砂漠と同じだが、砂漠と聞いて俺が思い浮かべるのは、やはり中東で見た砂漠だ。目を失った場所であるという不快な印象しかない。

トーマスの店は、ノガレス西辺の町外れにある。少し歩けば、そこはソノラ砂漠だ。

「よし、着いた。歩かせてすまなかったな」

俺は謝罪の言葉を述べる。気持ちは少しも入っていないが、言わないよりはマシだ。

ソニアが逐一丁寧で丁寧な物言いをしてくるので、こちらもそうしなければならないような気分になってしまったのだ。

「ふあ、大きい」

目印はそびえ立つ一本のサボテン。ソノラ砂漠の固有種であるサワロ・サボテンだ。

ソニアは、立ち止まってサワロ・サボテンを見上げていた。成長したサワロは、高さ十四ヤード、重量十五トンにも及ぶ。

「サワロは初めてか？」

「はい。写真で見たことはありますけれど」

丁寧な言葉使いは、彼女の育ちの良さを余すことなく伝えてくる。しかし、粗野な俺には少しばかり耳障りでもある。

「これから向かう場所には、嫌というほどのサワロがある」

俺は一足先に車に乗り込み、助手席のシートに積もった砂を払い落とした。

「それは楽しみですね」

俺の愛車フォードG P Wは、二輪駆動と四輪駆動を切り替えられるパートタイム方式の四輪駆動車であり、更には運転席にあるレバーでタイヤの空気圧を変えることもできるため、町中でも砂漠の荒地でも難なく走ることが可能だ。意外と知られていないが、砂地を走る際は、タイヤの空気を少し抜いておくものだ。

ノガレスから西へ。本格的にソノラ砂漠へと進入する。

国境を右手にしばらく車を走らせると、少しずつ剥き出しの地面が目立つようになる。そうなると、車も走らせやすくなる。

厄介なのは、走りやすいのは俺だけじゃないってことだ。

「チッ」

ブレーキを踏み、エンジンも切る。

「どうかなさったのですか？」

ソニアは怪訝な声を出した。しかし、好奇心の方が強いようだ。

「あっちに土煙が見えるはずだ」

後部の荷台から双眼鏡を取り出して、ソニアに渡す。言うておくが、俺の物じゃない。アントニオの忘れ物だ。

「んー……あ、見えました。向こうの方に移動しているみたいですね」

「北へ向かっているんだ」

「あれは何なのですか？」

「最も単純な^ド_ラ^イ_フ^ス_ル^ー国境の越え方だ」

ソノラ砂漠の真ん中には、国を隔てるフェンスが存在していない。そのため、砂漠越えによるアメリカへの密入国を試みる者が後を絶たず、カリフォルニアとテキサスに増設されたフェンスのおかげで、更なる増加傾向にある。

勿論、捕まる危険も高い。途中で国境巡視員に発見されてしまった場合は、メキシコ側まで全速力で戻る。メキシコ側に戻ってしまえば、国境巡視員は手を出せない。

非常に見通しが良い砂漠は、発見されやすい反面、逃げやすくもあるということだ。

この方法でアメリカへと運び込まれる麻薬もある。

「国境巡視隊のヘリが飛んでやがるから、すぐに発見されるだろう。そうなれば、俺たちも巻き添えを喰らっちゃうからな。しばらくここで待機だ」

「あれは、悪いことをしているのですか？」

「そうだな。少なくとも、真っ当なことはしてない」

俺が言えた義理じゃないが、と密かに自嘲する。反省はしてない。

「麻薬、ですか」

この境界で麻薬の密輸が行われていることは子供でも知っているが、密入国^コ_ヨ^ー_{テ斡旋業者との見分け方は誰も知らない。}

「機会があったら聞いておこう」

答えはいいえだろうがな、という続きは飲み込んでおく。

「私、麻薬なんか嫌いです」

「そりゃ良いことだ」

後部の荷台から帽子を取り出して、ソニアの頭に被せてやる。いわゆるカウボーイハットで、勿論これもアントニオの忘れ物だ。俺の帽子じゃない。

砂漠の日差しを直接浴び続けるのは酷ってもんだ。

何度も言うが、子供は苦手なだけで嫌いじゃない。それに、俺はこれでもフェミニストだ。

「どうして麻薬なんて存在するのでしょうか？」

「さあな」

ソニアからは、麻薬に対する強い憎しみが感じられた。

麻薬に対して憎しみを持つまでに至った経緯は知らないが、余程のことがあったのだと推測するのは容易なことだ。

だからといって、俺にはそれを解決してやる義理などはなく、その必要もなければその気もない。他人の人生に、求められてもいない介入を行うほどお人好しじゃない。

俺の役割は、この子の安全を確保することだ。下手に口出しをして機嫌を損ねられでもしたら、その方がずっと厄介だ。

「そろそろいいだろう」

ソニアは未だに不快な空気を発していたが、構わずにキーを回してエンジンに火をいれた。目的地に到着するまでに、彼女の機嫌が直るような何かがあればいいのだが。そんな幸運に巡り会えるように、と願いながら、アクセルを踏み込んだ。

ソニアを連れて向かったのは、ソノラ砂漠の中では植物の比率が高い地域にある俺の家だ。二年の月日を費やして自力で掘った、家と呼ぶには申し訳ない洞穴なのだが。

付近には、ネズミや毒蛇、毒トカゲが多く生息しているし、業者ではない獣のコヨーテもうろついている。

俺は、とてもじゃないが、町中には住めやしない。俺に対して報復を企てる奴らがいるからだ。客を装って俺に近づき、隠し持った銃で、ズドン、だ。逆恨みもはなはだしい。

アメリカに麻薬を持ち込ませないために、客の所持品はすべて検査しているのだが、俺の場合は身を守るためでもあるってわけだ。

尤も、大抵の場合は調べようとした途端に銃撃戦になってしまう。市街地でそんなことをやられてはたまらない。

ノガレスに住んでいた頃、寝込みを問答無用で襲撃されたことがあった。勿論、一人も逃さず返り討ちにした。俺に銃口を向けた者が辿る末路は常に一つ。

しかし、近隣住人には多大な迷惑を掛けてしまった。こう見えても俺は、ご近所付き合いを大切にしていたんだ。

「えっと、あの……」

ソニアの困り果てた声が、俺の耳に届いた。

どうした、と訊ねても、聞こえてくるのはハッキリしない返事ばかり。

俺は光を必要としないのだから当たり前の話だが、洞穴の中には照明がない。唯一あるのは、アントニオが訪れた際に置いていったランタン一つだ。

到着した際に火を灯して渡しておいたし、今も炎の匂いと揺れる音がしているから、ランタンの火はまだ消えていない。

ソニアが困っているのは、明かりの問題ではないということだ。

「ああ、なるほど」

少し考えて、一つの答えに辿り着く。

俺の家に存在しないもの。電気、ガス、水道。そして、トイレだ。

俺は男だからその辺で済ませてしまうのだが、さすがに十歳の女の子にそんなことをさせるのは、あまりにも忍びない。

だが、どうしようもない。

「すまない。今日だけは我慢してくれ」

洞穴の外へと小走りで向かうソニアの足音に、何年振りかにか心の底から申し訳ないと思い、同様に、何年振りかにかその思いを言葉にした。

「トープさん」

ソニアが俺の名を呼んだのは、夜も更け、ランタンの灯火が消されてしばらく経ってからのことだ。

「眠れないのか？」

車のシートよりも硬い寝台、淀んだ空気、環境は最悪に近い。寝付きが悪くても仕方のないことだ。

「トープさんは、目が見えないと聞きました」

「アントニオから聞いたのか」

「はい。ごめんなさい」

「謝る必要はないさ」

知らない男の元に身を寄せるのだから、不安があって当然。その不安を取り除くために、俺の話をしたのだろう。

「本当に見えていないんですか？」

「本当だ」

「嘘ですよ？ 見えてないなんて」

「嘘じゃないさ」

「でも、普通に食事していたし、瓶コーラも飲んでいたし、平然と歩くじゃないですか」

なるほど、と俺は思う。

目が見えないと聞いておきながら、俺が運転する車に平気で乗り込めたのは、本当は見えているのだと思っていたからだったのだ。

どうやらアントニオは、見えないことまでしか話していないようだ。

確かに、俺の目は何も映さないし、俺の目には何も映らない。それでも、どこに何があるのかを把握することはできる。

例えば、顔を洗った際、伸ばした手の先にはタオルがある。夜中に家に帰れば、真っ暗な中でも明かりのスイッチを押せる。

それを可能としているのは、記憶から得た情報を基に組み上げたメンタルマップの存在だ。

強引に言ってしまうえば、見えていると思っている映像は、目に入った光から得た情報を基に組み上げたメンタルマップに過ぎない。

精度に雲泥の差があるとはいえ、両者の違いは何の情報に基づいているかだけなのだ。

目が見えないからといって、周囲の状況を全く把握できないわけではない、という話だ。

「見えてはいないが、分かるんだ」

「分かるとは？」

「そうだな……自分の耳を手探りで探したりはしないだろう？」

「自分の身体ですから、当たり前です」

「その通り。だが、なぜ分かるのか、と聞かれたら答えられるか？」

「それは……」

「意地悪を言っているわけじゃない。分かるから分かる、としか言いようがないのだ」

「じゃあ、どうして目が見えなくなってしまったの？」

「神様に、もう何も見たくない、とお願いしたんだ」

「それは嘘ですよ？ 子供扱いは止めて欲しいです」

我ながらユーモアを効かせた良答だ、と思ったのだが、ソニアにとってはそうではなかったらしい。子供の相手は難しい。

「戦争で、な」

「痛かったですか？」

「もう覚えていない」

ソニアは矢継ぎ早に質問を浴びせてくる。

それが不安からの行動なのか、好奇心からの行動なのかは分からないが、もう少し付き合ってやること

にした。

「いつからここに住んでいるんですか？」

「二年だ」

「寂しくないですか？」

「大人なら寂しいなんて思わないさ」

少しの沈黙のあとに聞こえてきたソニアの声は、暗く沈んでいた。

「お父さんとお母さんも、私がいなくなっても寂しくないのでしょうか？」

「ソニアはどうだ？ 両親がいなくなっても、寂しくないか？」

「寂しい、です」

「だったら、同じ気持ちのはずだ」

「トープさんには、いなくなったら寂しいと思う人はいないのですか？」

子供という生き物は、遠慮なしに傷を抉る。悪気がない分、タチが悪い。

「もう眠れ。明日は遠出をする」

少し強めに言い放つと、ソニアが萎縮する気配が伝わってきた。

すん、すん、と鼻を吸る音も聞こえてくる。どうやら泣かせてしまったらしい。

まったく。これだから子供は苦手だ。

4

夢を見る。

場所は中東の国イラク。

バグダッドの西、ファルージャ。

そこでは、互いに自らを正義と信じる者同士が、互いに相手を悪だと罵り合っていた。両者の間で飛び交っているのは、すでに言葉ではない。そこにあるのは、鉛、鉄、血、火薬、砂、土、そして、命。

市街地での銃撃戦。雷鳴のような轟音は鳴り止む気配を見せず、撃たれて倒れる際の悲鳴さえも聞こえはしない。

そんな場所で、俺は引き鉄を絞り続けていた。それだけが自分の存在価値であるかのように。

不意に銃声が止む。あまりにもあっさりとして止んでしまったことに対して、何かを思う暇などはない。

部隊は前進を始める。

道端に倒れていた男が急に息を吹き返して銃を乱射したが、これまでに何度となく繰り返されていたこの手の奇襲攻撃は、もはや通用するものではない。

部隊は、立っていようが倒れていようが一切お構いなしに、ひたすら鉛玉を打ち込んでいく、という対応策を採用した。

感覚はあっという間に麻痺した。

彼らは戦士だ。死を恐れていない。敵を排除するためならば、何の躊躇もなく命を捨てる。彼らにしてみれば、捨てているのではなく捧げているのだ。恐れることなど何もないのだろう。

彼らは、擬死、虚偽降伏、自爆、あらゆる手段を使ってきた。

彼らは、女や子供や老人でもあった。

俺が引き鉄を絞り続けていたのは、そんな場所だ。

子供が歩いてくる。男の子だ。小さな男の子。歳は十にも満たない。

その小さな手に、あまりにも不似合いな箱を抱えて、ゆっくりと歩み寄ってくる。

俺は叫んだ。止まれ、その箱を置くんた、繰り返し叫んだ。

それでも少年の歩みは止まらない。頼むから止まってくれ、という懇願にも似た祈りも、届きはしなかった。

指を引き鉄に置き、照準は爆弾と思われる箱を避けて、少年の額に合わせる。

ひゅー、ひゅー、と空気が乾いた音を立てて気管を往復する。

涙で視界が滲んだ。

こんな幼子を兵器として利用する奴らも、こんな幼子を兵器と見なして射殺するしかできない自分たちも、どちらにも正義を語る資格などないように思えた。

そんなものは、現実を知らぬ者が口にする甘ったれた戯言だ、と分かっているながらも、そう思ってしまった。

殺すか殺されるか。

俺は、ハッキリしていて分かりやすいその現実を、受け入れられなかったのだ。

少年は俺の目の前に到達した。

少年は笑いながら箱を差し出し、俺は少年が差し出した箱に手を伸ばす。

何の前触れもなく、少年の箱が爆ぜる。

音も色も、痛みもない。そして後悔もない。

ああ、良かった。今度は撃たなかった

「トープさん、おはようございます」

「おはよう。ソニア」

「もしかして、まだ寝ていました？」

「いや、大丈夫だ」

本当は寝ていた。

誰かの声で目を覚ますのは、いつ以来になるだろうか。と、そんなことを思い出そうと試みることも、随分と久しぶりのような気がした。

「あそこにある箱……」

「箱？」

俺の過剰な反応に、ソニアは驚いたようだ。

「ヴァイオリン……ですね？ 触ってもいいでしょうか？」

「弾けるのか？」

「少しですけど」

「聴かせてもらおうか」

それで少しでも気が紛れるのならば、俺はそう思っていた。

電気もなければトイレもない。この洞穴には娯楽など何一つとしてない。普通の人間が長時間滞在すれば、精神の崩壊を招く恐れがある。ましてや十歳の少女ならば尚更だ。

嬉々としてヴァイオリンを取り出したソニアは、その場で構えて弾き始めた。

緩やかで自由な旋律。ヨハン・セバスチャン・バッハ作曲、無伴奏ヴァイオリンソナタ第一番ト短調。ヴァイオリン独奏の名作だ。

ヴァイオリンの音色は、狭い洞穴内でいつまでも反響を繰り返す。

その残響音は、俺を回顧の旅へと誘った。^{いざな}

俺は音大の学生だった。

大学院に進む奨学金を貰うため、志願兵となった。

兵役が残り一年となった年、イラクへの派兵が始まった。奨学金という見返りのために入隊した志願兵は、戦時に退役することは許されない。

イラクに派兵された俺は、ファルージャの戦闘新たな夜明け作戦で負傷した。

即日のうちにフランスに運ばれ、ある特殊な手術を受けた。

頭蓋骨に存在する副鼻腔と呼ばれる空洞に、超音波振動子と受振機を埋め込み、反響定位を実現するという人体実験だ。光を失った絶望と混乱の中にいた俺は、得ても知れない実験に自分を提供してしまった。

圧電素子（ピエゾ素子）によって超音波を発生させ、その反射情報を専用の受振機である擬似眼球を通して脳に送る。反響で得た情報を基に作られた信号であるため、色に関する情報は含まれていない。

何も映さないし、何も映らない。しかし、どこに何があるのかは分かる。

それが俺の目。

俺の他にも同様の手術を受けた者が数人いたらしいのだが、俺のように自由に歩くことはできなかったらしい。

たまたま俺が成功したのか、俺に適性があったのかは分からないが、再び世界の形を知ることができるようになった。勿論、そうなるまでには過酷な訓練と実験の繰り返しがあった。

俺の視神経は残っているが、そこには外部の光によって得られる情報の一切が送られないため、何も見えていない状態となる。完全に機能していない状態だ。

受振機が脳に送った信号を基に周囲の状況を把握しているのだが、『Aという信号だからこれはa』といった判断をしているわけじゃない。

正直なところ、なぜ分かるのかは俺にも分かっていない。

その辺りをじっくりと考えたこともあったが、硬いとか、柔らかいとか、深い浅い、軽い重い、そんな曖昧な表現でしか整理することができなかったため、あつという間に行き詰まってしまい、すぐに止めてしまった。

結局は、ソニアに言ったように、分かるから分かる、としか言いようがない。

俺が立ち上がると、ソニアはピタリと演奏を止めた。自分の演奏が俺の気分を害してしまったと思ったようだ。

「もっと自由に楽しみながら弾くといい。楽しまなければ音楽ではない」

俺自身は優れた奏者ではなかったが、感覚的な助言ならばしてやれる。

ソニアの演奏は隙の少ないものだったが、悲しきかな、楽譜をなぞっただけとも言える。とはいえ、十歳にしてこの曲を譜面通り正確に弾ける技術は、驚嘆に値する。

「トープさんも弾かれていたんですね？ 私にも聴かせてください」

偉そうなことを言ったが、俺の演奏は下手の横好きというやつだ。技術ではソニアの方がずっと上手い。俺は奨学金を貰えなかったのだ、わざわざ聴かせるほどの腕前ではない。

「朝食に行く」

「……はい」

ソニアは悲しげに返事をした。

「ヴァイオリンを忘れるな」

「え？」

「食後に弾いてやる。ヘタクソだが笑うなよ」

「はい！」

ソニアの返事は、ヴァイオリンの音に負けない反響をみせた。

「約束ですよ！」

「ああ、約束だ」

さっそく出掛ける準備を始める。

俺の準備は、日差し避けのスカーフとショールを巻くだけで終わる。

朝になっても洞穴の中には太陽の光が入らないため、ソニアは準備に手間取ったようだ。

「トープさん、大変です！ 車がありませんよ！」

準備を終えて外に出たソニアは、開口一番にそう叫んだ。

「心配ない、こっちに向かっている」

「向かっている？」

反響定位による周囲の把握が可能となった俺は、アリゾナ州の州都であるフェニックスへと移された。

ブレイン・マシン・インターフェイス
人間の脳からの直接命令による機械の遠隔操作の研究に、実験体として参加するためだ。

研究を行っているのは、国防総省の機関・国防高等研究計画局。

人間の脳に人為的に手を加える行為が倫理面で問題とされるため、この研究は公にされていない。俺に拒否権はなかったが、あったとしても拒否はしなかった。フェニックスへと移る際に、トープ・ソノラという新たな名前を与えられた。俺はイラクで死んだことになっている。

フェニックスでは、カメラと脳とを接続させる実験が行われていたが、その成果は軍事利用に耐え得るまでには至らなかった。その頃、光の影響を受けない反響定位を可能とした俺の存在を知って、新たな可能性を見出したらしい。

俺には難しすぎて、受けた説明のほとんどを理解できていなかったのだが、実験は見事に成功した。

彼方から走ってきた無人のフォードG P Wは、ソニアの真横にピタリと停車した。

ソニアは、驚きのあまりに声を失っていた。

呆然と立ち尽くすソニアを、背後から一気に抱え上げて助手席に座らせた。

このフォードG P Wには、俺と同じように超音波振動子と受振機が搭載されている。電波を介して信号を受信することで、遠く離れた車の周囲の情報を把握することができ、電波を介して送信することで自分の身体のように操作ができる。

電波の送受信には、中継アンテナを使う。勿論、馬鹿正直に設置したりはしていない。アンテナは、ソノラ砂漠のシンボルであるサワロ・サボテンに偽装した状態で、砂漠全域を網羅するように設置されている。

夜間、車を近くに置いていないのは、この場所が突き止められるのを防ぐためだ。車が止めてあれば、この付近にいる、と言っているようなものだ。

「さぁソニア、朝食の希望はあるかな？」

食事を楽しもうという気になったのは、随分と久しぶりだ。

自分でも気付かないうちに、ソニアに心を開いていたらしい。

「結局これか」

いつものトーマスの店で、いつも通り十五分以上待たされたタマーレスにかじりつく。

「昨日トープさんが食べているのを見たときから、美味しそうだなあって」

いつもと違うのは、右隣にソニアが座っていることだ。

「アントニオは来てないのか？」

「今日は見てないねえ。ビールは？」

そしてトーマスの声は、いつも通りやる気を感じさせない。

「これから仕事なんだ、コーラにしてくれ」

「はいよ」

コーラ瓶が小気味良い音と共に開栓される。

「お嬢ちゃんはどうするね？」

「ハマイカがあるのでしたら、それを」

ハイビスカスの花弁から抽出した飲み物、それがハマイカ・ティー。酸味があり、砂糖を加えて飲む。冷やしても温めてもいい。飲食店や一般家庭に必ずと言っていいほどあり、大人から子供まで広く飲まれている。

俺には少々上品な飲み物だ。

「はいよ」

トーマスの声は、やはりやる気を感じさせなかった。

「遠出をするって言ってましたけど」

トーマスのトルティーヤが口に合ったのか、ソニアは店を出てからも上機嫌だった。

「サルサが付いたままだ」

親指でソニアの頬に付いたままのサルサを拭う。

超音波は激しく減衰しながら空気中を進む。やがて何らかの物体に到達した際に、反射を起こしてその存在を知らせる。専門用語では固有音響抵抗というのだが、音波は物質間の境目で反射を起こす。つまり、最初に音波が伝わった物質である空気と、その他の物質との境目で反射が起きるわけだ。空気中の塵などにも反射してノイズを生むが、微細な粒の一つ一つを知覚できるほど繊細な感性は持ち合わせていない。

人の肌とサルサとでは固有音響抵抗が異なるため、異物の付着にも気付くことができる。口元に付着する異物など、タマーレスに使われていたサルサ以外には考えられない。

「やっぱり、見えてますよね？」

わざと付いたままにしていたのだと気付く。どうやら、まだ俺の目のことを信用していないらしい。だが、語調から感じる雰囲気では、怪しんでいるというより、好奇心を持って楽しんでいるようだ。

「その前に、アントニオの家に行く」

俺の洞穴はソニアが生活できる環境ではないため、他の場所へ移動することにした。アントニオにはそのことを伝えておく必要がある。

それに、どうにも胸騒ぎがする。

トーマスの店から南、ノガレスの南西部にアントニオの家がある。大きくも小さくもない、町中にありふれた、ごく普通の家だ。

いつもは、家の前に車を止めるとすぐに声を掛けてくるのだが、今日はそれが無い。

車を降り、玄関を開ける。中にも外にも人の気配がない。目の見えない俺でも、異常はすぐに分かった。
「どうして……」

ソニアは声を震わせる。

家中が荒らされていた。争った、というよりは、憂さ晴らしに暴れた、そんな形跡だ。何かを探した形跡を消そうとしたのかもしれないが、俺の目はそういった分析には向いていない。

「行こう」

外に出ると、こちらを監視してくる複数の気配を感じた。

俺は、内心舌打ちをしていた。

荒事になると認識しておきながら、ソニアを連れ回した挙げ句、のこのことこんなところにまで来てしまった。結果、まんまとソニアの居場所を教えてしまったわけだ。

勘なのだが、ソニアは自分が狙われていることだけではなく、狙われる理由も知っているのではないだろうか。自分を狙う相手の正体も、知っているのかもしれない。その証拠に、助手席に座るソニアは、聞かれない、という空気を発している。

アントニオは、どこまで事情を知っていたのだろうか。

南のサンタ・アナに向かって幹線道路を走り、途中で道を外れて砂漠に入る。道なき道を走れば、相手は開き直って追跡を続けるか、尾行を中止するかのどちらかを選ばざるを得ない。尾行者がいなければ、そのまま目的地へと向かうだけだ。

追跡は二台。相手は開き直る選択をしたようだ。距離を詰めようと速度を上げている。砂漠の真ん中で目撃者もいないことだし、実力行使に出るつもりらしい。

分かりやすくいい。実に俺好みの選択だ。

「トープさん」

ソニアは不安そうに俺の名を呼んだ。

返事代わりに、アントニオの帽子を被せる。

「大丈夫だ。すぐに終わる」

気休めなどではない。ここソノラ砂漠は、俺の獵場なのだ。

システム・ブート
「狩りの時間だ」

声と同時に世界が広がる。

俺の意識は、サワロ・アンテナを介して、上空二万マイルにある準天頂衛星に繋がる。

システムオールグリーン。正常に作動している。

ゲット・ア・グリッブ
「目標捕捉」

目標は、追跡してくる二台の車。

ソノラ砂漠のあらゆる場所に、サポテンなどの植物に偽装した観測装置が設置されている。それらから送られてくる情報によって、ソノラ砂漠のどこに何があるのかを把握することができる。

そして、把握するだけでは終わらない。

俺の本領は、ブレイン・マシン・インターフェイス人間の脳からの直接命令による無人攻撃兵器の遠隔操作なのだから。

ローディング
「弾薬装填」

スプリングフィールドM21
長距離狙撃銃二丁に装弾。照準は右前輪に。

ロック・オン セーフティ・オフ
「照準固定、安全装置解除」

ブレイン・マシン・インターフェイス
人間の脳からの直接命令による操作は、本来ならば声に出す必要などは全くない。だが、声に出して目

的を明確にすると、不思議とスムーズに進む。

細かい動作は勝手にやってくれる。俺がやるのは、攻撃目標の設定と装弾、発射のトリガーを引くだけだ。

連続した二発の銃声が響く。続いて、スピンした車が砂地を削る音が聞こえてきた。

「終わったぞ」

ソニアに声を掛けて、緊張から解放させる。

ソニアは、背後を振り向いて接近してくる車がないことを確認してから、ようやく安堵のため息を漏らした。

「……殺して……しまったの？」

「いや、タイヤを撃った」

砂漠で車という移動手段を失ったわけだが、ここは町からそう離れていない。タイヤを交換することも、ノガレスに歩いて戻ることも、どちらでも可能だ。

これで命を落とすようなら、運か頭のどちらかが悪かったということだ。責任を問われても困る。……などと言えるわけもなく。

そうして、沈黙の時間が訪れた。

砂漠を走ること数時間。

到着したのは、アメリカ合衆国はアリゾナ州にあるツーソンという都市。

ソノラ砂漠の東端に位置するツーソンには、ノガレスから車で一時間ほど北に走ることで到着する。それは国境がなければの話だ。

メキシコ国内をうろついてソニアを危険に晒すよりも、国境を越えてアメリカに入ってしまった方が安全だと判断し、砂漠の真ん中を突っ切ってアメリカに入った。

ツーソンには俺が自由に使える一軒家があり、普段は国防高等研究計画局の関係者が住んでいる。年に二回ある雨期の間は、そこで過ごすことにしている。

ツーソンの北にあるフェニックスまで行けば、高層マンションに俺専用の部屋が用意されているのだが、そこを利用するのは年に数回といったところだ。

高いところはあまり好きじゃないんだ。

「あら、雨期にはまだ早いわよ」

別荘の管理人、アミー・マーティン。

彼女は自身の年齢を二十七と言い張って^{はばか}憚らないのだが、三十代の後半に差し掛かっているのは間違いない。

初めて会った四年前に二十七だったのだから、よしんば最初は本当の年齢を口にしていただけとしても、現在は三十一だ。

「あらやだ。貴方ってば、そういう趣味があったのね」

「子供の前だ。品のない冗談は止せ」

そう言いながら、以前同じことを口走った自分を思い出して苦笑う。

「ソニアだ。事情があって預かっている」

「ソニアです」

「こちらのおねえさんは、アミーだ」

「よろしく」

二人が握手を交わしている間、何となく居場所を失った気分になった。

「連絡してくれたら、ご馳走を用意して待っていたのに」

「缶詰なら食べ飽きている」

「あら奇遇ね、私もよ」

「ソニアにシャワーを浴びさせてやってくれ」

アミーはソニアとバスルームに向かった。

リビングに残った俺は、身体を投げ出すようにしてソファに身を預けた。

ブレイン・マシン・インターフェイス

人間の脳からの直接命令による遠隔操作を長時間連続で行うと、脳は多大な負荷を受けることになる。

体力的にも著しく消耗する。それは肉体的な消耗ではなく、頭脳労働を行った際のいわば精神的な消耗であり、単純な睡眠だけでは完全な回復が見込めない。

回復に効果的なのは、アルコール、運動、そして音楽。

アルコールについては、酔いによる誤作動を防止するために禁じられているのだが、飲んだところでお咎めを受けることはない。局の連中は、アルコールに酔った際のデータも欲しいのだろう。

ツーソンの家には地下室があり、各種運動器具とグランドピアノが置かれている。

ここならば何も気にすることなく演奏できるし、アミーはピアノを始めとした複数の楽器に通じている。少なくとも、ソノラ砂漠の洞穴にいるよりは楽しめることだろう。

何より、ここにはシャワーとトイレがある。

「何か食べる？」

バスルームから戻ってきたアミーは、そのままキッチンへ素通りする。

「俺はいい。ソニアに合わせてやってくれ」

「あの子ども同じことを言っていたわ」

前後して、冷蔵庫の開け閉めが行われた。

「トープ。貴方、誘拐犯だったのね」

「なんだと？」

「あの子の写真がニュースに出ていたわ。ファレスで誘拐されたそうだけど」

メキシコ合衆国チワワ州の最大都市であるシウダー・ファレスは、東西に走る国境の中央付近にある。国境となるリオグランデ川を挟んで、アメリカ合衆国テキサス州のエル・パソと一つの経済圏を形成している。

両市では収入に数倍の格差があり、ファレスに住んでいるがエル・パソで働いているという者は数多い。大半が不法な入国を繰り返している。

ファレスでは、夜のうちに川を歩いて渡るのが一般的な密入国の方法だ。ファレス周辺のリオグランデ川は意外に浅く、膝下までしか濡らさずに川を渡れる場所がある。

そのためアメリカへの麻薬流入が激しく、多数の麻薬密売組織が居を構え、組織同士の争いや警察との衝突が日々絶えることなく繰り返されている。

「年間何千人もの犠牲者がいるのに、子供一人の誘拐を取り上げたのか」

「事件に大小はないって知り合いが言った」

「その知り合い、良いことを言う」

あるのは当事性の有無だけだ。自分が関わっていなければ、その事件は起こっていないも同然。年間何千人もの犠牲者を出すファレス麻薬抗争も、今の俺にとっては他人事だ。

俺は国防高等研究計画局に飼われている身。勝手な行動は許されない。

許されているのは、密入国斡旋業者としての活動と、降り掛かる火の粉を払うために行う、少々の荒事だ。不可抗力で巻き込まれたのならばまだしも、他人事に自ら首を突っ込むことは許されていない。

「言ったのは貴方よ」

「そうだったか」

「それで、あの子は何者なの？」

「知らん。アントニオから預かっただけだ」

そうは言ったものの、予想は付いていた。

ソニアは、荒らされたアントニオの部屋を見て、おじいちゃん、と心配そうに呟いていた。聞こえないと思ったのだろうが、俺には聞こえてしまった。

「ここで預かるのは構わないけど、私まで誘拐犯扱いされるのは困るわ」

「何が言いたい」

「貴方の目を使わせて欲しいの」

アミーはコンピュータのスペシャリストだ。いわゆるハッカーであり、国防高等研究計画局に勤める以前は、フリーの産業スパイをやっていたらしい。人間の脳からの直接命令ブレイン・マシン・インターフェイスによる遠隔操作に興味を持ち、自ら名乗り出て計画に参加したのだと聞いている。

テレビ局や警察のデータベースにアクセスし、必要な情報を取り出す。これがハッキングと呼ばれる行為。参照履歴などで発覚し、侵入経路から正体を突き止められることがある。

だが、俺の目を使用した場合は少々異なる。容量の次元が違う。セキュリティを潜り抜ければ、システムをまるごとごっそり頂いてしまえるのだ。

このやり方で、汚職や脱税の証拠などを山のように見てきたし、上院下院議員やスーパースターの子供が引き起こしたスキャンダルの類も、掃いて捨てるほど知っている。

「今度はどこに入り込む気だ」

「分かるでしょ？ 私が知りたいの」

アミーが、誘拐報道の裏側を調べよう、と言っていることはすぐに分かった。

「何も聞かないと約束してある」

「一インチ（約二・五センチ）右にずれてたわ」

アミーの呆れた声が、俺を貫いた。

「何がだ？」

分かっているけど、聞き返すことしかできない。

「ここに来る前に使ったでしょう？」

「熱で銃身が曲がっていたんだろ、俺はしくじってない」

「二丁とも同じように？ 考えられないわ」

三百三十フィート（約百メートル）の距離で一インチずれるのは、角度にして〇・〇二度以下の狂いが生じていることになる。通常は誤差の範囲内。だからこそ、偶然ではない。

「それがどうした」

「右側に気を取られる何かがあったのよね」

運転席の右側は助手席。あのときそこにいたのは、身を震わせるソニア。

「だが俺は」

「もう甘えるのはやめなさい、トープ」

俺は言葉を失ってしまった。

「いいじゃない、守ってあげたいんでしょ？」

俺には、一度だけ頷くのが精一杯だった。

「準備できたわ」

アミーの合図を受けて、深く息を吐く。

「システム起動」

声と同時に意識は上空二万マイルの衛星軌道の上に飛ぶ。

システムオールグリーン。感度は良好だ。

衛星にはカメラも取り付けられているが、俺はその映像を見ることできない。もしも擬似眼球に映し出すことができたのなら、それだけを見て生活するだろう。

どこかの国の宇宙飛行士が、宇宙からは国境が見えなかった、と言ったそうだが、地上にはハッキリとした金属フェンスの国境が存在し、今日この瞬間も拡張され続けている。

ハッキリしているのは俺好みなのだが、そればかりは好きになれそうにない。

「ポート解放。チャンネル接続」

「オーケー、接続したわ」

アミーは僅かに興奮した声を発した。ハッキングは彼女にとって至福の時間なのだ。

どういう状況で誘拐されたことになっているのか。現場はどこになっているのか。ソニアの素性、アントニオとの関係、ソニアを狙っていた者たちの正体。アントニオの安否と所在。調べることは、まだまだ他にもある。

「ソニアがシャワーを終える前に済ませよう」

「そうね、まずはどこから行く？」

ソニアが誘拐されたというシウダー・ファレスでは、麻薬密売組織同士の抗争と、それを取り締まるメキシコ警察との間で起こる銃撃戦が、場所も時間も選ばれることなく発生する。それを引き起こしているのは、国境の存在でもなければ、南北の経済格差でもない。

麻薬。すべてはその一言で説明できる。

そして、その麻薬に関する情報を扱っている機関が

「エル・パソ情報センターだ」

6

子供が歩いてくる。男の子だ。小さな男の子。歳は十にも満たない。

その小さな手に、あまりにも不似合いな箱を抱えて、ゆっくりと歩み寄ってくる。

俺は叫んだ。止まれ、その箱を置くんた、繰り返し叫んだ。

それでも少年の歩みは止まらない。頼むから止まってくれ、という懇願にも似た祈りも、届きはしなかった。

俺は引き鉄を引いた。

死にたくない。それだけが頭にあった。

非戦闘員は市街に退避している。逃げ遅れた市民には外出禁止令が通達されている。

俺は繰り返す。非戦闘員は市街に退避中。逃げ遅れた市民は外出禁止。俺は繰り返した。何度も、何度でも。

箱は爆弾ではなかった。

殺すことを拒否し、殺されることも拒否し、最終的に我が身を優先した。

俺は、受け入れられない現実から逃げるために、自らの命を絶たんと銃口を頭に据えたのだ。
生き延びはしたが、心は死んでいた。残った身体は、意思を持たぬ殺戮兵器になった。

「トープ、起きて」

アミーの声。俺はいつの間にか眠りに落ちていたらしい。

「ああ、すまん」

「疲れているところ申し訳ないけど、あの子がシャワーを終えて出てくるわ」

俺とアミーは、この騒動の全貌を解明するために、エル・パソ情報センターのデータベースに侵入した。
まず、ソニアの母親について。

彼女はアメリカ麻薬取締局の特殊捜査官だった。これは、センター経由でバージニア州アーリントンにある麻薬取締局に侵入して確認した事実だ。

フアレスでの潜入捜査を行っていた彼女は、麻薬密売組織の男に近づいた。それがアントニオの息子、ソニアの父親となる男だ。

記録によれば、彼女は十年前に死亡している。ソニアを産んですぐのことだ。ここで分からないのは、麻薬捜査官が麻薬組織の男の子供を産む理由だ。

次に、ソニアの父親について。

彼の情報は、麻薬取締局に重要機密として保管されていた。彼はアントニオの息子だ。従って、ソニアはアントニオの孫となる。

彼は父親であるアントニオに自分の娘を預けた。ただでさえ面倒見の良いアントニオのことだ、頼みを断ることはないだろう。この仮定は筋が通る。ただ分からないのは、彼がソニアを預けた理由だ。

そしてアントニオ。

アントニオは、息子から預かった孫娘を俺に預けた。俺に預けたのは、これは俺の勝手な想像だが、自分が息子の元へ向かうためだと考えている。その根拠はある。

アントニオは麻薬を忌み嫌っている。自分の息子が麻薬密売組織に加担していると知れば、地の果てまでも追い掛けて、殺してでも止めさせる。アントニオとはそういう男だ。

だがアントニオは、そんなことのために息子の元へ向かったのではない。もしそうであれば、家が荒らされる理由がない。

アントニオは俺にソニアを預け、自分の意思で家を出た。そのあと、何者かが家を荒らした。俺がタイヤを撃ち抜いた車に乗っていた連中なのだろうが、奴らの狙いがソニアであれば、家を荒らす理由がない。
最後にソニア。

アントニオの孫で、麻薬密売組織の構成員と麻薬捜査官との間に生まれた子供。

仮に、父親が大幹部で、母親はその信用を得るために子供まで産んでみせた、とすると、ソニアには辛い現実となる。麻薬に対して強い憎しみ抱くソニアが、こっそり家を出てアントニオの元に向かったとしても不思議ではない。

だが、ソニアは父親に対して憎しみを抱いていない。会えなくて寂しいとまで言っている。父親によってアントニオに預けられた、というのは確定的だ。

また、そうでなければ、アントニオは自分の息子、つまりソニアの父親の状況を知ることはなく、自ら出向くこともない。

孫娘を置いて町を離れる理由が別にあるのならば、話は変わってくるのだが。

父親と共にアントニオを訪ねたのか、父親に言われて一人で訪れたのかは分からないが、ソニアがフアレスから来たのであれば、アントニオが向かった先もフアレスだ。

これらの事実と仮定とを整理する。

ソニアが狙われているのは、何らかの付帯的な理由だと考えられる。例えば、父親に対する脅迫の道具などだ。

しかし、アントニオの家が荒らされていた事実を踏まえると、何かを探していると考えるのが妥当だ。つまり、狙いはソニア自身ではなく、ソニアがファレスを離れる際に持ち出した何か、にある。

ソニアの父親は、麻薬密売組織の連中が必死になって探さねばならないような何かを自分の娘に持たせ、アントニオに託した。

こう考えると、麻薬捜査官であるソニアの母親が、麻薬組織の男の子供を産んだ理由も見えてくる。

単純なこと。二人は愛し合っていたのだ。

志を同じくした者同士が惹かれ合うのは至極自然の流れだ。つまり、ソニアの父親も麻薬密売組織を潰すために潜入していたのだ。

アントニオはそれを知っていたからこそ、追い掛けて撃ち殺すような真似をしなかったのだろうし、ソニアの父親の情報が麻薬取締局に重要機密として保管されていたことも、協力者なのであれば納得できる。

「俺はどれくらい眠っていた？」

「そうね、五分ぐらいかしら」

ソニアに確認しておきたいことがある。大差はないが、アミーからではなく俺から確認するべきだろう。

バスルームの扉が開くと、アミーはそそくさとキッチンに向かった。

「おかげさまでとても爽快です。ありがとうございました」

「えっと、フルーツジュースを作るけど、苦手な果物ある？」

「いえ、平気です。いただきます」

ソニアの逐一丁寧で丁寧な物言いには、アミーも対応に困るようだ。

ソニアは、俺の対面のソファに座った。

「最初からここに連れてくるべきだったな」

「聞いてもいいですか？」

ソニアは俺の様子見の軽口をあっさりと撃ち落とす。

「ん？ ああ、いいぞ」

機先を制され、少々途惑ってしまった。

「タイヤを撃ったと言っていましたけど、どうやって撃ったんですか？」

ソニアは、何かの意図を持って質問しているようだった。誤魔化すこともできたが、そうしてはならないような気がした。

「砂漠のあちこちに仕掛けがあるんだ。車と同じように、それを自由に動かせる」

「車の運転をしていたのに、同時にそんなことができるんですか？」

「それはだな……」

俺の感覚では手足と同じであって、身体の一部なのだ。どうやれば両手両足を同時に動かせるのか、と聞かれても、答えに困る。

「それは？」

ソニアは、考える暇も与えてくれない。

「トープはそれ以上説明したくてもできないのよ。よく分かってないから」

そこにアミーの助け舟が入った。助け舟かは怪しいが、そういうことにしておく。

「アミーさんはご存知なんですか？」

「彼はね、指揮者なのよ。音楽をやっているなら分かるわよね？ 理論が知りたいのなら特別に教えてあげるけど」

「いえ、そこまでは。でも、指揮者と聞いてナントナク分かりました」

指揮者という説明が正しいのかどうかは俺にも分からないが、ソニアが納得できたのならそれでいい。ソニアは息を呑んで身体に力を入れた。緊張が伝わってくる。

「トープさん、お強いんですね？」

鳥肌が立った。

ソニアの言葉は、悲壮とも言える決意に包まれていた。出方を窺った自分が恥ずかしくもなる。

「聞いて欲しいことがあります」

それが何かなど、考えるまでもない。俺が聞き出そうとしていたことだ。今まで話そうとしなかったのは、口止めされていたからだ。

「待て、ソニア」

「トープさん、聞いてください。私は！」

何も言わず、何も聞かず。それがアントニオとの約束だ。

俺は、約束を破るわけにも、約束を破らせるわけにもいかない。

「約束を破ること、約束を破らせること、どちらが悪いことだと思う？」

「それは……」

勝手な行動は許されない。そんなものは、ただの甘えだ。

俺は、すべてを他人任せにすることで、責任から逃れたかっただけだ。命令されたからやった、そんな子供の言い訳で、一体誰が納得するというのか。

「一つだけ、教えて欲しいことがある」

問い質すべきこと、確認すべきこと、それは幾つもあった。だが、すべて頭から消えた。そんなことはどうでも良くなった。

「ソニアの夢を教えてくれ」

訪れる数秒の沈黙。

「世界一のヴァイオリン奏者になることです」

アミーの忍び笑いが聞こえた。ソニアではなく、俺に向けられたものだ。

「いいね、実に俺好みだ」

アントニオは、ファレスに息子を助けに行っている。二人ともまだ生きているかどうかは分からないが、ソニアに父と祖父の両方を失わせるわけにはいかない。

「アミー、俺はフェニックスへ行く。ソニアを頼むぞ」

「トープさん？」

ソニアは、俺に困惑の声を投げた。

「任せておいて」

果物の皮を剥く音。柑橘系の甘い香り。出来上がったジュースは、きっとソニアを落ち着かせてくれるだろう。

「トープさん！」

手を伸ばし、ソニアの頬を撫でた。

たったこれだけのことなのに、俺は何を恐れていたのだろうか。

「ソニア、世界一になれ。約束だ」

ソニアは今、どんな表情をしているのだろうか。分からないことが残念でならない。

ツーソンの家を出た俺は、トープ・ソノラが生まれた場所、フェニックス・シティへと車を走らせた。トープ・ソノラという俺の名前は、ソノラ砂漠でしか生きられないモグラ、という意味の蔑称だ。

シウダー・ファレスは、ソノラ砂漠に設置されているサワロ・アンテナの範囲外にある。つまりは巣穴の外。巣穴の外に出たモグラは、餌を獲ることができずに餓えて死んでしまう。

何の準備もせずには乗り込めば、どんな運命を辿ることになるのかは考えるまでもない。兵役と戦争を経験しているからといっても、俺はスーパーマンでもアクションヒーローでもない。

サワロ・アンテナがなければ、代替品を用意すればいい。ここフェニックスには、それがある。

「お帰り、トープ・ソノラ」

できるなら聞きたくなかった声が、国防高等研究計画局の実験施設に着いた俺を迎えた。声は扉脇のスピーカーから発せられている。

奴の名はジョゼフ。俺に、モグラ、という名を付けたフランス人マッドサイエンティスト。認めたくはないが、俺の恩人でもある。

ジョゼフは、俺が行った遠隔操作の情報をスタッフと共にここで分析し、新たな技術開発の糧としている。

「その名前は好きじゃないと言ったはずだ」

俺の声に反応して、扉の電子ロックが解除される。

開かれた扉の先には、ほんの数歩先にまた同じような扉があり、足を踏み入れると、後方の扉はロックされる仕組みだ。

「君好みのいい名前だと思うがね」

この他人を見下した口調は、いつ聞いても癪に障る。慣れることはない。相手にしないに限る。

「アミーから連絡を受けているはずだが」

二つ目の電子ロックが解除される。

残す扉はあと一つ。

「勿論だとも。早く君に自慢の玩具を見せたくて、うずうずしていたよ」

「一番の玩具は、この俺だろうに」

三つ目の電子ロックが解除され、最後の扉が開かれた。

ジョゼフの肉声が耳に届く。

「言うようになったな、トープ。良いことでもあったのかね？」

「大したことじゃない。失くしていた^{もの}意思を取り戻しただけさ」

夜明けが訪れた。

肌に当たる太陽の光を感じながら、シウダー・ファレスの西にある山の麓へと向かう。

そこには、とある麻薬密売組織のアジトがある。敷地を塀で囲んだ二階建ての豪邸で、メキシコには似合わない欧州建築の外観をしているようだ。

警察もこの情報を知っているが、監視するに留まっているようだ。

本当の理由は、署長が麻薬密売組織の頭・バシリオと癒着しているからなのだが、そうでもしなければ、署長の家族は全員が蜂の巣にされてしまうのだそうだ。

同情はするが、興味はない。

鉄柵で閉ざされた入口には、二人の見張りが立っていた。

車から降り、両手を上げて武器を持っていないことを示しながら、徒歩でゆっくり近づいた。

「止まれ、何者だ」

鉄柵の向こう側、俺に向けられたアサルトライフルの銃口が二つ。

「バシリオに話がある。取り次いでくれ」

歩みを止めずに声を掛ける。

「帰れ。お前には会わ……」

サブレッサー スプリングフィールドM21

消音装置付き長距離狙撃銃による、距離千三百フィート（約四百メートル）からの眉間に孔を穿つ精密射撃。

今の俺は、ただの密入国斡旋業者ではない。

目が見えなければ、容姿に惑わされることもない。武器を持った何か、ただそれだけが知覚できればいい。大きいか小さいかは問題じゃない。武器を所持しているかどうか、ただその一点のみ。

武器を向けてくる相手に対しては、躊躇なく引き鉄を引く。テレビゲームのモンスターに対するように。淡々と。冷徹に。冷酷に。

俺には覚悟がなかった。

殺すか殺されるか。

ハッキリしていて分かりやすいその現実を、受け入れるだけの覚悟がなかった。

「いいさ、勝手に会いに行く」

愛車フォードG P Wが俺を追い抜く際に、荷台のシートを引き剥がす。

荷台に搭載してあるのは、一分間に四十発の榴弾を発射できるグレネードマシンガン。勿論、ブレイク・マシン・インターフェイス人間の脳からの直接命令による遠隔操作に対応している。

フェニックスから持ち出した遠隔兵器は、まだまだある。

システム・フート
「開演時間だ」

声と同時に、俺の意識は上空二万マイルの衛星軌道上へ。

この敷地の周囲には、サワロ・アンテナの代替品を設置済みだ。

コンディショングリーン。チャンネルロック。システム、一部制限付きで稼動中。

まずは鉄柵の門をこじ開ける。

ローディング
「弾薬装填」

グレネードマシンガンに装填される第一弾は、暴徒鎮圧用ゴム弾。発射されたゴム弾は、十字形に展開して目標に打撃を与える。

ロック・オン
「照準固定」

目標は言わずもがな。邪魔な鉄柵の門だ。

セーフティ・オフ
「安全装置解除」

にわか俄に敷地内が騒がしくなった。いつまでも動かない車のエンジン音を不審に思ったのだろう。

だが、もう遅い。

ゴム弾は狙い通りに鉄柵の門を薙ぎ倒し、その場に倒れていた二人の見張りを下敷きとした。これで、車は簡単にはここを通れなくなる。

「見張りよろしく」

見張りの男であった物体に向けて、別れの言葉を告げる。

敷地内に入った俺の頭上を、次弾が高速で通過する。三発目までは爆薬が詰まった対物弾が発射され、建造物を破壊する。

三発目のグレネード弾は、見事に正面玄関を吹き飛ばした。

続く四発目と五発目は煙幕弾。射角を変え、二階の窓へ撃ち込む。

六発目は音響閃光弾。煙から逃れようと窓から顔を出した相手を嘲笑う一発。

屋敷の上空には、二十四インチ（約三十センチ）程度の小さな飛行船が複数飛んでいる。

当然、すべて俺の遠隔兵器だ。

遙か頭上から煙幕弾を投下し、俺の周囲を包み隠す。また、低反動のサブマシンガンを搭載し、上空からの強力無比な射撃を加える。

煙によって視界を奪うことで、俺自身は勿論のこと、上空の飛行船の姿をも隠すことができる。音に頼って気配を探ろうと耳を澄ませば、音響弾によって耳をやられる。煙の隙間に目を凝らせば、閃光弾が飛んでくる。

音と光と煙。この三つに支配された空間を見通せる者などいない。

音響弾は、イヤープロテクターをしていれば脅威ではなくなるし、閃光と煙幕は、元より俺には無効だ。少し臭うが。

あとは、玄関から飛び出してくる者、窓から銃を構える者、それぞれを個別に狙い撃つだけだ。麻薬密売組織のアジトとはいえ、何百人と常駐しているわけではない。制圧は時間の問題だ。

門から玄関まで百フィート（約三十メートル）。屋敷の間取りは頭に入っている。バシリオの部屋は二階の奥だ。

玄関前には、虫の息の男が横たわっていた。震える手で銃口を向けてきたが、引き鉄を引く力は残されていなかったようだ。

無意識に拾い上げたその銃が、かつて自分の頭を撃ち抜こうとした銃・ガバメントであると分かり驚愕する。同時に、笑いも込み上げてくる。

入ってすぐの広いエントランスホールは吹き抜けになっていて、正面には二階へ上がる大階段、左右には一階部分を見下ろせる廊下がある。待ち伏せに適した構造だ。

予想通り、複数の銃口が待ち構えていた。

発煙筒をまとめて投げ込み、視界を奪う。ホール全体を煙で満たす必要はない。自分の周囲か、相手の周囲か、もしくは両者の中間、そのどこかに視界を遮る煙があればいい。煙に紛れて飛行船を侵入させた時点で、勝負は決まっている。ヘリではなく飛行船を採用しているのは、ローターの風圧で煙幕が流れてしまわないようにするためだ。

エントランスを抜け、階段を上がり、奥へと進む。

突き当たりにあるバシリオの部屋にいるのは、一人だけだ。窓が割れてさえいれば、飛行船からの反響定位で把握できる。

扉を開ける前に、グレネードマシンガンの砲撃を止め、煙幕が残っている間に飛行船を退避させた。

ノブに手を掛け、引き開ける。

「派手に暴れてくれたな」

俺を迎えた声は、冷静を装っているものの、怒りを隠しきれていなかった。

「俺はいつも加減を間違うんだ」

大きな椅子に身体を埋めて、大物の余裕を演出しているつもりなのだろうが、そもそも俺はこいつ自身に興味がない。

「幾らで雇われた？ その倍を払おう」

「金はいらん」

「では、何が望みだ？ 言ってみろ」

「友人を捜している」

「では取引をしよう。見逃してくれたら、友人の場所を教える」

「断る」

ガバメントの銃口を向け、引き鉄を引く。銃弾は、スタンドライトを弾き飛ばした。

ひい、と情けない悲鳴が聞こえる。

俺は続けて引き鉄を引いた。瓶が割れる音がして、強いアルコールの匂いが漂った。テキーラでも入っていたのだろう。

「ここにはいない！ いないんだ！」

次の一発は、頭近くの背もたれ部分を抉り取った。

「分かった！ 言う！ 俺の店の倉庫だ！」

四発、五発、六発と、構わずに撃ち続けた。

「本当だ！ 助けてくれ！ もう手は出さない！ 許してくれ！」

残弾は一発。俺はその一発を天井に向けて撃った。バシリオのような小物が組織の頭であれば、これ以上大きな動きは起こさないだろう。

弾を撃ち尽くしたガバメントを投げ捨てる。

「次はないぞ」

あとは、アントニオを見つけ出してノガレスに帰るだけだ。

部屋を出ようと背を向けた瞬間、背後で拳銃の安全装置が解除される音がした。俺は反射的に身体を右に倒し、回避行動をとる。

左肩に激痛が走る。

どうやら手元に銃を隠していたらしい。回避行動をとっていなければ、致命傷を受けていただろう。

苦痛に耐えながら、足で扉を閉めた。

弾が命中したことはバシリオも分かっているはず。ならばとどめを刺しに来る。ただ閉めただけの扉では、時間稼ぎにもならない。

自分の迂闊を悔やむ間を惜しんで立ち上がり、壁に身を預けながら扉から離れる。

弾は肩を貫通しているが、左腕はしばらく使えそうにない。更に、撃たれたショックで全身の運動機能が低下している。

背後の扉が開き、嘲笑交じりの荒い息が聞こえてきたが、俺は意に介さず前進を続けた。

「命乞いをすれば、助けてやらんでもない」

その直後、銃弾が俺のすぐ脇を掠めて飛んでいった。

「ヒッハー！」

バシリオは狂ったような叫びを上げている。

耳障りで不快極まりないが、相手にしている場合ではない。

「こんな思いは……」

「何だって？ 聞こえねえぞ？」

俺のすぐ後ろの壁に弾が命中し、飛び散った破片が背中に当たる。

「……二度とごめんだ」

俺はゆっくりと振り向いた。

「やっと観念したか」

次の弾は、俺の足元に着弾した。発射時の銃口角度から、命中しないことは分かっていた。そんな虚仮威しは通用しない。

「許してやろうと思ったが、やはりお前のような男は嫌いだ」

「あ？」

「ロック・オン、セーフティ・オフ
照準固定、安全装置解除」

俺の狙いは、グレネードマシンガンの対物弾で奥の部屋を砲撃し、部屋ごと奴を吹き飛ばすことにあった。その際、廊下には爆風に晒されてしまう。

だから俺は、わざわざ別の部屋の入口まで歩いたのだ。

俺に銃口を向けた者が辿る末路は常に一つ。

「アンコール
追加演奏は一度だけだ」

グレネード弾が奥の部屋を直撃し、バシリオの背後の空間が一気に膨張する。

俺は廊下から室内へと身体を投げ出した。

床に倒れ込んだ際の衝撃が肩の傷に強く響いて、気を失いそうになったが、何とか爆風を避けることができた。

だが、これで終わりではない。

警察が来る前に周囲に設置したアンテナも回収して立ち去らねばならないし、アントニオの救出にも向かわねばならない。

それを思うと、頭が痛い。

「約束は守つて
本当に最初で最後にして欲しいものだ」

なぜかは分からないが、俺は笑っていた。

8

メキシコ合衆国ソノラ州。八割以上を砂漠が占め、西側はコルテス海に面している。

主な産業は、畜産と鉱業、そしてコルテス海を利用した観光業。

最後にもう一つ、アメリカへの密入国斡旋業。俺が生業としている仕事だ。

「おおアントニオ。珍しいな」

朝食のタマーレスにかじりついていた俺は、店に入ってきたアントニオに対し、店主のトーマスよりも先に声を掛けた。

ついさっき、アントニオが毎朝ここに来ていたことを聞いたばかりだ。

「怪我はもういいんですかい？」

アントニオはまだ足を引き摺っているが、順調に回復しているようだ。

アントニオは、バシリオが経営している酒場の倉庫に、息子と一緒に監禁されていた。二人とも酷い怪我をしていて、殴る蹴るの拷問を受けていたらしい。

「ご覧の通りさ」

盲人の俺が、ご覧の通り、という言葉を使うのは、なかなかハイセンスなユーモアだと思っている。俺は気に入っている。

「お祝いに乾杯でもしやしょう」

バシリオのアジトに乗り込んだあの日から、すでに一ヶ月が経過している。

その間、俺はフェニックスの研究施設に拘束されていた。拘束とは名ばかりで、傷の治療と目のメンテナンスを受けていたのだが、新しい感覚に慣れるのに時間が掛かったのだ。

「奴ら、このノガレスを密輸ルートにしようとしてやがったんですよ」

一連の顛末は、研究施設で聞かされている。

バシリオは、ノガレスの国境警備隊の一部を抱き込んで、新たな麻薬密輸ルートを作り上げようとしていた。

その第一手として、邪魔な密入国斡旋業者と情報屋たちを一掃する計画があった。

その計画の情報を掴んだソニアの父親は、即座に麻薬取締局へ知らせようとした。ところが、内通者であることに気付かれてしまい、すべての情報が入ったディスクを娘に持たせ、ノガレスのアントニオの元へと行かせた、というわけだ。そのディスクは、ソニアが俺の洞穴の傍に埋めていたそうさ。

以前から司法取引によるテキサス州への移民が決まっていた、すでに父娘揃ってアメリカ国籍を取得している。

ソニアとは、ツーソンで別れてから一度も会っていない。

アミーを通じて、お見舞い行ってもいいですか、との連絡が何度かあったのだが、すべて拒否した。

今の俺は、表舞台に立つことを許されぬ身。そんな俺に関わっていれば、ソニアの未来に悪影響を与えてしまう。

俺の名はトープ・ソノラ。その名が持つ、ソノラ砂漠でしか生きられないモグラ、という意味の通り、地面の下に住む者であって日陰者ですらない。

ソニアが夢を叶えるためには、これ以上関わってはならないのだ。

「お礼を言い忘れてやした」

「礼などいらん。好きでやったことだ、俺自身のためにな」

俺には夢があった。人生の目標があった。

世界中に音楽を届けたかった。世界一のコンサートホールで、世界一のリサイタルを開きたかった。世界一のヴァイオリン奏者になりたかった。

ソニアには、俺の代わりにその夢を叶えて欲しいと思った。その夢を叶えるには、支える存在、家族の存在が不可欠となる。

だから、俺自身のためにやったことなのだ。

「おや、こいつは珍しい」

アントニオが、驚きの声を上げた。

「お久しぶり」

「なんだ、アミーか」

どちらに言ったのか分からない挨拶に対する皮肉を込めて、精一杯がっかりしてみせる。

「ソニアちゃんの方が良かったかしら？」

「そんなことはない」

「トープ、貴方に渡す物があって来たの」

アミーは俺の右隣の椅子に箱を置いた。それは、アミーの家に持ち込んだままになっていた、俺のヴァイオリンケースだ。

「それと、ソニアちゃんからのお手紙」

「手紙だと？」

「大丈夫よ、音声で録音してあるディスクだから。すぐ聞きたいでしょ？」

アミーは俺の耳にイヤホンを押し付けた。

『 トープさんへ

これを聞いているということは、元気になられたということでしょうか？

面会もできないほどの重傷だと聞いているので、とても心配です。でも、大丈夫だと信じてこれを送ります。

私はドイツに留学することにしました。トープさんと約束した通り、世界一のヴァイオリン奏者を目指します。アミーさんが、ベルリン芸術大学の先生を紹介してくださったのです。今はドイツ語を勉強しながらなので、とても大変です。

そういえば、トープさんのお名前はドイツ語だったんですね。トープが場所という意味だったので、スペイン語のソノラと合わせたお名前はとても素敵だと思いました。

トープさんのヴァイオリン、本当はドイツまで持って行ってしまうおうと思ったのですが、やっぱりお返しすることにしました。

トープさんにも、ヴァイオリンを弾き続けていて欲しいから。

まだまだ話し足りませんが、私もあまり時間がありません。

だから、最後に一つだけ。

正直、ヴァイオリンの練習は毎日とても辛いです。逃げ出したいくなります。

だから、お願いがあります。私が世界一のヴァイオリン奏者になったら、そのときは、私と一緒にヴァイオリンを弾いてください。私はそのためだったら、どんなに辛くても耐えられます。

お返事をいただけたら、嬉しいです。

ソニアより 』

俺はイヤホンを外した。

「アミー」

「何かしら？」

「約束を破ること、約束を破らせること、どっちが悪いことだと思う？」

「そうね。難しい質問だけど、これだけはハッキリ言えるわ。悪いのは貴方よ、トープ」

薄々感じていたことをハッキリと言われると、かえって気持ちが良い。

ハッキリしていて分かりやすいもの。それが俺の好み。

「一つ、頼まれてくれるか」

「いいけど、高いわよ？」

俺はまだ、約束を果たしていない。

翌日の明け方、俺はただ一人砂漠の真ん中で、ヴァイオリンを構えた。

明らかに睡眠時間が足りていないが、演奏を失敗したときの口実にしてやる。

『 システム・フート
ヘタクソだが笑うなよ』

意識は上空二万マイルの衛星軌道上へ。

システムオールグリーン。

ソノラ砂漠に散らばる情報収集用サワロ・センサを使って、ヴァイオリンの音を集音する。その際、集音マイクまでの距離の差を利用して、屋外では起こらないはずの反響による音の重なりを実現する。ソノラ

の砂漠は、世界一のコンサート会場へと変貌するのだ。

ここで行われた演奏は、衛星回線を通じてどこまでも響きわたる。

そう、ドイツのソニアにも届けられるのだ。

時差は七時間。こちらでの明け方は、向こうでは昼過ぎだ。

こうして俺は、ヴァイオリンを演奏して聴かせるというソニアとの一つ目の約束を果たした。

俺の名はトープ・ソノラ。

トープは、ドイツ語で場所という意味を持ち、ソノラは、スペイン語で響きわたる・音という意味を持つ。

ソニアが教えてくれたこの言葉を都合良く意識すれば、音が響きわたる場所となる。

俺が毛嫌いしていたトープ・ソノラという名前は、案外心地の良い名前だったらしい。

文：村崎右近（むらさき・うこん）

単純明快な話から、酸いと甘いとを知る大人向けの話まで、ジャンルにこだわらずに書いています。

絵：女将（おかみ）

まだまだ未熟者ですので、どこまでできるか怪しいですが精一杯やりたいと思っています。どうぞよろしくお願いします！

あとがき

オリジナル短編小説誌「でんしょでしょ！」創刊号をお届けいたします。

ツイッターでの思いつきから作成が始まった電子同人誌ですが、なんとか無事発行にこぎ着けることができました。

ネット小説を愛する皆様にご満足いただける作品集になったのではないかと自負しております。

本誌作成にあたって、作者さま、絵師さま、そして、校正担当のメンバーのみなさまには大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

只今、2号の作成中です。

3号以降に関しては今のところ未定ですが、参加希望者が集まるようであれば発行への努力を惜しまないつもりです。

ご興味を抱かれたかたはぜひ下記サイトの方をご覧ください。

でんしょでしょ！ <http://densyo.sblo.jp/>

2011年4月吉日 なび

【オリジナル小説誌】
でんしょでしょ！ vol.1

<http://p.booklog.jp/book/23895>

定価 無料

でんしょでしょ！ 作成企画室 (<http://densyo.sblo.jp/>)

作成責任者：なび (<http://wanavi.squares.net/>)

校正担当者：藍間・椎堂かおる・damo・なび・冬木洋子・柚希実 (五十音順)

表紙イラスト/ロゴ：damo (<http://applechair.sakura.ne.jp/circuit/>)

初版：2011年4月

二版：2012年8月

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23895>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23895>